

博士学位請求論文

指導教員 松田 和信 教授

『梵学津梁』の調査と研究

佛教大学大学院 文学研究科 仏教学専攻

奥風栄弘

2018

『梵学津梁』の調査と研究	1
はじめに	1
第1章 『梵学津梁』についての導入部	5
第1節 高貴寺について	5
第2節 慈雲尊者について	5
第3節 慈雲尊者の弟子について	8
第4節 『梵学津梁』について	10
第5節 高貴寺DVDについて	10
第2章 目録より見た『梵学津梁』について	12
はじめに	12
第1節 高貴寺以外の『梵学津梁』目録について	12
第2節 高貴寺所蔵の『目録』について	19
第3節 各目録について	19
第4節 目録の中の記載などから『梵学津梁』は完成か未完成かについて	26
第1項 「附願海和尚書志」の記載より	26
第2項 (0000) 『慈雲尊者遺芳総目録・地』の記載より	28
まとめ	29
第3章 『梵学津梁』の現状について	31
はじめに	31
第1節 『梵学津梁』の分析方法について	31
第2節 各詮について	32
第1項 本詮について	32
第2項 末詮について	36
第3項 通詮について	37
第4項 別詮について	39

第5項 略詮について	39
第6項 廣詮について	40
第7項 雜詮について	41
第8項 雜録について	42
まとめ	42
第4章 『梵学津梁』所蔵の「弘法大師請来 四十二部」について	45
はじめに	45
第1節 「弘法大師請来 四十二部」とは	45
第2節 高野山金剛三昧院本（高野山本）について	46
第3節 「弘法大師請来 四十二部」の奥書について	48
第1項 『梵学津梁』の「弘法大師請来 四十二部」の概略	48
第2項 各奥書について	49
まとめ	69
第5章 『梵学津梁』の梵文『阿弥陀経』について	74
はじめに	74
第1節 『阿弥陀経』について	74
第1項 梵文の『阿弥陀経』について	74
第2項 漢訳『阿弥陀経』について	74
第3項 日本に将来された梵文『阿弥陀経』について	74
第2節 梵文『阿弥陀経』について	75
第1項 高貴寺DVD以外の梵文『阿弥陀経』と『梵学津梁』との関係	75
第2項 『建久年本』に関連する梵文『阿弥陀経』	75
第3項 文亀年本（石山寺所蔵本）に関連する梵文『阿弥陀経』	79
第4項 その他の梵文『阿弥陀経』	81
第3節 高貴寺所蔵の梵文『阿弥陀経』について	82
第4節 各写本について	83
第5節 梵文『阿弥陀経』ローマナイズ対照と分析	88
第1項 単語の変化について	88
第2項 梵文の校訂について	89

まとめ	91
第6章 『梵学津梁』の梵文『普賢行願讃』について	93
はじめに	93
第1節 『普賢行願讃』について	93
第1項 梵文による『普賢行願讃』について	93
第2項 漢訳『普賢行願讃』について	93
第3項 日本に将来された梵文『普賢行願讃』について	93
第2節 梵文『普賢行願讃』について	94
第1項 高貴寺DVD以外の梵文『普賢行願讃』について	94
第3節 慈雲と梵文『普賢行願讃』について	96
第4節 高貴寺所蔵の梵文『普賢行願讃』について	97
第5節 各写本について	98
第6節 ローマナイズしたことから判ること	110
まとめ	113
第7章 『梵学津梁』の梵文『金剛般若経』について	114
はじめに	114
第1節 『金剛般若経』について	114
第1項 梵写本について	114
第2項 漢訳について	115
第3項 梵文『金剛般若経』の日本への伝来について	116
第4項 高貴寺以外での梵文『金剛般若経』について	116
第2節 高貴寺所蔵の梵文『金剛般若経』について	118
第1項 高貴寺所蔵の梵文『金剛般若経』について	118
第2項 各写本について	118
第3節 梵文『金剛般若経』の原本について	124
第1項 奥書の調査	124
第2項 各奥書について	125
第3項 真阿弥陀佛について	127
第4項 阿満得壽師の『金剛般若経』の梵本について	128

第5項 『附願海和尚書志』の『金剛般若經』の梵本について	129
第4節 Max Müller本との関係	131
第1項 Max Müller本に使用した梵本	131
第2項 イギリスに梵写本が届いた時期について	135
第5節 梵文『金剛般若經』ローマナイズ対照と分析	136
第1項 単語の変化について	136
第2項 梵文の校訂について	137
まとめ	141
『梵学津梁』についての総まとめ	142
参考文献	145
略号一覧	147

『梵学津梁』の調査と研究

はじめに

本論文では、江戸時代に河内国の高貴寺（大阪府南河内郡河南町平石）の住職であった慈雲尊者（1718－1805）が、編纂した『梵学津梁』についての調査と研究を試みた。梵字によって書かれた写本が、我国には多数存在している。その中でも『般若心経』『金剛般若経』『普賢行願讃』『阿弥陀経』の4本は、特筆すべきものである。『般若心経』『金剛般若経』『阿弥陀経』は海を渡り、イギリスのMax Müllerの許で校訂出版された。また完全な梵文『阿弥陀経』は日本でしか、その梵写本が発見されていない。日本での梵学は、弘法大師空海（774－835）が入唐僧として、般若三蔵たちから本格的に研鑽したことに始まる。入唐八家たちの活躍により、梵字で書かれた多くの経典が我が国に入ってきた。平安時代から連綿と梵学は師匠から弟子へと脈々と継承されていった。時代は下って江戸時代には、梵学は最高潮を迎えるのである。岡山の宝島寺の寂巖（1702－1771）と慈雲は、それまでの梵字の経典を写すことから、梵文法をもって経典に解釈をつける水準に達した。時代的な背景としては、国学、洋学、文献学の発展が間接的に考えられる¹。同時代の国学者には、四大人とよばれる荷田春満（1669－1736）賀茂真淵（1697－1769）本居宣長（1730－1801）平田篤胤（1776－1843）がいる。また洋学では、安永3年（1774）に『解体新書』を訳出した前野良沢（1723－1803）杉田玄白（1733－1817）がいた。そして稲村三伯（1758－1811）は、日本最初のオランダ語辞典といわれる『ハルマ和解』を寛政8年（1796）に完成させていた。書誌や文献学関係としては、塙保己一（1746－1821）が『群書類従』を編纂した。『群書類従』正編の完成は安永8年（1779）からはじまって、実に41年を費やしたという。このような学問の高揚が、慈雲の梵学にも何らかの影響を与えたと筆者は考えている。慈雲は、全国にあった梵写本を収集し、梵写本の解釈や異本対照や辞書の編纂に従事していた。その集大成は『梵学津梁』一千巻として編纂されたとしている。あまりにも膨大であり、すべての経典が刊本のように第1巻から収められているのではない状態である。その形態も多様で和紙に書かれたものや折り本に書かれたものがあり、刊本として完成されたものも収められている。同じ経典の複本も多く存在したり、欠番も

1 永原慶二監修『岩波日本史辞典』岩波書店 1999. 参照

高柳光寿編『角川日本史辞典』角川書店 1966. 参照

多くあり、複雑な状態である。先行研究としては、一部の経典についての発表はなされているが『梵学津梁』の全体像として論じた研究はされていないのが現状である。

本論文では、長らく未調査であった高貴寺に保管している『梵学津梁』の調査と研究を試みた。高貴寺で写真資料として作成された高貴寺DVDを使用しての調査と研究を試みた。慈雲の御遠忌（二百年忌）を記念して、高貴寺では梵学津梁関係のCDを作成した。その後高貴寺の好意により、DVDに再編集した資料を入手できた。資料の数が多いため、大乘経典は何項目かに絞っての論述となったが、過去にあまり発表されなかった全体像の把握も試みた。各章の概略を示しておく。

第1章 『梵学津梁』の導入部分について

本章は『梵学津梁』の導入部分として『梵学津梁』の編纂された背景として高貴寺や慈雲や慈雲の弟子について述べている。あわせて『梵学津梁』の構成を概略であるが示した。本論文で使用する高貴寺の『梵学津梁』のDVDの構成についても説明している。本章により『梵学津梁』作成の背景と『梵学津梁』の構成している概略を把握ができるようにした。

第2章 目録より見た『梵学津梁』について

本章は『梵学津梁』の目録を調査、研究対象とした。先行研究や高貴寺以外にある『梵学津梁』の目録についても調査をおこなった。後半では、高貴寺に残っている目録を調査して、類似性や相違を検証した。慈雲の目指した『梵学津梁』編集についての概略が把握しようと試みた。焦点である『梵学津梁』一千巻収集が完結したかについても言及した。併せて、第3章の作業に入るための目録の資料の選択をおこなった。目録を絞って、比較一覧表を作成してみた。

第3章 『梵学津梁』の現状について

本章では、高貴寺DVDに収められている写本や経典を検証して、慈雲が残した『梵学津梁』について考えてみた。第2章で絞った3種類の目録と高貴寺DVDの比較して、慈雲が収集した経典についての調査と研究をおこなった。『梵学津梁』は7部（本詮、末詮、通詮、別詮、略詮、広詮、雑詮）に仕分けられている。第2章の結果より作成された比較一覧表に基づいて、各部の経典の特徴を考察した。多くの経典については、紙面の都合述べられなかった。例えば、貝葉は目録上では数種類が記載されているが、高貴寺DVDは貝葉本体でなくその写しが、1点のみが収められている。また、文法書に該当する『七九鈔』関係は、その重要さが認識されており、多く編纂され、刊本も重版されたことに注目した。梵文の比較対照方法として『梵学津梁』は「諸譯互證」という方法も考案した。また梵学

とは直接は関係ないが、ヨーロッパも含む海外事情誌の『泰西輿地圖説 7巻』も収められていた。

第4章『梵学津梁』所蔵の『弘法大師請来 四十二部』について

『梵学津梁』は本詮の第1巻目から『弘法大師請来 四十二部』が配されている。『梵学津梁』の出発点が『弘法大師請来 四十二部』である。『弘法大師請来 四十二部』は、慈雲の弟子である尼僧の義文尼がていねいに写したあとがみられる。本章は義文尼が写した『弘法大師請来 四十二部』を中心にして、奥書から多くの場所から、また多くの人を経由して高貴寺に集まったことが判るので調査してみた。元の経典が、高野山の金剛三昧院所蔵本や東寺所蔵本や御室（仁和寺）の所蔵本であった。これから『梵学津梁』の編集には、多くの場所から多くの人を経て経典が入手されたことを考えさせられた。

第5章『梵学津梁』所蔵の梵文『阿弥陀経』について

本章では『梵学津梁』所蔵の梵文『阿弥陀経』を通して調査し、検証をおこなった。慈雲は、3種類の写本をもって校訂をおこなったとしている。慈雲が校訂に使用した写本が、他所にも存在していることを調べてみた。『梵学津梁』所蔵の梵文『阿弥陀経』の概略を調査し、一部のサンスクリットの特徴も検証している。慈雲の校訂の概略も述べてみた。また、慈雲が校訂に使用した法宣の写本があり、法宣という人物も判明した。慈雲の二大弟子の法護、諦濡が『梵文阿彌陀経 義釋』を刊行したが、その校正者に浄土宗の典壽がおり、典壽という人物も調べてみた。

第6章『梵学津梁』所蔵の梵文『普賢行願讃』について

本章では『梵学津梁』所蔵の梵文『普賢行願讃』を通して調査し、検証をおこなった。慈雲は、梵文『普賢行願讃』の梵写本は空海の将来した梵本のみが現存しているとして、梵本は4系統に分かれて伝搬したと考えた。その4系統に分かれてた梵写本を入手して校訂本を編纂したとしている。慈雲が校訂に使用した梵写本が、他所にも存在していることも明らかになった。『梵学津梁』所蔵の梵文『普賢行願讃』の4種類の写本を対照して、サンスクリットの特徴も検証し、慈雲の校訂方法も検証してみた。4種類の写本のひとつが、真宗の僧侶の海輪の所持本であった。海輪という僧侶を調査した結果、華嚴宗の鳳潭との関係が判明した。

第7章『梵学津梁』所蔵の梵文『金剛般若経』について

本章では『梵学津梁』所蔵の梵文『金剛般若経』を調査し、検証をおこなった。梵文『金剛般若経』については、先行研究が全くない状態である。梵文『金剛般若経』は慈雲の遷

化後に収集、校訂された写本である。奥書からは複雑な経路で入手したようである。梵写本を捜索した真阿弥陀仏の特定をおこなった。次に融通念仏宗の詮海の仲介で、詮海自身が写したものが、高貴寺に送られたことを確認した。高貴寺では校訂本を作成して、梵文と漢訳二本を並べて対照するに至った。明治時代に入っては、イギリスの外交官Ernest Satowや真宗僧侶の金松空賢の仲介により写本がイギリスに送られたことも研究の対象とした。それにより、南条文雄とMax Müllerにより校訂本が完成された。慈雲の遷化後に得られた梵文『金剛般若経』の存在意義は、時代を超えたものであると感じた。

このように『梵学津梁』は、多くの場所、多くの人を経て編纂されたものである。宗派も真言宗を超えて、天台宗、天台真盛宗、融通念仏宗、浄土宗、真宗の僧侶が関与としていた。また、慈雲やその弟子たちは、写本を収集するだけではなく、辞書の編纂、文法書の編纂、写本の校訂、漢訳との対照などをおこなった。その梵学知識の水準は、非常に高度といえる。明治時代に入ってもサンスクリット学を志す人にも大きな影響を与えた。本論文により『梵学津梁』の内容を少しは明らかにできると思う。あわせて、今までほとんど発表されていなかった梵文『金剛般若経』の検証にも着手してみた。最後になりますが、高貴寺住職の前田弘隆師には、高貴寺DVDの写真資料の使用や高貴寺訪問時には、原本の拝見や数々の貴重なお話を伺いました。紙面ではありますが、お礼を申し上げます。

第1章 『梵学津梁』についての導入部

第1節 高貴寺について

神下山高貴寺は、大阪府南河内郡河南町平石の高野山真言宗に属する寺院である²。開山は役行者で本尊は五大明王である。言い伝えによると筒底男命が、降臨した場所なので山号を神下山という。また役行者が法華経28品に模した28の修験霊場のひとつで、普門品に当山をあてたとしている。それで香花供養したので香花寺と称したとする。弘仁年間に弘法大師が一夏滞在した時に高貴徳王菩薩を感得し高貴寺と寺名を改めた。弘法大師の弟子智泉大徳が、大いに寺門を興隆させた。後鳥羽上皇によって十三重石塔も寄進された。南北朝時代には後醍醐天皇より祈祷を命じられるなどした。平岩茂直が笠置から後醍醐天皇迎え、平石城が足利勢に攻略されて、高貴寺も焼け落ちた。その後高貴寺は、観心寺に属する寺院となった。安永年間に慈雲尊者が入山し、郡山藩主柳沢保光の帰依を受けて、寺門繁栄をなした。

第2節 慈雲尊者について

慈雲尊者（享保3年1718－文化元年1805）

慈雲尊者は諱を飲光（おんこう）と称し、自ら百不知童子と号していた。俗姓は上月であ

2 旧石川郡白木村が、1956年に町名変更で河内郡河南町となった。

3 前登志夫、永島行善著『観心寺』（古寺巡礼西国 2）淡交社 1981, p106.

「徳川時代、寛永の頃、塔頭槇本院の檀家に、徳川の旗本甲斐庄がいたため、当寺（観心寺のことである。筆者補足）は槇本院を中心として漸時復興する。当時徳川からの圧迫を免れるため、河内の寺々が槇本院を本寺としていた。」としており、観心寺塔頭の槇本院の勢力の範囲が、うかがえる。

【慈雲尊者全集 第17巻 pp.47－48】

「乍恐以書付奉願上候 當平石村高貴寺の儀は元來無本寺にて古義一派の靈場に御座候 一略一先年槇本院江因縁御座候而附屬請ケ候後是迄槇本院兼帶所に御座候處 一略一 右慈雲比丘高貴寺諸堂坊中石蔵院月照坊東之坊中之坊寶物は勿論。山林田畑諸書物等に至迄高貴寺 附の諸色一山不殘此度慈雲比丘へ附屬仕度奉願上候 一略一 河州錦郡観心寺槇本院 廣秀安永二年巳石川近江守様」としており、槇本院より慈雲尊者に高貴寺を寄付する願いを提出している。石川近江守宛に観心寺槇本院の廣秀和尚によって、安永2年（1773）に出されている。

4 大和郡山藩第3代柳沢保光公（1753－1817）で、慈雲尊者の俗弟子（飲明居士）となる。

った。父の上月安範（1665－1730）は播州田野村（兵庫県神崎郡香寺町）の人⁵で、赤松氏に連なる家系であり、幼くして大阪に出てきた。財を軽視して義を重視するような狭気の人であった。母親のお幸（後にお清と称する）は、徳島の人で桑原氏の出身であった。お幸は高松藩に仕え、大阪の米倉に勤務する川北又助の養女となり、上月安範に嫁いだ。慈雲は享保3年7月28日（1718）に大阪中之島（大阪市北区中之島5丁目）にあった外祖父（川北又助）の家（高松藩蔵屋敷内）で生まれた⁶。七男一女の七男として誕生した。幼名を満次郎といい、後に平次郎と称した。13歳の時に大阪の田辺にある法楽寺の忍綱貞紀和上について出家した⁷。14歳で悉曇の学習を始めた。15歳の秋に「如意輪法」を修した時に、不思議な体験をして、仏教に深く帰依するに至った。16歳の時に、師匠の命により京都に上って見聞を広めた。およそ3年において、伊藤東涯（1670－1736）に入門して、経史詩文を習った。19歳で河内（大阪）野中寺の秀巖和上のもとで修行を始め、沙弥戒を受ける。21歳で野中寺の秀巖和上より、具足戒を受ける。22歳で忍綱貞紀和上より、法楽寺を譲られる。24歳の時に法弟の松林閑節に法楽寺を託した。信州に赴き、信州佐久郡内山にあった曹洞宗正安寺の大梅禅師（1682－1757）に師事した。足かけ3年の間に悟りを得たとしている。27歳で河内高井田にあった長栄寺（西之坊と称していた）を託される。親證、學法、學賢らが法弟となしていた。28歳の時に鑑真以来我国に伝わる戒律が、一定していなかった規則を制定した。これを正法律と称し長栄寺をその最初の僧坊とする。32歳で「根

5 【岡村圭真 2004 p.24】 兵庫県佐用郡佐用町としている。佐用町にも「田野」という集落はある。また、兵庫県神崎郡香寺町にも「田野」という地名がある。【慈雲尊者全集 第17巻 附録 pp.49】の「尊者俗縁法名記 新集」の高貴寺墓碑では、上月安範の欄に「播州神崎郷之産」としている。よって、筆者は訂正をおこなった。

6 【岡村圭真 2004 p.24】 大阪市北区玉江1丁目としている。しかし、町名変更で中之島となっている。よって、筆者は訂正をおこなった。

7 【密教大辞典 p.1621】

「摂州法楽寺二世字忍綱、紀州和歌浦の人なり。幼くして、洪善普攝尊者に従ひて出家し、事教に通じ悉曇を善くし、持律嚴正なり。法楽寺に住して師跡を継ぎ、河内高井田長栄寺を再興し、兼ねて堺浦光明院を管す。寛延三年十二月七日寂す。壽八十、夏三十七。弟子に慈雲、閑節、親證の三匠あり。」

本僧制 五条」を制定し、正法律の興隆に力を尽くした。⁸35歳の時に僧侶の正しい袈裟の資料として『方服図儀』を著した。37歳では『神儒偶談』を著す。39歳ごろに高野山の真源阿闍梨より梵文『普賢行願讚』を授けられた。これにより、梵学研究に入る契機となった。41歳で雙龍庵という草庵を結び、修行と研究を続けた。この7月に『南海寄歸伝解纜鈔』7巻を書き上げる。42歳の時には、根来座主の常明僧正より土巨（地蔵）流を伝授される。48歳より雙龍庵で『普賢行願讚』の梵文の講義が始まり、この頃から『梵学津梁』の編集が始まったと考える。54歳の時に信者の懇請により、京都の阿弥陀寺に住した。56歳の時に観心寺の楨本院より、高貴寺を慈雲に譲られた。58歳で十善戒についての法語を著した『十善法語』12巻が完成した。59歳の時に阿弥陀寺から高貴寺に入寺した。69歳で高貴寺を正法律の本山として『高貴寺規定十三条』を制定した。71歳ごろより熱心に神道の研究を始めた。後に『雲伝神道』として大成される。78歳で両部曼荼羅を講じ『両部曼荼羅随聞記』を著す。86歳の時に『理趣経請義』で漢訳の還梵を試みる。87歳の8月に長栄寺で発病するが、9月に京都の阿弥陀寺で療養する。療養中にも講義を続け、文化元年

8【慈雲尊者全集 第6巻 pp.70-72】では、下記の「根本僧制五条」が書かれている。

第一 一切事須依律而判不得顧人情及任己臆

第二 若欲依律而行事律文或闕或不了須依經及論藏所說

第三 若三藏所說於事不可行者或聖言未具者則須依支那扶桑諸大德所誥及現前僧伽和合

第四 當山規矩一切諸宗如法如律之徒悉是一派同袍假令有別所屬本山亦不妨於當山執行

法事如其爲沙彌及新學比丘爲依止爲和上亦通無妨

第五 律儀是正法之命脈禪那是眞智之大源及八萬四千法門悉皆無非甚深解脫要路須各隨

其所藥日夜專精修習勤學不得懶懈懈怠悠然送光陰及諍論淺深違於宗我

木南卓一編集『長谷寶秀先生遺墨遺文集』木南卓一発行 p132,1977.

では以上の5条を長谷寶秀師が、簡潔に判りやすく書いている。下記に示しておく。

第一条 一切の事須らく律に依つて行はずべし

第二条 律文或は欠け或は不了ならば、須らく經論の所說に依るべし

第三条 律の説、行ふ可らざるものは、須らく支那日本諸大德の説に依るべし

第四条 自他派の別を存せず

第五条 諸宗の浅深を論ず可からず

(1805) 12月22日の夜半に遷化する。著書は梵文関係を主として多数に及ぶ。また多くの弟子がおり、愚黙親證、照堂護明禪師、豊峰法護律師、明堂諦濡和上、智幢法樹和上、詮海和尚が有名である。尼僧の弟子も多くおり、暁堂慧日式又、皓月宗顛尼律師、蓮心院法泉慧琳禪尼、祥台院操山了義式又、葉山義文求寂尼などがいた。

第3節 慈雲尊者の弟子について

1) 照堂護明禪師 (1735－1780)

字は照堂と言ひ、諱は護明と稱した。紀州海部郡(和歌山県)の相坂村の出身であり、明堂諦濡律師の伯父になる。出家の動機は、幼いころに弓で遊んだ時に打った矢が遊び仲間の目にあたり、失明させたことに遡る。安永3年(1774)春に尊者の後を嗣いで高井田長栄寺第三世となった。安永5年(1776)に慈雲が河内の高貴寺に隠棲された後は、京都の信者たちの教化に勤めた。皆からも尊敬されており「教授和上様」とも呼ばれていた。安永9年(1780)8月17日に京都阿弥陀寺において46歳で遷化し、高貴寺に葬られた。

2) 豊峰法護律師 (?－1801)

字は豊峰と言ひ、諱は法護と稱した。俗姓は井上氏で、長栄寺に近い高井田村の出身であった。30歳を過ぎて尊者に従って出家した。法護は既に妻子を持ち、家督も継いでいた。出家の時は誰にも告げずに、ちょっと高井田へ行くと言って出たまま出家したという。戒律をよく守り、勤勉でよく梵語に精通した。『梵学津梁』の編纂には最も大きく貢献した。高貴寺を正法律の本山と認定してもらうためにも力を尽くした。江戸の幕府へも出かけ、遂には許可を得た。江戸では増上寺に滞在し、増上寺で『梵本阿弥陀経』を講義した。その後は長い間、阿弥陀寺に住し尊者の教化に助力した。享和元年(1801)3月29日に故里で寂し、高貴寺に葬られた。

3) 明堂諦濡和上 (1751－1830)

字は明堂と言ひ、諱は諦濡、拙菴と号した。紀州海部郡(和歌山県)の相坂村の出身であり照堂護明禪師の甥にあたる。護明、法護、諦濡の三人が尊者門下の三哲といわれている。護明、法護は尊者より先立ってしまったので、諦濡和上が尊者の後嗣者となった。安永9年(1780)に護明禪師が寂したので長栄寺第四世となった。文政13年(1830)9月20日に80歳で長栄寺の金仙閣で寂し、長栄寺に葬られた。功績としては尊者の略伝として『正法律興復大和上光尊者伝』一卷の著書がある。諦濡和上は詩文に優れおり『詩集』『金仙閣文集』の詩文集がある。

4) 智幢法樹和上 (1776－1854)

字は智幢と言ひ、諱は法樹、訥庵また大有萬年と号した。豊前（大分県）の出身で、幼年にて蓮華院で出家した。慈雲の高名を聞き、九州からはるばる高貴寺を訪ねて尊者に師事した。寛政11年（1799）に慈雲82歳の時に24歳の智幢は具戒を受けた。尊者の遷化は87歳であるから、僅か5年であったが戒律や梵学を熱心に学びんだ。慈雲の遷化後は兄弟子達に就いて学んだ。諦濡和上の示寂により、天保4年（1833）からは長栄寺第六世として教化をおこなった。また高貴寺第4世として、尊者の墓を守り30年以上四衆を教化した。嘉永7年（1854）3月12日に長栄寺の金仙閣において79歳で寂し、遣命により高貴寺西之院跡に葬った。

5) 暁堂慧日式又

寛延3年（1750）2月11日に高井田の長栄寺で尊者に従って剃染した。僅かに11歳であり、以後は学行に精励した。尊者の「千衣裁製」の発願には三十二衣もの多くの袈裟を作製した。梵字、漢字に長じており『梵学津梁』の編集には、大きな役割を果たした。40歳後半に京都に住んで、阿弥陀寺に参じて尊者の説法を聴聞した。また皓月尼など在京法縁の尼僧とも交流し、慈雲の教えの普及に努めた。慈雲の和歌を集録して『雙龍大和上御歌』を作った。文化3年（1806）8月24日に河州平石村の阿弥陀堂で寂した。寿67歳。

6) 葉山義文求寂尼

京都の出身で一条家の堀川氏有縁の人であった。京都洛西にあった梅畑善妙寺の住職をしていた。千衣裁製には1000枚の御袈裟の第1枚目を作製し、亡くなるまでの8年間に16枚の衣の御袈裟を作っている。梵字や習字に長じており慈雲の法語などを筆受した。義文尼は慈雲の「十善法語」の講義を望んでいた。しかしながら、第1回目の筆記役を勤めたが、第2回目は開講までに没した。安永2年（1773）12月11日京都一条新町の寓居で35歳の若さで寂した。

7) 詮海和尚 (1786－1860)

融通念仏宗の僧侶で、号を戒珠院という。俗名は中島馬之助といった。天明6年に大和の山辺郡九条村筑紫（奈良県天理市）で生まれた。8歳で融通念仏宗の西念寺東海和尚の門下に入った。15歳で添上郡稗田の常楽寺住持となった。18歳の時に慈雲より沙彌戒を受けた（於大和七条松之坊）。それ以後は諦濡和尚や智幢和尚に師事し、万延元年75歳で示寂した。

第4節 『梵学津梁』について

『梵学津梁』は、慈雲の編集による梵学に関する資料集である。収集されたのは、日本に伝わった梵語（サンスクリット）に関する資料集で、1000冊を数えたという。収集された資料を7部門に分けている。部門の名前は本詮、末詮、通詮、別詮、略詮、広詮、雑詮としている。『梵学津梁總目』によると本詮には法隆寺、清凉寺、高貴寺などに所蔵される貝葉（高貴寺所蔵分以外は複写と思われる）9葉を挙げている。そして『弥陀経』や『行願讃』などが記されている。本詮は、日本に伝わった梵写本を集めたものといえる。末詮には『七佛名諸譯互證』『弥陀経諸譯互證』『心経釋』『普賢行願讃釋』などが挙げている。末詮は、漢訳との対照や梵文の解釈をおこなった部門である。通詮には『梵字悉曇章』『悉曇字記』『七九鈔』などが挙げられている。通詮は文法に関する部門である。別詮には『千字文』『梵語雑名』『多羅葉鈔』『枳橋易土集』が挙げられている。別詮は梵語辞典関係の部門である。略詮には、主に『a』から『kṣa』までの梵語辞書が挙げられている。略詮はアルファベット順に単語を編集して、梵字辞典の編集をした部門である。広詮には『胎蔵界曼荼羅鈔』『金剛界曼荼羅鈔』が挙げられている。広詮は梵字、梵語の参考資料の部門といえる。雑詮は果宝の『創学鈔』浄嚴の『三密鈔』寂嚴の『稽古録』などや『蒙古文字』『和蘭文字』『大唐西域記』『南海寄歸傳』が挙げられている。詳しくは第3章にて検証したい。

第5節 高貴寺DVDについて

慈雲の二百年遠忌を迎えるにあたり、上山春平氏の起案と支援で『梵学津梁』を写真化して、保存することになった。高貴寺住職の前田弘隆師が「慈雲尊者二百年遠忌の会」などの協力により、完成させたものである。当初はCDだったが、利便性の良いDVDに保存をおこなった。DVDは、DVD1、DVD2-1、DVD2-2、DVD3、DVD4-1、DVD4-2、DVD5、DVD6の合計8枚に保存されている。資料は「総目録 本詮」「末詮」「通詮」「別詮」「略詮」「広詮」「雑詮」「雑録 その他」「東京国立博物館貸出分」の9部に区分されている。昭和5年に諦了師により、編纂された(0000)『慈雲尊者遺芳総目録・地』を参考にして作成された。各部について以下に述べてみる。

①「本詮」には資料番号(0000)『慈雲尊者遺芳総目録・地』から(0077)『仏説救抜焰口餓鬼陀羅尼』まで、DVD1に収められている。『慈雲尊者遺芳総目録・地』は本詮には入らないが、この目録を基準にしているため、一番に収めているようである。『梵本心

経』や『梵文阿弥陀経』などがみられる。ただし(0051)『阿弥陀経 梵本 上中下』は、画像は入っていない。⑨「東京国立博物館貸出分」のDVD6に保管されて、三分割されて(0450)『阿弥陀経 梵本 上』(0451)『阿弥陀経 梵本 中』(0452)『阿弥陀経 梵本 下』となっている。

②「末詮」には(0078)『弥陀経諸譯互證』から(0168)『梵文金剛般若経諸譯互證』までが、DVD2-1、DVD2-2に収められている。

③「通詮」には(0169)『慈雲尊者真 摩多體文』から(0240)『悉曇字記鈔 講録并科』までが、DVD3に収められている。

④「別詮」には(0241)『梵字悉曇章 弘法大師請来』から(0281-15)『枳橘集』が、DVD4-1、DVD4-2に収められている。

⑤「略詮」『略詮一(ア-アウ)』(0284)から『梵学津梁 略詮 要省』(0334)までが、DVD5に収められている。

⑥「広詮」『大元大蔵勘洞総録』(0336)から『梵学津梁 広詮 天象部全』(0352)までが、DVD6に収められている。

⑦「雑詮」には(0353)『悉曇蔵 一』から(0406)『梵学津梁総目録』までが、DVD6に収められている。

⑧「雑録 その他」には(0407)『雑記』から(0448)『華夷通商考卷5』までが、DVD6に収められている。追加分に(0335)『梵本 般若心経釋』(400)『瑜祇経』(0409)『蕪曼多聲略釋 再治』が納められている。変則的な順番になっている。

⑨「東京国立博物館貸出分」には(0449)『普賢行願讚 梵本』から(0459)『十善の系統 傳戒列名』までが、DVD6に収められている。

第2章 目録より見た『梵学津梁』について

はじめに

本章の目的は『梵学津梁』の目録を調査対象として、目録および付属する手記などより『梵学津梁』が本当に1000巻収められたかの検証をおこなった。あわせて、現存している經典と目録が一致しているかも確認してみた。高貴寺以外の『梵学津梁』目録についても調査をおこなった。そのあとは、高貴寺に残っている目録を調査して、類似性や相違を検証した。現存する『梵学津梁』の經典の番号が、どの目録に近いかの検証をおこなった。

第1節 高貴寺以外の『梵学津梁』目録について

高貴寺以外の『梵学津梁』目録を以下に列举して、概略を述べておく。雑誌に発表されたものは、一部重複しているものがあつたが、参考のために列举している。慈雲が貸し出しを許した副本があつたようである。第2節で述べるの高貴寺目録の②(0401)『梵学津梁総目草本』表紙には「別有副本而許他借也」と記されている。高貴寺以外の『梵学津梁』目録は、この目録の形式および經典名がほぼ同じものが多い。また、目録に記されている語句に同じものがみられる。同じ語句の慈雲の記載事項を以下に示す。

- (ア) 本詮の貝葉関係のあとに「更搜之宇内當得二三十葉」
- (イ) 本線の最後に「總束當得衆多今概而為三百卷」
- (ウ) 末詮の巻数 自三百一至三百九十七
- (エ) 末詮の最後に「凡九十七卷 但忿卒別之未得精詳」
- (オ) 通詮の巻数 自三百九十八至四百八十三
- (カ) 通詮の最後に「凡八十五卷 但忿卒別之未得精詳」
- (キ) 別詮の巻数 自三百九十八至四百六十三 (巻数の誤記がある。)
- (ク) 略詮の巻数 自四百六十三至五百八十八
- (ケ) 略詮の最後に「凡百二十五卷 但忿卒別之未得精詳」
- (コ) 廣詮の巻数 自五百八十八至

これらの記載がある目録は、貸し出し可能な副本からの転写と思われる。転写している間に高貴寺の情報を聞いたり、識者により加えられたり、削られたりしたと考えられる。こ

9 渡邊英明「慈雲尊者の梵學津梁」—特に略詮(辭典部)に就いて—「密教研究」73号1940, pp. 45—61.

がある。しかし梵語辭典関係の略詮部のみであるので割愛した。

の記載にも注意して、各目録に当たってみたい。

④『大正新脩大藏經 第84巻 810—812頁 梵学津梁總目録（1巻）』

『大正新脩大藏經』に載せられている目録である。目次には「慈雲選」となっているが、810頁の欄外に「高楠順次郎氏校訂」と記載されている。「本詮補」として『金剛般若經一本』と記載されている。しかし、目録には「明和三年七月晦日 布薩後教誥」と明和3年（1766）の記載がある。『金剛般若經』は、慈雲の滅後（文化元年1805）から数十年後の入手となり合致しない。また『弥陀經諸譯互證 津梁 三百十九末詮之十一 已刻』『弥陀經義釋 四巻 津梁 第三百四十二末詮第二之三十八 已刻』となっているが、それらが刊行されたのは、寛政7年（1795）で年代的に合っていない。略詮に関しては、相当省略されている。慈雲の記載事項は省かれており、巻数も通し番号に修正されている。巻末の「雑詮補」には、梵学に直接関係ない『南海寄歸傳解纜鈔慈雲撰』『十善法語慈雲撰』『廣方服圖儀慈雲撰』『略方服圖儀慈雲撰』『表無表章隨文釋慈雲撰』『無門關鑰慈雲撰』『神道慈雲撰』が記載されている。他の目録には、これらの記載は見当たらない。以上は高楠順次郎氏が校訂したときに付け加えられたと考えられる。

⑤南条文雄「慈雲尊者の梵學概（「中央公論」第拾四年五號 pp.23—29,1899）」

南条文雄師の義祖父である徳母院良雄贈嗣講が、文化五戊辰八月（1808）に写したものである。慈雲の遷化が文化元年（1805）であるので、遷化後に作成されたものである。題目は『梵學津梁七詮總目録』となっている。本詮目次、末詮目次、通詮目次、別詮目次、略詮目次、廣詮目次、雑詮目次、と記載されている。雑詮目次の次に「七詮外目次」と項目を追加している。具体的には『梵漢雙對集』『玖多波那記』『蘇漫多略釋 一卷』『源照略記 一卷』『字記便捷覽 三巻』『悉曇切紙十二通』『悉曠大底 明覺』『反音 全』『略嘆 全要決 形音義合 五部十一本』と書かれている。この目録の中で、

『弥陀經諸譯互證 已刻 津梁 三百十九末詮二之十一』

『弥陀經義釋 四巻 已刻 津梁 第三百四十二末詮第二之三十八』

『心經義釈 一卷 已刻 津梁 三百四十六末詮二之三十九』

などの記載がある。「已刻」以下に巻数の表示がされている。『弥陀經諸譯互證 已刻 津梁 三百十九末詮二之十一』（法護 諦濡 が編集）と『弥陀經義釋 四巻 已刻 津梁 第三百四十二末詮第二之三十八』（法護 江戸の典壽が編集）は寛政甲寅（寛政6年1794）に刊行している。『心經義釈 一卷』は文化4年（1807）に法護と浄土宗で江戸の典壽（?-1815）

により刊行されている。これにより『心経義釈 一卷』の刊行された文化4年（1807）以後に作成されたものまたは、加筆されたものと考えられる。慈雲の記載事項は、ほぼ同じように記載されている。巻数表示が、通し番号に修正されている。この通し番号は、㉔『大正新脩大蔵経 梵学津梁總目録』とよく一致している。高楠師は、この目録の巻数を流用したとも考えられる。

㉔泉芳璟「梵学津梁を論ずる」大谷学報 第9巻 第2號 1928, pp.219-244.

文中の目録は『丹山文庫』にある目録を転写したものである。本註と末註のみが、詳しく記載されている。他は概略のみを書いている。本註と末註だけであるが。巻数の記載はないが、慈雲の記載事項の本註分（ア）と末註分（イ）は記載されている。

㉕南条文雄『梵学に於ける慈雲律師の功績』

「言語雑誌」第壹巻第貳號 1900, pp.202-211.

さきに説明した㉔南条文雄「慈雲尊者の梵学概観」とほとんどが同じ文章である。

㉖小林雨峰「慈雲尊者の『梵学津梁』」『密教』第1巻第2號 1911, pp.85-11.

文中に『梵学津梁目録』が、記載されている。この目録は㉔南条文雄「慈雲尊者の梵学概観」で紹介した南条文雄師の義祖父の書いた目録を使用している。

㉗梵天『慈雲尊者及梵学津梁』「学鑑」第8巻第5號 1904, pp.11-17.

さきに紹介した㉔南条文雄「慈雲尊者の梵学概観」とほとんど同じ文章である。文末に

「以上。「中央公論」第14年5號南条博士「慈雲尊者の梵学概観」に由る。」

と記載されている。

㉘金岡秀友『柁尾コレクション顕密典籍文書集成』第12巻 平川出版社1981, pp.153-175.

目録を影印して、載せている。解説部は『梵学津梁』目録の一般的な解説と奥書部分だけを活字にしている。奥書を手がかりにして、筆者の判る範囲で解説してみる。この目録には、二つの奥書がみられる。

于時文化八未歳二月中旬塩飽嶋於妙智山正覺院快澄以御本写之了 vajra沙門重伝

天保十三壬寅歳十二月中旬西讚於七宝山延命閣拜写了 vajra乘円雅生年二十三

第1行目の奥書より重伝という沙門が、文化8年（1811）に塩飽島にある正覺院の快澄師の所持していた目録を写したとしている。塩飽嶋於妙智山正覺院は、現在の香川県丸亀市本島町泊あり、真言宗醍醐派の寺院である。江戸時代は、近隣の32ヶ寺を末寺に持つ

有力な寺であった。¹⁰第2行目の奥書では、天保13年（1842）に七宝山延命閣で円雅という僧が写したとしている。この目録の中で⑥南条文雄「慈雲尊者の梵學概観」と同じく

『弥陀経諸譯互證 已刻 津梁 三百十九末詮二之十一』

『弥陀経義釋 四卷 已刻 津梁 第三百四十二末詮第二之三十八』

『心経義釈 一卷 已刻 津梁 三百四十六末詮二之三十九』

などの記載がある。沙門重伝の加筆でなければ、これにより正覺院の快澄が『心経義釈 一卷』の刊行された文化4年（1807）以後に作成されたものと考えられる。この目録も慈雲の遷化後に作成されたものになる。慈雲の草本の記載分は、ほぼ同じ状態で書かれている。正覺院の快澄については、以下のとおりである。

快澄（1760-?）¹¹

宝暦10年（1760）生まれ。讃州塩飽島（香川県）にある聖宝理源大師の誕生地といわれる妙智山正覺院の住して観理房と称する。寛政から文化年間には備前真光院や高野山月輪院等に住んでいたと思われる。晩年に正覺院に住んでいた。著作は多くあり『悉曇初学階梯鈔一卷』『七九問答』『悉曇十八章双紙』『悉曇伝承日記口決』などある。

沙門重伝については、3種類の写本の奥書と表紙の書き込みに手がかりがあった。高野山親王院蔵の『悉曇八祖伝来事』¹²に

文化十三年十一月八日於讃陽象頭山金光院悉曇伝授余暇象頭山所蔵本頓写畢重伝行年三七
同じく高野山親王院蔵の『悉曇綱要鈔』¹³に同文の奥書がみられる。

文化十三年十一月八日於讃陽象頭山金光院悉曇伝授余暇象頭山所蔵本頓写畢重伝行年三七
同じく高野山親王院蔵の『siddham稽古草』¹⁴表紙の書き込みに

於走出浄瑠璃山持宝院覚円随筆 嘉永三年庚戌三月廿九日開筵 acarya 重伝師^{ママ}

（嘉永3年3月29日に始まった重伝阿闍梨の講義を、覺円が筆記したとしている。）

重伝阿闍梨は、文化13年（1816）に37歳であったから、生まれは安永9年（1780）ごろとなる。また、嘉永3年（1850）に悉曇の講義をしたとある。このことから、悉曇に通じた

10『日本歴史地名大系 第三八巻 香川県の地名』平凡社 1989, p352.

11『統真言宗全書』第四二 解説 高野山大学出版部 2008, p281. 参考

12【日本韻学史の研究 IIIp.1238】

13【日本韻学史の研究 IIIp.1592】

14【日本韻学史の研究 IIIp.1681】

学僧であったと考えられる。

⑤『梵学津梁總目』 「附願海和尚書志」 京都帝国大学図書館蔵分 1926年 複製刊行

この本は、天台宗の不行満阿闍梨の願海によって、書き留められたものである。元は京都帝国大学の国文学者の吉澤義則博士が所持していた本である。現在は京都大学付属図書館に所蔵されている¹⁵。筆者は、龍谷大学図書館にも所蔵していることを確認し閲覧したが、それは原本なのか複本かは不明である。また、入手の経緯も判らない。京都大学所蔵本は未見であり、龍谷大学図書館は、複写不可であった。しかし、大阪府立中之島図書館に京都大学図書館所蔵分の複本があった。長谷寶秀師により、大正15年に完成したものである。龍谷大学図書館所蔵本には、朱書きで文章の訂正がおこなわれていた。大阪府立中之島図書館所蔵本では、訂正結果を反映して書かれているようである。大阪府立中之島図書館所蔵本は、複写可能だったので入手することができた。今後の比較は大阪府立中之島図書館所蔵本を主にしていきたい。ただし、丁数や頁が書かれていない。必要あれば、註に載せた大槻信氏の「願海書誌」論文で、振り分けてある丁数を参考として記入していく。次に概略について述べてみる。まず願海についてと慈雲の目録の提供者である慧友についても紹介しておく。

願海（1823－1873）について¹⁶

勤王僧といわれた願海は、文政6年（1823）に上州高崎（群馬県）で生まれた。源氏の新羅三郎の末裔といわれる。14歳の時武州金鑽寺で堯猷に入門した。天保9年に江戸東叡山養育院にて、玉林院範海僧都により、剃髪受戒をおこなった。21歳で比叡山へ上った。弘化3年（1846）に比叡山千日回峰を發願した。嘉永6年（1853）に31歳で、千日回峰を

15『梵学津梁總目』 「附願海和尚書志」の研究として以下の論文がある。

伊藤祐昭「幕末における一書誌学者 願海 —梵学津梁目録より—」

『図書館界』7巻4号 1955, pp.140－141.

大槻信「願海書誌」『訓点語と訓点資料』第127輯 2011, pp.44－64 .

前者は、図書館学的な見方で、後者は国語学としての研究である。後者は『願海書誌』を印字化（残念ながら『梵学津梁目録』部分は省かれている。）したものであり京都大学図書館蔵本の全体像が判る論文である。

16 清水象蔵『不行満願海』 不行満願海宣揚會 1934.参考

藤堂祐範「願海伝資料」『文芸』第15年 第1号 1924, pp.79－90. 参考

満行して、以後大行満願海阿闍梨と呼ばれた。嘉永4年（1851）には常楽院の住職になっている。この頃に宗淵師（1786－1859）より円頂大戒を受け、慈心庵亮讓律師より密印灌頂や都法秘録などを受けた。安政3年（1856）の夏頃から、1年間ほど梅尾山高山寺の石雲院に寓居した。その後、安政5年（1858）には、紀州粉川寺学頭御池坊に住した。尊勝陀羅尼の宣布に力を注いだ。しかしながら、願海の非凡な才能と厳しい修行体制が、一山の衆徒に受け入れられなかった。文久3年（1863）に隠居願いを出し、粉川寺を去ったといわれる。隠居後は、比叡山の常楽院、東叡山養壽院（東京上野）に寓居した。慶応3年江州比良山（滋賀県）の葛川明王院に入り、明治6年（1873）に51歳で遷化した。願海の著書には『尊勝陀羅尼明驗録』『拾遺仏頂尊勝陀羅尼明驗録』『光明光呪和讃』『聖歡喜天叢書』『願海手記』などがある。

慧友（1775－1853）について¹⁷

慧友は、伊賀上野（三重県伊賀市）に安永4年（1775）に生れた。字は僧護といい、智積院第二十八世謙順（1740－1812）に入門した。享和2年（1802）28歳のときに京都の阿弥陀寺に於て尊者に従って實静（38歳）と供に進具した。同年に理由は不明であるが、慈雲の許を離れて高山寺に住した。高山寺では、聖教の調査や整理をおこない、伽藍の修理に力を尽くした。高山寺では、第1世を明恵とする由緒ある十無尽院の23世となった。嘉永6年（1853）に79歳で没した。

『梵学津梁總目』『附願海和尚書志』については『梵學津梁目錄總目 草本』と『梵學津梁目錄本詮總目』と「附願海和尚書志」の3種類の部分より編纂されている。概略を以下に述べる。

a) 『梵學津梁目錄總目 草本』（1－18丁）

『梵学津梁』の全体的な目録で、この部分の奥書（18丁表－18丁裏）を書き出してみる。

于時安政三年丁巳之歳三月四日 於西山梅尾峰寓居以高山寺藏本依師主高命遂寫功了
即日就于原本 令加朱一校畢 叡山沙門 無障金剛亮海識

17 赤尾栄慶 高山寺蔵『金剛項喩伽經』（浄院寺一切經）について

『学叢』京都国立博物館1992.

小宮 俊海「慧友僧護について」『現代密教』27, 2016, pp.109－139.

【慈雲尊者全集 首巻 p.214】

七詮目 本詮第一 末詮第二 通詮第三 別詮第四 略詮第五 廣詮第六 雜詮第七

prarvasyātmi maitramegha 草 享和壬戌春傳領之 高山寺沙門戒觀慧友

キクヤ如何二妻呼鹿ノ聲マデモ a vi ra hu kha vajradhātu vaṃ

安政丁巳三月十六日 山家後孝非人願海記

安政3年（1856）丁巳となっているが、安政3年は丙辰となる。願海は安政3年の夏頃から梅尾山高山寺の石雲院に寓居したので、丁巳は安政4年になる。願海の命を受けた弟子の亮海により、写されたとする。prarvasyātmiは不明であるがmaitramegha 草は、慈雲の起草である目録を示している。これは享和壬戌（享和2年 1802）春に慧友が傳領した慈雲の目録の草本である。慈雲の記載事項は、ほぼ同じように記載されている。

b) 『梵學津梁目録本詮総目』（19-36丁）

『梵学津梁』の本詮のみの目録である。本詮だけであるが、非常に詳しく書かれている。奥書（36丁裏）について、述べてみる。

維時安政四年歳次丁巳三月十日以高山寺蔵本遂寫功畢 金剛佛子亮海記

十一日加朱一校畢原本者慈雲大和上手沢草本也大行滿願海記之

安政4年（1857）に高山寺所蔵の目録を弟子の亮海によって写されたとしている。さきの目録も高山寺所蔵であったが、それは慧友が入手したものであった。この目録には慧友は、関与していないとも考えられる。しかしながら「原本者慈雲大和上手沢草本也」の文章より慈雲の持ち物であったことは間違いない。あとで、検証する高貴寺所蔵目録の（0000）『慈雲尊者遺芳総目録・地』と（0458）『梵学津梁 総目 雜詮之一』に近い目録である。經典名や巻数などが、高貴寺に現在残っている写本とも合致することが多い。

しかし經典の巻数が謝って重複されていた箇所があった。第37巻から45巻までが重複されている。重複の例を下記に示す。

第三十七巻 本詮之三十八 文殊五字真言儀軌 → 第三十七巻 本詮之四十八上 彌陀經

第四十五巻 本詮之四十七 般若心經 異本附 → 第四十五巻 本詮之五十五 三寶讚

本詮之五十六 觀自在讚

本詮之五十七 金剛手贊

だが、枝番となる「本詮之○」という番号は、通し番号で重複はない。『第四十二巻 本詮之五十二 妙法蓮華經』『第四十四巻 本詮之五十四 金剛般若經』の2本が未得とされた。他の經典は、現在は入手していないが、確実に存在場所が把握されており、将来的に

は入手可能であったのだろう。しかし『妙法蓮華經』と『金剛般若經』の梵本は、その時点では存在場所が不明であり、入手困難なものである。

c) 「附願海和尚書志」 (37丁以降)

この部分は、願海の随筆部分である。そこに書かれていることは、非常に広範囲である。寺院の経藏や本をよく集めている個人蔵書についての記載がみられる。筆まめで、細々としたことでもよく記載しているのには驚かされる。追加事項も多く書き加えられている。得られた情報は、漏らさずに記載しようとする姿勢がみえる。

第2節 高貴寺所蔵の『目録』について

高貴寺DVDを調べたところ、8種類あることが判明した。それらを列挙して、次に各写本の概略を述べてみたい。②③④⑧『慈雲尊者全集』¹⁸に載っているものである。

- ① (0000) 『慈雲尊者遺芳総目録・地』
- ② (0401) 『梵学津梁総目 草本』
- ③ (0402) 『梵学津梁総目 全』
- ④ (0403) 『梵学津梁草本目録 全』
- ⑤ (0404) 『梵学津梁総目 草本』
- ⑥ (0405) 『梵学津梁総目』
- ⑦ (0406) 『梵学津梁総目録』
- ⑧ (0458) 『梵学津梁 総目 雑詮之一』

この目録以外に『慈雲尊者全集』¹⁹のなかに『梵学津梁総目 五』という題目の目録があった。簡潔な目録であるが、本註で『梵網經 未得』『金剛般若經 一卷 未得』と記載されていた。

第3節 各目録について

- ① (0000) 『慈雲尊者遺芳総目録・地』

総目録は正式には『高貴寺所蔵 慈雲尊者遺芳 総目録 地』となっている。DVDの註では、昭和5年(1930)に諦了師(1894-1959)が編纂したとなっている。²⁰この時期に目録を作成した理由には、展覧会が関連していると考えられる。昭和5年に大阪府立図書館に於

18 【慈雲尊者全集 第9巻下 pp.383-491】

19 【慈雲尊者全集 第9巻下 pp.478-482】

20 長栄寺第14代 住職 上月明厳諦了

いて、高貴寺所蔵のものと慈雲に関する催しが開催された。展覧会を開催した時に『高貴寺所蔵慈雲尊者遺著展覧目録』が、昭和5年10月に発行されている。展覧会に出品に備えるために『梵学津梁』に関する書物の確認をおこなったと考えられる。全てではないが、經典名の次に奥書の記入がある。長い奥書はその一部のみを記入している。經典名の上に○と▲の印がみられる。○と▲に関しては説明がない。しかし展覧会用の目録には「○印は、尊者真筆▲は尊者加筆」と説明がしている。○印は尊者真筆に合致し▲印は尊者加筆に合致する。

この目録の「畧詮」部には、經典名の上に付箋が貼られているものがられた。付箋には、朱書きで「高楠博士へ貸出」または「高楠一」と書かれている。高貴寺DVDを作成するにあたり、この目録が参考にされた。

② (0401) 『梵学津梁総目 草本』²¹

『慈雲尊者全集』の目録の(二)として紹介されており、慈雲の真筆としている。表紙には以下のように書かれている。

山外不出 梵学津梁總目艸本 高貴寺奥之院 別有副本而許他借也

この目録は山外不出であるが、副本が別に有り、これは貸出が許されると述べている。用紙に四角の枠を書き入れて、縦に9行に区切っている。追加された写本名が、枠の外の上の欄外部分に記入されている。各項目は下記のように記されている。下線を引いたところに、巻数の誤記がみられる。

本詮總目

末詮總目 自三百一至三百九十七

通詮總目 自三百九十八至四百八十三

別詮總目 自三百九十八至四百六十三

略詮 自四百六十三至五百八十八

廣詮 自五百八十八至 雜詮

たとえば通詮と別詮を比べると「通詮總目 自三百九十八至四百八十三」「別詮總目 自三百九十八至四百六十三」の下線の箇所のような巻数の誤記入がみられる。

先に述べたように以下の慈雲の記載事項があった。

本詮の貝葉關係のあとに「更搜之宇内當得二三十葉」

本線の最後に「總束當得衆多今概而為三百卷」

21 【慈雲尊者全集 第9巻下 pp.391-408】

末詮の最後に「凡九十七卷 但忿卒別之未得精詳」

通詮の最後に「凡八十五卷 但忿卒別之未得精詳」

略詮の最後に「凡百二十五卷 但忿卒別之未得精詳」

これらの慈雲の記載事項と各詮の巻数表示が、他の目録では訂正されずに書かれていた。この山外不出の②(0401)『梵学津梁総目 草本』に対する貸し出し可能な副本が、目録として伝搬し『梵学津梁』の内容を開示していったと思われる。

③(0402)『梵学津梁総目 全』²²

『慈雲尊者全集』の目録の(四)として紹介されている。表紙には『梵学津梁総目全』と書かれている。また「訥菴蔵」(訥菴は智幢のこと 1775-1854)と表紙右下に記入している。最終頁には「沙彌唯如拜寫」(唯如?-1846)と裏表紙内側に「河内高貴寺所蔵」と書かれている。きれいに清書されており②(0401)『梵学津梁総目 草本』と同じように用紙に四角の枠を書き入れて、縦に9行に区切っている。各項目は下記のように記されている。

本詮第一	自一至三百	末詮第二	自三百一至三百九十七
通詮第三	自三百九十八至四百八十三	別詮第四	自三百九十八至四百六十三
略詮第五	自三百六十三至五百八十八	廣詮第六	自五百八十五
雑詮第七		本詮追加	金剛般若経梵本 一卷

②(0401)『梵学津梁総目 草本』とほとんど同じである。さきの目録が、欄外にあるものなどを整理し直して、作成されたものと思われる。この目録には「本詮追加」という記載があり『金剛般若経梵本 一卷』と記入されている。『金剛般若経』の梵本を入手してから作成されたものである。しかしながら『金剛般若経梵本』は、天保8年から9年(1837-1838)に高貴寺に送付されたものである²³。慈雲遷化後30年以上たって入手したものである。それをもとにして、漢訳などを対照した第三百二十巻末詮第二之十二『梵文金剛般若経諸譯互證』の完成は、弘化4(1847)となる。ここで、巻数が「第三百二十巻末詮第二之十二」となっているのは『梵学津梁』の編纂が、慈雲が亡くなって40数年後も続けられていたといえる。

22 【慈雲尊者全集 第9巻下 pp.464-477】

23 拙稿 高野山大学大学院紀要「高貴寺蔵新出の梵文『金剛般若経』写本について」2008.

④ (0403) 『梵学津梁草本目録 全』²⁴

『慈雲尊者全集』の目録の(六)として紹介されている。元の書き手は不明であるが、智幢和上が転写したと解説している。表紙には『梵學津梁總目 全』と書かれている。非常に簡略化された目録である。たとえば、本詮には『大佛頂陀羅尼』『大隋求陀羅尼』『大妙金剛佛頂經』の3種類しか記載されていない。合計で40ほどの経典が記載されているのみである。各項目は以下のようにになっている。

本詮 末詮 通詮 別詮 略詮 廣詮 雜詮 雜録

雜録という項目が、増えている。雜録には、以下10種類のもが記載されている。

『梵音訛正考 上』『梵音訛正考 下』『梵音訛正考 略本』『悉曇字義文證』
『山門東寺連聲辨』『千手千眼大悲心陀羅尼』『梵篋三本jñadipam』『梵讚』
『金剛界念誦真言校合記』『三印羯名』

さきに説明した①(0000)『慈雲尊者遺芳總目録・地』には「雜録」を設けてある。諦了師は、部分不明や慈雲の遷化後に入手したものを雜録に収めたとしている。『梵音訛正考 上下』『梵音訛正考 下』『悉曇字義文證』『山門東寺連聲辨』などは、諦了師の雜録中にみられる。これらは、慈雲遷化後に収められた可能性もある。

⑤ (0404) 『梵学津梁總目 草本』

表紙には『梵學津梁總目 艸本』と書かれている。各頁に7行ずつ、きれいに書かれている。各項目は下記のようにになっている。

本詮總目 末詮總目 自三百一至三百九十七
通詮總目 自三百九十八至四百八十三 別詮總目 自三百九十八至四百六十三
略詮 自三百六十三至五百八十八 廣詮 自五百八十五至 雜詮

掲載内容も巻数の誤記も②(0401)『梵学津梁總目 草本』とほとんど同じである。

⑥ (0405) 『梵学津梁總目』

表紙には『梵學津梁總目』と書かれている。表紙の右下に「道林蔵」(智湧道林律師?—1848)と書かれている。内題は『梵學津梁 品目』となっている。各頁に9行ずつに書かれている。各項目は下記のようにになっている。

本詮第一 自一至三百卷 末詮第二 自三百一至三百九十七

24 【慈雲尊者全集 第9巻下 pp.483—491】

通詮第三 自三百九十八至四百八十三 別詮第四 自三百九十八至四百六十三
略詮第五 自三百六十三至五百八十八 廣詮第六 自五百八十五至 雜詮第七

掲載内容も巻数の誤記も②(0401)『梵学津梁総目 草本』とほとんど同じである。

⑦(0406)『梵学津梁総目録』

表紙には『梵學津梁總目録』と書かれている。最後の表紙の裏に「高貴寺蔵」記入されている。表紙には和紙を使用している。しかしながら、各頁は青地の紙が使用されている。その青地紙の紙に白文字で書かかれている。高貴寺DVD画面より察するに「工業用青写真」で製本されたものと思われる。内容は『大正新脩大蔵経 第84巻 梵学津梁総目録』と一致する。経緯は判らないが『大正新脩大蔵経』の編纂の下書きをコピーして、高貴寺に収められたものかと思われる。

⑧(0458)『梵学津梁 総目 雑詮之一』²⁵

この目録は、2種類の目録が合本されている。まず第1の目録の表紙には『梵學津梁總目録總目 雑詮之一』と書かれている。『慈雲尊者全集』の目録の(三)として紹介されている。各頁は、ほぼ7行ずつ書かれている。項目は以下のように書かれている。

本詮總目 梵學津梁末詮目録 梵學津梁通詮目録 梵學津梁別詮目録 梵學津梁略詮目録
總五十卷 百例目録 別詮 雑詮 九百五十一至一千卷 雑詮第七 別詮目録

この目録は、非常に詳しく記載されている。本詮の第1巻の『胎蔵大儀軌』から始まり、雑詮の第九百六十八巻二十五の『教授儀』まで書かれている。「二十五」は、枝番と思われる。雑詮の第968巻の項は十五『同一一鈔』(悉曇字記鈔)高野山宥快から二十五の『教授儀』までが、まとめて書かれている。百例目録 別詮 雑詮九百五十一至一千巻は經典名のみが書かれており、その經典が第何巻目かは表示されていないので、覚書と思われる。目録中には、走り書きの經典名ものもみられる。注目すべきは、本詮の四十二部に関する部分が、一致しているものが多い。この目録の巻の表示(第○巻本詮之○)の經典名と現在残っている巻の表示と經典名が、非常に似ていることが判った。慈雲は、この目録を指針にして、經典の収集を始めたのではないだろうか。慈雲の収集の目標が、現れていると思う。

第2の目録は『梵學津梁目録』と書かれている。²⁶『慈雲尊者全集』の目録の(一)として紹介されている。

本詮 自一至三百六十一 經部 律部 論部 贊部 真言部 雜部

末詮 自三百六十二至四百五十三 都一百二卷

通詮 自四百十四至四百六十 別詮 自四百六十一至四百八十

略詮 自四百八十一至五百都 廣詮 自五百一至九百七十五 三寶 佛部 僧部 國界

本詮入掌録 四十二部梵本 海龍王寺貝葉 嵯峨清涼寺貝葉 岩松院貝葉 常喜院真言集

以上のように項目が書かれている。次に各項目の中に、また本詮と廣詮には小項目を設けている。この目録には雜詮が書かれていない。本詮入掌録という項目が最後に付け加えられている。本来は本詮に入るものが、列挙されている。全体的には、内容は簡略であり、合計100種ほどの名称が記入されている。

小結

1.目録の形式について

a) ほとんど同じ数の經典名が記載された『梵学津梁目録』

④南條文雄「慈雲尊者の梵學概観」

③泉芳環「梵學津梁を論ずる」

⑤金岡秀友『梅尾コレクション顕密典籍文書集成』

①『梵学津梁總目』「附願海和尚書志」a) 『梵學津梁目録總目 草本』(1-18丁)

②(0401) 『梵学津梁總目 草本』

③(0402) 『梵学津梁總目 全』

⑤(0404) 『梵学津梁總目 草本』

⑥(0405) 『梵学津梁總目』

⑦(0406) 『梵学津梁總目録』

⑧(0458) 『梵学津梁 總目 雜詮之一』

b.簡略な『梵学津梁目録』

④(0403) 『梵学津梁草本目録 全』

⑧(0458) 『梵学津梁 總目 雜詮之一』後半部分

26 【慈雲尊者全集 第9卷下 pp.383-390】

c. 詳細な『梵学津梁目録』

①『梵学津梁總目』 「附願海和尚書志」 b) 『梵學津梁目録本詮總目』 (19-36丁)

⑧ (0458) 『梵学津梁 総目 雑詮之一』 前半部分

d. 大正末から昭和初めごろに作成された『梵学津梁目録』

i) 『大正新脩大蔵経 第84卷 梵学津梁總目録 (1卷) 』

① (0000) 『慈雲尊者遺芳総目録・地』

⑦ (0406) 『梵学津梁総目録』 工業用青写真

各目録に書かれている経典の数は、ほぼ② (0401) 『梵学津梁総目 草本』と同じか、それ以下となっている。② (0401) 『梵学津梁総目 草本』の別に副本があったとしている。その副本は貸し出しが可能であったことから、高貴寺以外の目録は、それが転写されていったと考えられる。それらは、ほぼ同じ数の経典名が記されていると考えられる。④南條文雄『梵學に於ける慈雲律師の功績』④小林雨峰「慈雲尊者の『梵學津梁』」⑤梵天『慈雲尊者及梵學津梁』の3種類は⑥南條文雄「慈雲尊者の梵學概観」を転写しているものである。それは良雄師が文化5年(1808)に写したものである。③泉芳環「梵學津梁を論ずる」は、一部分のみしか書かれていないので、全体像は不明であった。⑩金岡秀友『榎尾コレクション顕密典籍文書集成』は、転写された年代が文化8年(1811)と天保13年(1842)の2回になると判るものである。元の目録は『心経義釈 一卷』が「已刻」と書かれていることから、刊行された文化4年(1807)以後に作成されたものと考えられる。遅くとも1800年代の初めには、目録が転写されて地方に伝搬したことが判る。この転写された目録により地方では、慈雲の『梵学津梁』が高度な梵学の知識の集成であると認識されたと考えられる。⑨『大正新脩大蔵経 梵学津梁總目録』は、高楠師により相当校訂された箇所がみられた。

2. 目録から、慈雲は『梵学津梁』をどう編纂したかったのか。

⑧ (0458) 『梵学津梁 総目 雑詮之一』の前半部に注目してみれば、巻の表示(第〇巻本詮之〇表示)が、現存する本詮の最初に記載されている四十二部に関する部分が、一致しているものが多い。この目録を指針として、収集をおこなおうとしていたと思われる。

①『梵学津梁總目』 「附願海和尚書志」 b) 『梵學津梁目録本詮總目』 (19-36丁) も詳しく書かれており、これも現存する本詮の最初に記載されている四十二部に関する部分が、一致しているものが多い。しかしながら、残念ながら本詮のみの目録となっている。

3. 目録から『梵学津梁』は完成か未完かについて

⑧ (0458) 『梵学津梁 総目 雑詮之一』では最終巻数が、第968巻の『教授儀』までしか書かれていない。巻数が誤記されたままのものがある。①『梵学津梁總目』 「附願海和尚書志」 b) 『梵學津梁目錄本詮總目』 (19-36丁) では『法華經』『金剛般若經』などは未得と記されていた。全体として目錄の略詮は「一卷 カ」などと疑問の「カ」が記載されているものが多くみられた。略詮は草本の状態が多く、完成ではなく予想の巻数を書いているようである。慈雲の遷化が文化元年(1805)であるから、年代の判る目錄は、慈雲の遷化後に作成されたものといえる。この時点でも、慈雲の草本の範囲を超えた目錄ではなかった。いいかえれば、慈雲が遷化してからも『梵学津梁』の完璧な目錄が、完成していなかったことになる。であるから『梵学津梁』自体の完成には疑問である。以上の点から筆者は目錄自体も未完であり、併せて『梵学津梁』自体が未完であったと考えられる。

第4節 目錄の中の記載などから『梵学津梁』は完成か未完成かについて

目錄の中の記載と付属する手記などより『梵学津梁』は完成か未完成かについての考察をおこなってみる。

第1項 「附願海和尚書志」の記載より

「附願海和尚書志」(37丁表-38丁表)には、以下の記載があった。

右梵學津梁總目錄壹卷別詮目錄一卷ハ高山寺蔵外蔵本慈雲和上手澤草本ヨリ寫得之此ノ草本ハ故方便智院慧友阿遮梨親ク慈雲和上ヨリ傳頌之本也 サテ諦濡比丘ノ撰セル慈雲大和上ノ傳ニ梵學津梁一千卷雖未脱稿云々トアルニヨリテ 世間デハ梵學津梁凡ノ草稿ハ成就ノヨウニ思ヘ 此ノ道ニ志アル人人縁ヲ其子孫ニ便ヨリテ草稿ヲ寫得ヲモシ又タハ一讀ヲモ願ウ人々マアルヨシ 爾ルニ高貴寺ニモ草稿本漸ヤク百卷不足ト承ハルソレ故ヘ高貴寺ニテハ慈雲和上在世ノ日津梁ノ稿本ハ一集ニ慧友師ニ付屬致サレタルヨシニ申サルトカヤ 願海昨丙辰夏頃ヨリ事故アリテ當山石云菴ニ寓居シ山主吉祥雲院名密護十無盡院名證成兩帥ト時ニ面會茶話ノ次テ津梁ノコトモ尋ネシニ申サルニハ先師ノ話ニ慈雲 和上津梁の腹稿ハホゞ成就ナルヘケレト草本ハ一ニナラス 今此總目錄別詮目錄ニテモ凡ノ趣ハ知ラレタリソレノミナラスアレコレヨリ搜索シ集メラレシ一紙半葉ノモノハ申スマデモナク其他ノ書モ和上遷化ノ後ボツボツ散 失セシコトハ思ハルト申サレキト 其繼志ノ人ナキコト誠ニ為道大歎息也 此慧友名僧護遮梨ヨホドノ人ニテ其年二十代前後ニハ西東ニ奔走シ諸名匠ノ門ニ遊ビ道ヲ問ハレシヨシ 慈雲和上ノ門ニモ從シ法護諦濡一雲諸 師ト周旋シ其化ヲ輔ケラレシコト也 爾ルニ一雲慧友両

師ハ所以アリテ慈雲和上ノ門ヲ去リ

下線部に注目してみる。『梵学津梁』は、ほぼ完成といわれているが、まだ100巻程度の不足があるとしている。慧友が梵写本の収集を一手に引き受けていたようである。しかし慈雲の許を離れてしまったので『梵学津梁』完成に支障があった一因とも読まれる。願海は丙辰（安政3年1856）の夏頃から、梅尾山高山寺の石雲院に寓居したしていた。両名とも慧友の弟子になる吉祥雲院の密護（1810－1859）と十無盡院の證成（1811－1890存）よりの話によれば『梵学津梁』は、ほぼ完成となってるが、草本は1種類（草本ハ一ニナラス）ではないと述べている。これは、異本や複本などをさしているものと思われる。たとえば、梵文『普賢行願讚』の異本が4種類ある。『梵学津梁』には、4種の梵写本を収めている。慈雲が遷化してから、流出も始まっていることに心を痛めているようである。これらは、当時の『梵学津梁』編纂の進捗状態を忌憚なく述べている。慈雲の弟子である諦濡が記した『慈雲大和上ノ傳』は『正法律興復大和上光尊者傳』のことであり、これは『十善法語 十二卷』のあとに第十三巻として合併し刊行されている。『十善法語』は弟子の妙有により、文政甲申（文政 7年1824）に刊行された。慈雲の遷化が文化元年（1805）であるから、約20年後に刊行されたものである。諦濡によれば、慈雲が41歳から54歳の箇所に（宝暦8年－明和8年1758－1771）の箇所に「意作梵學津梁一千巻折為七詮」となっているが、続けて「其中雖有未脱稿者」と完成はしていないと読み取れる記載がある。願海の記述は安政3年（1856）の夏以降となり、慈雲の遷化より50年ほどのちとなり、諦濡が記したように慈雲が『梵学津梁』をほぼ完成したとする時代より、100年ほどの隔たりがある。これから、世間一般では既に完成されたと思われていたようである。しかし願海は、まだ100巻ほどの不足があると高山寺で聞いていた。慈雲存命中は、梵写本の収集の担い手である慧友もいたが、のちに慈雲の許を離れた。慧友に対しては、行動力や学識の評価は非常に高い。慧友が慈雲の弟子になって僅か1年足らずで、門下より出てしまっている。しかし、慈雲の正式な弟子になる以前より、慈雲の許で活躍していたと思われる。また、一雲（乙雲、龍乗）も慈雲の許を離れてたと記されている。願海が一雲も『梵学津梁』の編纂に努力したが、慧友と同じく慈雲門下を離れたと書いているが、これにも意味がある。一雲の略歴を述べて、この意味を考えてみたい。

一雲律師 (1772—1842)²⁷

譚は龍乗といい、字は乙雲と称した。備中郡羅島江長邑（現在の岡山県水島市連島町）の野上氏の出である。野上家は代々医者の家系であった。幼して、日開山法輪寺の老僧の龍辨師に入門した。四度加行を終えたのちに龍辨師が遷化した。それで連島の寶島寺（現在の岡山県水島市連島町）第31世であった真染（文徹）阿闍梨（1723—1797）の弟子となった。師の真染は、悉曇の大家である寂巖（1702—1771）の弟子である。19歳の時に高野山に登り、3年間滞在した。その後高貴寺の慈雲尊者の許で、7年間の研鑽に励んだ。享和年間（1801—1804）に京都の西京にあった阿彌陀寺の輪番の住職になった。しかし、1年ほどで辞退し、慈雲の許を離れてたという。理由として皎月尼破門に責任を感じたからといわれる。洛西の三宮寺の中興となり、40年ほど住した。修行に励み、毎月尊勝陀羅尼一萬回を唱え、平日には三密修法をおこなったといわれる。天保13年8月29日に71歳にて遷化した。著書に『梵本普賢行願讚』（智積院蔵版 天保三年）『表無表章玄談』『真正出家辨』などがある。

このように一雲は元は、慈雲と並ぶ悉曇学の大家である寂巖の孫弟子であり、曇寂や常明の系統を継ぐものであった。梵字の知識も持ち合わせた人物であった。慈雲派と寂巖派を結ぶ付ける立場にあったと思われる。惜しくも慈雲門下を離れたために梵写本の収集には少なからずの痛手は当然生じたと思われる。優秀な人材が慈雲の門下を離れた結果において、『梵学津梁』が完成に至らなかった原因とも考えられる。また、願海は慈雲遷化後には梵写本の他への流出が発生したとしている。ここには記載されていないが、実際に天保5年（1834）には『理趣経講義』が古書店に流出したこともあった。これらの願海の記載した理由により『梵学津梁』は完成されなかったと思われる。

第2項 (0000) 『慈雲尊者遺芳総目録・地』の記載より

目録には以下の記述があった。(img.0000-01)

但シ梵學津梁ハ尊者存命中ニ完結セルモノニ非ズ、即チ「部類不詮次セ随ヒ得ルモ随テ寫シ」加エタル故ニ御自筆ノ目録三本共ニ増減アリテ相同ジカラズ、或ハ卷頭ニ書加ヘ或ハ番号ヲ書キ改メ或ハ書目ヲ出入セラレタリ、更ニ弟子等書寫ノ目録ニシテ異ルモノ數種アリ、從テ甲ノ目録ニハ本詮中ニ出セル本ヲ乙ノ目録ニハ末詮中ニ加フル

27 【慈雲尊者全集 首巻 pp.365—367】

アリ、或ハ通詮入ルベキ性格ノ書ニシテ雑詮ニ加ヘラレシモノアリ、或ハ畧詮草稿中ニ末詮ノ書ヲ書キ加ヘラレタルモノ等アリ、又番号ノ如キモ一定セズ或ハ重複セルモノアリ或ハ脱落セルモノアリ或ハ書キ改メラレシモノアリ、或ハ甲本ト同本ナル乙本トガ番号ヲ異ニスルナリ、総計一千巻ト称スルモ亦大數ニ約セルモノニシテ確定セシモノニハ非シベシ、而モ高貴寺現存セルモノハ約五百巻ニシテ散逸セルモノ亦多カルベシ、且ツ全寺蔵中ニハ津梁目錄ニ載セザルモノニシテ津梁中ニ入ルベキ性質ノモノ多數ナリ、今目錄ヲ作成スルニ當リ比較研究シテ整理スルノ暇ナキヲ以テ唯ダ其ノヨロシキニ從ッテ配列シ、部分不明ノモノ並ニ尊者滅後新ニ集メラレタルモノハ之ヲ雜録中ニ編入セリ」

この記述は、目録や保管されている『梵学津梁』の状態を如実に表している。下線を引いた部分に注目してみる。

1. 「梵學津梁ハ尊者存命中ニ完結セルモノニ非ズ」

一般に『梵学津梁』は、完成されたとしている。しかし、諦了師は慈雲は、完成させていなかったとしている。

2. 「総計一千巻ト称スルモ亦大數ニ約セルモノニシテ確定セシモノニハ非シベシ」

総数で1000巻といわれる。しかしそれは、大まかな数で1000巻は確約されたものではなかったとしている。

3. 「高貴寺現存セルモノハ約五百巻ニシテ散逸セルモノ亦多カルベシ」

『梵学津梁』の約半分の500巻ほどが、残っていると述べている。

4. 「部分不明ノモノ並ニ尊者滅後新ニ集メラレタルモノハ之ヲ雜録中ニ編入セリ」

「雜録」という項目を新たに設けて、部分不明(?)や慈雲没後に収められたものを記載しているとしている。諦了師自身が高貴寺の弟子であるから、これには信憑性がある。これらの記載より筆者は『梵学津梁』は完成されなかったと思う。

まとめ

まず、慈雲は『梵学津梁』を作成する方向として「弘法大師御請来四十二部」を筆頭におこなったことが、目録の巻数表示と高貴寺DVDに残されている經典の巻数表示との一致から判明した。高貴寺以外での目録は、1800年代初頭に転写されたが多く『梵学津梁』完成の目録でなく、慈雲の草本の副本を転写したと筆者は考えた。もし『梵学津梁』が完成していたならば、目録自体も完成したものが流通していたと思う。(0458)『梵学津梁

総目 雑詮之一』前半部分では、最終巻数が、第968巻の『教授儀』までしか書かれていない。また、弘法大師将来四十二部のうち『小随求真言』と『金剛藏降三世讚王』は不明となっており、この2冊は入手不可能な状況である。また『金剛般若経』は、慈雲の遷化後の入手である。『梵文金剛般若経諸譯互證』は、慈雲遷化後40年以上しての完成である。

願海の手記「附願海和尚書志」からは、100巻ほどの未収の経典があったとしている。一雲や慧友という優秀な弟子が慈雲門下から離脱したことも、完成に至らない原因のひとつと考えられる。慈雲遷化後は『梵学津梁』からの流出も始まったと述べている。実際に『理趣経講義』が古書店に流出ことがあった。

諦了師の(0000)『慈雲尊者遺芳総目録・地』から「梵學津梁ハ尊者存命中ニ完結セルモノニ非ズ」と「総計一千巻ト称スルモ亦大數ニ約セルモノニシテ確定セシモノニハ非シベシ」の完成に消極的な文言があった。

以上のことにより『梵学津梁』は「完結」されなかったと考える。

第3章 『梵学津梁』の現状について

はじめに

この章の目的は『梵学津梁』の現状について考えてみたい。高貴寺DVDに収められている写本や經典の検証をおこなってみたい。方法として、各詮ごとに作業を進めていきたい。第2章で検証したように、各目録は詳しく經典名などが記載されているものや簡素なものがある。補助資料として、4種類の目録を使って經典の一覧表の作成し、参考資料として、論文の末掲載している。目録の中で、特に(0458)『梵学津梁 総目 雑詮之一』前半部分(以後「前半部」という表示は省略する。)は詳しく書かかれており、200種類以上の經典がみられる。願海の編纂した『梵学津梁総目』「附願海和尚書志」に含まれる『梵学津梁目録本詮総目』(19-36丁)も詳しく書かれているが、残念ながら本詮部のみであった。他の目録は、本詮第一巻からという番号の記載がなく、ほとんどが『弘法大師請来 四十二部』とひとくくりに記載されている。この作業より、高貴寺に保管されている『梵学津梁』を明らかにできると思う。

第1節 『梵学津梁』の分析方法について

高貴寺DVDについては、写本の表題の目次が添付されている。改良前のCDには、内題も一緒に書かれていた。ただし紙面の都合上、特に気にかかった箇所を調査している。また、収められたものは、刊本、写本、編纂されたもの(釋や諸譯互證など)あるが、經典という名称で統一している。以下の4種類の目録を使用して、一覧表を作成した。論文末の資料編に載せておく。

- 1) (0458) 『梵学津梁 総目 雑詮之一』
- 2) (0401) 『梵学津梁総目 草本』に便宜上經典名の頭に番号を付けて、表記している。
- 3) 高貴寺DVD表題目次(CDの内題目次も使用する)便宜上、高貴寺DVD番号を頭に表記して、記載している。DVD内の經典表示は、經典名に『』を付けて、DVD番を付けるときと特に奥書などを表示する時は、比較表の表示のまま使用することがある。
- 4) (0000) 『慈雲尊者遺芳総目録・地』この目録は高貴寺DVD作成の指針となった目録である。便宜上であるが、目録にない番号を付けている。經典が本詮の一番最初にあるものは、頭に「本詮-番号」を記入し、次に經典名を付けた。例として「本詮-1」は「第一巻 本詮之一胎藏大儀軌 上」の前に付けて便宜をはかっている。

第2節 各詮について

第1項 本詮について

高貴寺DVDに収められている経典は、まず『御請来目録』に載っている経典が書かれている。その他に梵文『阿弥陀経』梵文『般若心経』『仏頂尊陀羅尼』『大随求陀羅尼』梵文『金剛般若経』などが収められている。梵文『普賢行願讃』は『御請来目録』の中に入っている。『御請来目録』の経典は、各々に巻数番号が付けられている。この巻数は(0458)『梵学津梁 総目 雑詮之一』に記載されている『御請来目録』の経典の巻数番号に非常に近い番号である。(0401)『梵学津梁総目 草本』は簡潔に書かれている。項目は僅かに12項目と簡略化している。1.『弘法大師請来』に42巻と記載し2.『八家秘録所蔵』86本カと記載されている。『弘法大師請来』は『御請来目録』のことである。大同元年(806)に空海が、唐より持ち帰った経典、仏具、曼荼羅などをもとに作成した目録である。梵字関係は『梵字大毘盧遮那胎藏大儀軌 二巻』から『梵字悉曇章』まで「四十二部四十四巻」となっている。『御請来目録』分は42巻と2巻少なくなっている。『御請来目録』中で『小随求真言』と『金剛藏降三世讃王』に関しては不明となっているからであろう。

『梵字悉曇章』は、通詮に入れられている。『八家秘録』は、天台の学僧である五大院安然(841-?)が作成した目録である。正式名を『諸阿闍梨真言密教部類総録』という。入唐八家と呼ばれる僧の請来目録により、編纂されたものである。具体的には最澄(767-822)空海(774-835)円仁(794-864)円行(794-852)慧運(798-869)常暁(?-865)円珍(814-891)宗叡(809-884)の将来目録をもとにして、作成されたものである。

高貴寺現存の貝葉関係は(0029)『貝文 城州宇治田原巖松院所蔵貝葉』(第四十一巻本詮五十一)の貝葉の写本が1点のみである。

(0000)『慈雲尊者遺芳総目録・地』では、以下のように貝葉本体も記載されている。

本-30.巻第四十一 本詮一之五十一 貝文城州宇治田原巖松院所蔵寫

本-79. 貝多羅葉 一葉 (貝葉は奈良国立博物館に保存しているようである。)

(0401)『梵学津梁総目 草本』の貝葉は、以下の6種類(0401)『梵学津梁総目 草本』の貝葉は、以下の6種類が記されている。

3. 和州法隆寺所蔵貝葉 2葉
4. 海龍王寺 1葉
5. 洛西清涼寺 1葉
6. 城州調子瑞泉寺 1葉
7. 當寺 1葉 (「當寺」とは、高貴寺を示し元は城州宇治田原巖松院にあった貝葉)

8. 近江阪本一寺 3葉カ（近江阪本一寺 の一は聖衆来迎寺を表すものである。

「カ」は推測の意味の「カ」である。）

本詮の貝葉関係のあとに「更搜之宇内當得二三十葉」と記されている。

(0458) 『梵学津梁 総目 雑詮之一』貝葉は、以下の3種類が記されている。

第三十九卷 本詮之四十九 本朝海龍王寺

第四十卷 本詮五十 本朝洛西清涼寺

第四十一卷 本詮五十一 本朝宇治田原巖松院貝葉

高貴寺DVDの貝葉の巻数と本詮番号（第四十一卷 本詮五十一）が一致している。

(0401) 『梵学津梁総目 草本』の貝葉は、以下の6種類9葉以外に慈雲は、まだ20から30葉の貝葉が、国内に存在しているとしている。貝葉の概略は、法隆寺は『般若心経』と『尊勝陀羅尼』で、海龍王寺（奈良県奈良市法華寺北町にある真言律宗）はアビダルマ関係の二十二根に関するものと思われる²⁸。洛西清涼寺（京都府京都市右京区嵯峨にある浄土の寺院。通称名は嵯峨积迦堂）は『俱舍論』の随眠品と智品に関連するものとしているが、今後の研究に委ねる²⁹。城州調子瑞泉寺は、近江矢橋玉泉寺（滋賀県草津市矢橋町にある浄土宗寺院）の間違とされる³⁰。近江矢橋玉泉寺は『世間施設論』関連の「須弥山」について記載されている³¹。高貴寺の貝葉に関しては、あとに記載する。近江阪本の聖衆来迎寺（滋賀県大津市比叡辻にある天台宗の寺院）は『金剛頂経』に付随する儀軌の一部といわれている³²。現在確認されたところでは、これらの寺院以外にも貝葉が存在している。京都の東寺、大阪の四天王寺、京都の百万遍知恩寺、園城寺（大津市園城寺町の天台宗の寺院で、通称は三井寺）と高野山の宝寿院（宝性院と無量寿院が合併で、元は宝性院の所蔵）がある。概略を書いておく。京都の東寺は、アビダルマに関連する五蘊について書いている。大阪

28 松田 和信「東寺・海竜王寺貝葉考」－アビダルマ写本研究（3）－

『印度学仏教学研究』第37号巻 第2號 1989, p.909.

29 岡教達「本朝古伝貝葉梵笈阿毘曇の断片」『大正大學々報』第六, 七輯 1930, p.61.

30 岡教達「本朝古伝貝葉梵笈阿毘曇の断片」『大正大學々報』第六, 七輯 1930, pp.47.

31 松田和信「梵文断片Loka-prajñaptiについて」－高貴寺・玉泉寺・四天王寺・

知恩寺貝葉 インド所伝写本の分類と同定－『仏教学』 第14号 1982, p.6.

32 乾仁志「聖衆来迎寺所蔵貝葉について」『密教学会報』 第21号 1982, p.1.

乾仁志「聖衆来迎寺所蔵貝葉について(二)」『印度学仏教学研究』第31巻第2號 1983, p.620.

の四天王寺、京都の百万遍知恩寺は、連続した貝葉（171葉と172葉）である。『世間施設論』の地獄に関する箇所³³の記載である。園城寺（三井寺）の貝葉は、智証大師円珍が唐より持ち帰ったといわれており、大日経の真言が書かれている。高野山の宝寿院で貝葉が、大正5年(1916)に高楠順次郎氏により確認された。貝葉の内容は『大般泥洹経』であり、法顕訳とよく合致しているようである³⁴。

では、高貴寺の貝葉に該当する（0029）『貝文 城州宇治田原巖松院所蔵貝葉』については、松田和信氏によれば『世間施設論』の一部として結論づけられている。『有部六足論』のひとつのである『施設論』の第一部門の『世間施設論』と確認されている。『世間施設論』は、チベット訳のみ現存するとしている。現在、奈良国立博物館の貝葉は、箱に入って収められているらしい。内箱と外箱には以下のように記されている³⁵。

函書曰 尊者朱書 安永元年壬辰七月十一日寺主善淳律師付之maitra megha也
又曰 傅光師墨書 貝多羅葉一枚被寄附比丘善淳所無相之者也小比丘傅光記焉
天明四甲辰年正月十一日

外函曰 傳聞慈雲尊者高井田長榮寺之禪房御上京中焼失矣奇哉後從灰中興尊者
護持金剛線共發掘得之金剛線者尊者之三衣箱収蔵焉 戒心識

これによると、安永元年（1772）に善淳律師から慈雲が貝葉を譲り受けたとしている。その後、外箱には高井田長榮寺（大阪府東大阪市に現存）で火災があったが、焼け跡の灰の中より、奇跡的に発見したとしている。「慈雲尊者年譜」によれば³⁷、長榮寺の火災は天

33 松田和信「梵文断片Loka-prajñaptiについて」—高貴寺・玉泉寺・四天王寺・

知恩寺貝葉 インド所伝写本の分類と同定—『仏教学』第14号 1982, pp.8-9.

34 高楠順次郎「寶性院所蔵の梵本」『高野山時報』第82巻 1917.p.14-16.

35 松田和信「梵文断片Loka-prajñaptiについて」—高貴寺・玉泉寺・四天王寺・

知恩寺貝葉 インド所伝写本の分類と同定— 仏教学 第14号 1982, pp.2-3.

36 「慈雲尊者遺芳」日貿出版 1980, 項目番号14番（ページ記載されていない）

(0000) 『慈雲尊者遺芳総目録・地』(img.0000-0016)にも記載されている。

外箱は明治39年4月25日に大阪図書館職員の木部崎了道氏により、寄贈されたとしている。

37 三浦康広『慈雲尊者 人と芸術』「慈雲尊者年譜」二玄社 1980, p.327.

高楠順次郎「今釋迦慈雲尊者」『慈雲尊者鑽仰會講演集』第貳輯 高貴寺1933, p.58.

高楠師は高貴寺が火災になり、灰の中より貝葉をみつけたとしているが、長榮寺の間違いである。

明3年（1783）12月となっている。また高貴寺DVDには、写本のみでなく刊本も収められている。たとえば（0036）『漢梵 普賢行願讃 阿弥陀経 般若心経』や（0037）『梵篋三本』は刊本である。第2章で述べたように（0000）『慈雲尊者遺芳総目録・地』で、目録作成者の諦了師は「尊者滅後新二集メラレタルモノハ之ヲ雑録中ニ編入セリ」としている。しかし本来は、雑録部に入れなければいけないものがあつた。慈雲尊者滅後に入手されたものが何点かある。以下に書き出して見る。

（0069）『孔雀経梵本』上中下 全

（0070）『金剛般若波羅蜜多経』 梵文 上

（0071）『金剛般若波羅蜜多経』 梵文 下

（0072）『バザラセイヂキャハラジャハラミタソタラン』 梵文

（0073）『バザラセイヂキャハラジャハラミタソタラン』 梵文 乾

（0074）『バザラセイヂキャハラジャハラミタソタラン』 梵文 坤

（0075）『バザラセイヂキャハラジャハラミタソタラン』 梵文 甲 金剛経 甲

（0076）『バザラセイヂキャハラジャハラミタソタラン』 梵文 乙 金剛経 乙

（0061）『梵学津梁本詮開刻草本』

『金剛般若経』関係は慈雲の遷化後、相当の期間を経て入手したものである。（0069）『孔雀経梵本』については、昭和5年に能満院にあつたものを当時の高貴寺住職であつた慈城によって写されて、高貴寺の書庫に納めたものである。（0061）『梵学津梁本詮開刻草本』については、目録上はあるが映像は収めていない。内容は本詮の写本 全36冊となっている。これらは、高貴寺DVDの（0001－0060）を写したものにつき、写真資料は割愛となっている。（0000）『慈雲尊者遺芳総目録・地』では、慈城の写したものとしている。なんらかの形で、本詮の重要な経典を出版しようと原稿と考えられる。本詮では一部に慈雲が書いたものはあるが、義文尼の手によって写されたものも多い。非常にきれいに、また整理されて書かれている。『梵学津梁』の編纂は『弘法大師請来』の経典から、始まつたことも判つた。

38 【長谷寶秀全集 4 卷 pp.379－381】 児玉義隆師は【Lokesh Chandra】には、義文尼が書いた『御請来目録』のうち部37巻が収録しているとする。ただし、それらは字体が義文尼と異なるので、複本と思われる。

第2項 末詮について

特に「諸譯互證」や「釋」の付いた約80種類の經典が書かれている。高貴寺で実施された編纂方式として「諸譯互證」という方法がみられる。型式としては、經典の梵文を書いて、それに相当する漢訳を対照して書くことが多い。また梵文を逐次訳として、漢訳で表すとという方法もみられる。例として刊本であるが(0079)『梵文阿彌陀經諸譯互證全』では、次のようになっている。

- i) 梵文の単語に対しての漢字の訳
- ii) カタカナで発音のふりがな付きの梵字
- iii) 漢訳の羅什訳
- iv) 漢訳の玄奘訳

が書かれている。場合によっては、カタカナの発音がないものや梵字の音写漢字が付け加えられたものもみられる。(0401)『梵学津梁総目 草本』では「諸譯互證」が付けられた經典は1.『七佛名諸譯互證』から37.『四果四向諸譯互證』までみられる。(0458)『梵学津梁 総目 雜詮之一』では、末詮第二之二十八『十六菩薩諸譯互證又名金剛界一百八名讚 縁起法身偈諸譯互證』が記載されている。欄外余白部には『諸天名諸譯互證』という項目を作り『諸龍名諸譯互證』から『諸童女名諸譯互證』まで18種類が記載されている。記載方法も『諸龍名諸譯互證』は『一龍名――』と略して記載している。これら余白部に書かれた「諸譯互證」が付けられた經典は、高貴寺DVDにまったく収められていない。巻数や末詮番号も記載されていないことから、編纂予定として書かれたものと考えられる。高貴寺DVDについては(0078)『彌陀經諸譯互證阿彌陀經諸譯互證』を筆頭に(0167)『梵文金剛般若經諸譯互證 三』まで、およそ100項目の經典が収められている。大きなグループとして『阿彌陀經』に関するもの9項目「佛頂尊」の陀羅尼に関するもの14項目『般若心經』に関するもの6項目『普賢行願讚』に関するもの19項目『金剛般若經』に関するもの10項目と5グループがある。『阿彌陀經』『普賢行願讚』『金剛般若經』に関するものは、別の章で詳しく検討する。「佛頂尊」の陀羅尼については、その重要性がうかがわれる。慈雲の梵学の知識の高さを証明するのが『理趣經講義』といえる。部分部分であるが、漢訳より還梵を試みたものである。

(0453)『理趣經講義 第一』(東京国立博物館貸出分となってるので、末詮になし)

(0154)『理趣經講義 第二』(0155)『理趣經講義 第三』(慈雲遷化後に古書店に流失)

して一時的に行方不明となっていた)

(0154) 『理趣経講義 第二』 (0155) 『理趣経講義 第三』は享和癸亥(享和3年1803)2月24日に慈雲(86歳の時)が一校了したと奥書にある。慈雲の遷化後に散逸してしまった。(0453) 『理趣経講義 第一』だけは、高貴寺に収められていた。天保5年(1834)に有光という人が、この2冊を京都の古書店で見つけ、買い戻して高貴寺に返還してくれたものである³⁹。

慈雲滅後に入手されたものが何点かある。本来は、雑録部に入れなければいけないものがあつた。『金剛般若経』に関するものである。以下に示す。

- (0158) 『金剛般若経諸积互證 序』
- (0159) 『梵文金剛般若経諸积互證 初稿上』
- (0160) 『梵文金剛般若経諸积互證 初稿下』
- (0161) 『金剛般若経諸积互證 序』
- (0162) 『バザラセイヂキャハラジャハラミタストラ上下』
- (0163) 『梵文金剛般若経引処 上下』
- (0164) 『梵文金剛般若経引證 卷下』
- (0165) 『梵文金剛般若経諸譯互證 一』
- (0166) 『梵文金剛般若経諸譯互證 二』
- (0167) 『梵文金剛般若経諸譯互證 三』
- (0168) 『梵文金剛般若経諸譯互證 四』

第3項 通詮について

通詮では『悉曇章』『悉曇十八章』などに関するものと『七九』と関したものが、多く収められている。前者は梵字の一覧表といえる。単体の梵字から2字以上で合成された梵字が書かれている。後者の『七九』と関したものは梵語の文法書である。『七九』の意味は、名詞と動詞の変化の数である。「七」は「蘇漫多」(subanta) のことで、梵語の八格変

39 【慈雲尊者全集 9巻下 p.382】

「件本者慈雲大和上手澤也得于京師書林當崑岳玉以爲珍奇不予觸目恐可隱没和上與我有何宿契斯法寶藏于我手實所爲和上之加持力乎手足無厝豈不踊躍歡喜乎恨首卷闕其闕本聞存于高貴寺合之爲全備矣天保五年甲午九月 有光識」

化のうち、呼格を省いた七格をあらわしている。「九」は「底彦多」(tiñanta)は動詞語尾の9変化をあらわしている。

『七九』と関したものが(0188)『七九鈔 上』から(0215)『悉曇七九釋 草本 悉曇七九釋 総釋 蘇漫多声』と(0231)『七九略鈔 講解 科共策完』から(0235)『七九要頌 七九又略要頌』と重複するものもあるが30種類収められている。『七九略鈔 蘇漫多』『七九略鈔 底彦多』は「通詮三之二十三」としており「語明 筆受」とあるのは、慈雲の弟子の護明のことである。一部は木版印刷して、刊行と再刊行されている。

以下が刊行されたものである。全5巻で構成されており『七九略鈔 蘇漫多 上』が第1巻になり『七九略鈔 底彦多 下』が第5巻となる。

(0194) 『七九略鈔 蘇漫多 上』

(0195) 『七九略鈔 蘇漫多 中』

(0196) 『七九略鈔 蘇漫多 下』

この3冊の表紙は、刊行本の体裁ではないが、本文は木版印刷されたものである。奥書がないので出版された年は不明である。

(0202) 『七九略鈔 蘇漫多 上』

(0203) 『七九略鈔 蘇漫多 中』

(0207) 『七九略鈔 蘇漫多 上』

(0208) 『七九略鈔 蘇漫多 中』

(0209) 『七九略鈔 蘇漫多 下』 安永3年甲午孟春

(0204) 『七九略鈔 底彦多(蘇漫多)下』 高貴寺DVD目録では底彦多となっているが、現物は蘇漫多である。天保12年辛丑4月河州若江郡高井戸村長栄寺蔵版となっている。

(0201) 『七九略鈔 底彦多 上』

(0200) 『七九略鈔 底彦多 下』 天保12年辛丑4月河州若江郡高井戸村 長栄寺蔵版

(0205) 『七九略鈔 底彦多 上』

(0206) 『七九略鈔 底彦多 下』 明和8年辛卯10月 寛政12年庚申8月発行

古くは、安永3年(1774)に刊行されている。天保12年(1841)の刊行もみられる。(0206)『七九略鈔 底彦多 下』の奥書には明和8年(1771)と書かれて、刊行したのは寛政12年(1800)発行となっている。明和8年には『七九略鈔』が完成されと考えられる。貴重な梵語の文法書なので、再発行をおこなったと思われる。ただ、3期に分かれて刊行されているが、内容は同一である。これらを全て『梵学津梁』の構成するものとするか、一番

古いもの1組だけが『梵学津梁』の構成するものと考えるかにより、複本の取り扱いが、『梵学津梁』を一層複雑にしていることは事実である。

第4項 別詮について

高貴寺DVDでは、本来は本詮の『弘法大師請来』に入り、仕分けでは通詮に入ると思われる(0241)『梵字悉曇章 弘法大師請来』(刊本 東寺観智院権僧正賢賀謹書 享保十九年甲寅春(1726)二月)が収められている。(0401)『梵学津梁総目 草本』では、1.大悉曇章と記載されているので、この仕分けによって高貴寺DVDでは、別詮に収められたのか。(0458)『梵学津梁 総目 雑詮之一』では、別詮の記載は複雑になっており、清書されたものは5項目と少ない。以下のとおりである。

第五百四十九 別詮之一『唐梵文字』

第五百五十 別詮之二『梵語雑名』

第五百五十一 別詮之三『梵語千字文』

第五百五十二至 別詮之四『翻梵語集義淨八卷』

第五百『辨異義十卷 形音義八卷力 要決 字記禪林記』(五百の後は書き漏れ。)

しかし、別紙に別詮として走り書きしたものがある。総数は85巻あるとしている。巻数は、経典名の頭ではなく後ろに記載されている。巻数も一部を省略した形で記されている。

『唐梵文字一卷』 梵學津梁第四百五十一 『千字文一』 五十二

『雑名一』 五十三 一中略一 『攝含例三』 五百二十一、二、三

『雑例十二』 五百二十四、五、六、七、八、九、三十、一、二、三、四、五

清書の経典が500番代であるが、451番から最終は535番で終わっている。

慧晃(1656-1737)の大作である梵語辞典の『枳橘易土集』が(0458)『梵学津梁 総目 雑詮之一』では、記載されていない。(0401)『梵学津梁総目 草本』には記載されており、高貴寺DVDにも収められている。また、高貴寺DVDには(0278)『大唐西域記 一、二』から(0282)『大唐西域記 九、十』が収められている。外国事情の詳細な記録であるので、別詮には入らないはずである。しかし(0278)『大唐西域記 一、二』の初めに朱書きで「梵学津梁 別詮 第四之二十一」と書かれていた。それで高貴寺DVDでは別詮に収めたと考えられる。

第5項 略詮について

略詮の主たるものは、梵語辞典である。広詮も梵語辞典としての機能はある。しかし略詮

の梵語辞典は、現在の梵和辞典や梵英辞典のように、梵語のアルファベット順に編纂されているのが、大きな特徴である。たとえば(0284)『略詮一 (アーアク) 梵学津梁』では、母音の一番の音a(ア)からaḥ(アーク)までの単語を編纂している。そして子音に移り(0291)『略詮第二 カ字部 ジャ字部(梵) 梵学津梁』ではka(カ)からja(ジャ)と進めて編纂している。また、特殊な編纂方法をおこなっている。文字の数を一字が一字門として順次文字が増えると二字門、三字門と加算していく方式もみられる。(0302)『略詮草本六 全八冊』は、8冊で一組のものである。この部門はpaで始まる単語を集めている。一字門のpaは「鉢下反音近波・・」と「波」という音に近いと述べている。そして『金剛頂経』『大日経疏』にある説明をしている。次にpaと子音が結合した一字餘門となる。たとえばpaの次のpaṭが一字餘門となり「唐梵云絹也・・」と説明されている。一字餘門の単語が終われば、その次に二字門の単語になる。ただし、これらの作業には時間、労力がかかる。新しい情報を入手した時は場合によれば始めから、修正し直すこともあったと思う。明治になってから、東本願寺の教育課より高貴寺に『梵学津梁』を写しに来た金松空賢師と太田祐喜師は、高貴寺住職の戒心師と以下のような意見を述べている⁴⁰。

在英國南條文雄君に酬ふ 伎人戒心和南126 寄書(明治13年11月30日)

右梵學律梁畧詮百二十五卷は總て我が慈雲師祖の編輯にして凡そ有ゆる梵語を拾集し音を以て其部を分ち(アの部アーの部イの部等あり)以て字引を造れるものなり金松大田二氏日く此の編輯の次第方法全たく洋字引の法則と少くも違がふことなし支那本邦未た會て有らざる所なり然るに雲師も時代にして此法則ある抑々何の處より相轉せられたるにや實に不測の一事なり

慈雲はアルファベット順に並べる方法を交流ある蘭学者(小石元俊と小石元瑞親子など)から、オランダ語辞典の記載方法を聞いていたと思われる。画期的なアルファベット方式を採用したと考えられる。辞書関係は、草本の段階をでていなかったと考えられる。辞書関係の数は多いが(0000)『慈雲尊者遺芳総目録・地』を見ると20点が複本である。

第6項 廣詮について

(0458)『梵学津梁 総目 雜詮之一』では、廣詮がまったく記載されていない。高貴寺D VDは、胎藏界曼荼羅、金剛界曼荼羅関係が大半を占めている。(0401)『梵学津梁総目

40 「明教新誌」第1077號 明治13年11月30日発行 p.8.

草本』では、曼荼羅関係の経典もあるが、1.『佛總号』 2巻から18.『道具』という項目が記載されている。高貴寺DVDに該当するのは、以下のものが考えられる。

4.『法相差別』 30巻 6.『天象』 2巻 11.『諸餓鬼』 2巻があり高貴寺DVDに該当するのは以下のものである。

(0348) 『梵学津梁 三十六種餓鬼名 三十六種餓鬼』

(0349) 『梵学津梁 広詮 三十六種鬼名 三十六種餓鬼』 ((0348) の草本と思われる) 36種類の餓鬼について述べている。個々の餓鬼の漢名の下に梵名と思われるものを朱筆で、書いている。(0349) の表題には「廣詮」と記載されている。

(0350) 『広詮 法相扁 広詮第六』は梵語の単語辞書である。たとえば、梵字でcittaの訳は「心」として「心」の意味を説明している。

(0352) 『梵学津梁広詮 天象部 全』は節分の星供養や護摩の知識に欠かせない天文に関するものである。十二宮などの説明がされている。

第7項 雑詮について

高貴寺DVDでは、安然の(0353) 『悉曇蔵 一』から(0360) 『悉曇蔵 八』(刊本)の8巻がある。(0353) 『悉曇蔵 一』では、題目「梵学津梁 雑詮七之三」の朱書きと「第九百三十六」と巻数が書かれている。淨嚴の(0361) 『三密鈔 上本』から(0367) 『三密鈔 下之下』(刊本)の7巻があり、題目には朱書きで「梵学津梁 雑詮第七之四」と書かれている。安然の(0368) 『悉曇十二例』から(0370) 『悉曇十二例』まで3巻あるが、同じ内容の刊本である。うち2冊の題目「梵学津梁 第九百三十六 雑詮七之五」の朱書きがある。巻数は(0353) 『悉曇蔵 一』と同じ番号であり、仕分けの時の混乱が読み取れる。(0458) 『梵学津梁 総目 雑詮之一』には、まったく記載されていないが(0401) 『梵学津梁総目 草本』には外国事情を知るためのものが数点書かれている。

2.『大唐西域記』 4.『南海寄歸傳』 11.『采覽異言 新井源君美』

12.『蒙古字』 13.『和蘭字』 14.『韃字』 (韃鞨文字でタタール文字のこと)

18.『泰西輿地圖説 7巻』 22.『佛國記 法顯』

などが記載されている。高貴寺DVDには『大唐西域記』が別詮に含まれている。高貴寺DVDでは、18.『泰西輿地圖説 7巻』に該当する(0392) 『泰西輿地圖説 天』から(0397) 『泰西輿地圖説 辰』まで6冊が収められている。『泰西輿地圖説』は、前野良沢を師とする丹波福知山藩主朽木昌綱(1750-1802)が寛政元年(1789)に編纂した。17巻に及

ぶヨーロッパ諸国事情の概説書である。慈雲は、ラテン語やドイツ語やイスパニア語（スペイン語）の存在も把握していたと思う。朱で線が書かれており、個人での自習が困難な分野であるので、知識人によって教えられたはずである。また、地球が鞠まりの形（球形）との認識もしていたと思われる。これらに関する情報の背景には、優れた蘭方医であり蘭学者の小石元俊（1743－1808）小石元瑞（1784－1849）親子が、慈雲と親交があったからと思われる。しかし、蒙古字、和蘭字、韃靼字（タタール文字）に関しては、高貴寺DVDには収められていない。

第8項 雑録について

「雑録」は、本来の目録には設定されていない項目である。諦了師が（0000）『慈雲尊者遺芳総目録・地』を作成した時、慈雲の遷化後に入手したものを雑録に入れたとしている。たとえば『悉曇表白』には、次の3冊が収められている。

（0413）『悉曇考試表白』

天明3年（1783）に丹州舟井郡上世木邑の吉田宅の蔵書を諦濡師が写したである。

（0414）『悉曇考試表白』

諦濡師の写したものを明治17年（1884）に大澄師（伎人戒心）が写したものである。

（0415）『シッタン（梵）考試表白』

大澄師（伎人戒心）が写したものを明治33年（1900）に菊壽師（伎人慈城）が写したものである。

このことから、連綿と梵学の研究が明治に入ってもおこなわれたことが判る。また江戸時代中期の天文学者西川如見の編纂した世界地理書の『華夷通商考』もみられる。

（0444）『華夷通商考卷1』 （0445）『華夷通商考卷2』 （0446）『華夷通商考卷3』

（0447）『華夷通商考卷4』 （0448）『華夷通商考卷5』

中国はもとより東南アジア、インド、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカなどの地誌が書かれている。伝統的な梵学をふまえた上で、梵学をひとつの外国語としての位置づけて考えていることにより、海外事情の知識が必要と考えていたと思う。系統立てたものでなく、いろいろなものが収められている。このことから、慈雲遷化後も梵学の研究がおこなわれたことがよく判る。慈雲の遷化後に入手した『金剛般若経』に関しては、諦了師は雑録に正しく入れているが、高貴寺DVDでは、本詮と末詮に収めている。

まとめ

本詮では、高貴寺DVDに収められている經典の巻数と本詮番号は『御請来目録』までが(0401)『梵学津梁総目 草本』の巻数と本詮番号にほぼ一致している。『貝葉』に関しては(0458)『梵学津梁 総目 雑詮之一』は3種類で(0401)『梵学津梁総目 草本』では、6種類となっている。しかし高貴寺DVDでは『高貴寺貝葉』といわれる貝葉の本体でなく、その写本の1種類のみである。諦了師が、慈雲の遷化後に入手したものは、雑録にいれるとしていた。しかし高貴寺DVDでは『孔雀経梵本』と『金剛般若波羅蜜多経』関係と慈城師の『梵学津梁本詮開刻草本』が、雑録でなく本詮に入っていた。

末詮では、經典の解釈に重点がおかれている。特に「諸譯互證」という編纂方法を使用して、梵文と漢訳との対照をおこなったことが確認できる。『理趣経講義』が古書店に流出していたことから、慈雲遷化後に『梵学津梁』の散失があったことがうかがえる。高貴寺DVDでは、慈雲遷化後に入手した『金剛般若経』に関するものが、雑録部でなく末詮に入っていた。また『諸天名諸譯互證』などの一連の經典に関しては、まったく収められていない。

通詮では『悉曇章』『悉曇十八章』等に関する梵字の基礎となるものと梵語の文法書に相当する『七九略鈔』などが収められている。傾向として(0401)『梵学津梁総目 草本』(0458)『梵学津梁 総目 雑詮之一』に記載されている經典関係が、多く収められている。『七九略鈔』に関しては、3回も出版したことが判った。

別詮では、本来は本詮の『弘法大師請来』に入り、仕分けでは通詮に入るとされる(0241)『梵字悉曇章 弘法大師請来』が収められている。また『大唐西域記』も本来は別詮ではないが、朱書きで「別詮」の記述があったので、別詮に収められている。貴重な梵語辞典である『枳橘易土集』も確認できた。

略詮では、その多くが梵語辞典である。完成の困難さから、草本が多いことが判った。編纂方法は、オランダ語辞典などの影響を受けてアルファベット順を採用している。また文字の個数から編纂しているものも見られた。

廣詮では(0458)『梵学津梁 総目 雑詮之一』では、広詮がまったく記載されていない。しかし(0401)『梵学津梁総目 草本』に記載されている「餓鬼」や「法相」(一切の存在の姿や万象のありさま)に関するものが収められている。高貴寺DVDでは、曼荼羅関係が大半を占めている。

雑詮では、梵学の習得の指針となる『悉曇蔵』『三密鈔』『悉曇十二例』が収められている。反面、梵学とは系統を別にしたヨーロッパ事情を記録した『泰西輿地図説』が収めら

れているのが興味深い。

雑録では、慈雲遷化後に入手したものを収めているとしている。その中には先人の写したものを複製して、学習した姿がうかがえる。また、伝統的な梵学から梵学をひとつの外国語として考え、海外事情の知識の吸収もおこなったと思われる。

『梵学津梁』の現状については、諦了師の述べているように現存するのは約500巻ほどである。その中には複製本も含まれているので、数は少なくなる。しかしながら、本詮を始めとして、貴重な文献が保管されている。本詮では梵写本の収集、末詮では梵写本の解釈、通詮では解釈に使用する文法書、別詮では解釈に使用する辞書、略詮では実用的なアルファベット順の辞書、広詮では曼荼羅や法相や六道に関するもの、雑詮ではそれ以外の重要な『悉曇藏』や『三密鈔』や海外事情を得るためのものがあつた。系統的には、一部には混乱があるが、必要なものが配置されている。諦了師は、経典に記載されている仕分け、表題などに別詮とか略詮と書かれていれば、その仕分けに従っていたようである。諦了師の経典の知識やこまめな記載などが、高貴寺DVDの完成に結びついたと思う。

第4章 『梵学津梁』所蔵の「弘法大師請来 四十二部」について

はじめに

『梵学津梁』本詮の一番初めに記されている「弘法大師請来 四十二部」は『梵学津梁』編纂を始めるという重大な意味を含んだものである。慈雲の命により弟子の義文尼が、ていねいに写した跡がみられる。この「弘法大師請来 四十二部」の奥書から、各々の經典が經由した場所、時間、それに携わった人物が読み取れるので、この章を設けてみた。【Lokesh Chandra⁴¹】には、多くの「弘法大師請来 四十二部」が収められている。奥書に義文尼と記されたものも多くあるが、それらは複本である。高貴寺の義文尼のものとは比べてみれば、明らかに書き手が違っているのが判る。奥書にも非常にわずかであるが、義文尼のものとは、誤字などの相違がみられる。しかし慈雲流の梵字で、ていねいに書かれていることから、悉曇の継承者の手によるもので間違いのないと思う。大量の複本は、高貴寺DVDには(0061)『梵学津梁本詮開刻草本』（全36冊 大師請来、阿弥陀經、貝文、聖天真言、大悲心陀羅尼、三十五仏名、不動火界真言など(0001-0060)の写本につき写真撮影なし）とあるが、DVDに収められなかったものの流用と思われる。筆跡より慈城師と筆者は考えている。菊壽こと慈城師(1885-1942)は、神戸市灘区徳井町にある浄土真宗円通寺で生まれた。戒心師の甥で、阿満得聞師の甥であり、阿満得壽師とは従兄弟となる。戒心師の次の高貴寺住職となった僧侶である。長谷寶秀師は『梵学津梁』に収められている「弘法大師請来 四十二部」の多くが、元々は高野山金剛三昧院にあったものとしている。

第1節 「弘法大師請来 四十二部」とは

『御請来目録』の梵字真言に関する經典のことである。『御請来目録』は空海が唐より持ち帰った經典、仏具、曼荼羅、密教用具などを元に作成した目録である。大同元年(806)10月22日の記載がある。詳しい内容は、新訳等經142部247卷(そのうち150卷は不空三蔵の訳)と梵字真言讚等42部44卷論疏章等32部170卷で計216部461卷と仏像や曼荼羅、道具、阿闍梨付囑物などである。ここでの「弘法大師請来 四十二部」は、梵字真言讚等42部44卷であり『梵字大毘盧遮那胎藏大儀軌 二卷(上下)』から『梵字悉曇章』のことである。ただし、第8番『梵字少隨求真言一卷』第10番『梵字金剛藏降三世讚王一卷』の二部二卷は、現在まで発見されていない。

41 【Lokesh Chandra pp.1-275】

第2節 高野山金剛三昧院本（高野山本）について

長谷寶秀師は、義文尼たちが書き写したこれらのもの多くが、元々は高野山金剛三昧院にあったものとしている。金剛三昧院について述べておく。

金剛三昧院⁴²

高野山にあるの別格本山寺院。高野山内にあったが、当初は鎌倉將軍家菩提所の禪宗系の寺院として創建されたようである。建暦元年（1211）に北条政子が源頼朝菩提のために建立した禪定院が元である。承久元年（1219）に源実朝の菩提のために金剛三昧院として改築された。金剛三昧院の第1世は榮西（1141－1215）の門下の退耕行勇（1163－1241）である。行勇は密禅律に通じていた。高野版の出版の中心として栄えた。江戸時代初期頃に金剛峯寺の塔頭として確立されたようである。

金剛三昧院にあったという根拠として長谷寶秀師の理由は以下のことを述べている。⁴³

a) 経典を書いた年、場所、人物、目的が同一形式である。

高野山金剛三昧院蔵本ハ大師請来ノ梵字真言四十二部ノ内廿八部アリ法身偈ゾ无垢淨光陀羅尼ノ末ニ附スルカ故ニ廿七帖ナリ其ノ吉慶讚ノ終ニ

貞永元年十月廿日於成多喜房書寫了一交了 釈門（花押）

同年十一月一日當于先師御遠忌開題之了

トアリ又七俱胎儀軌ノ終ニ

天福元年十月廿二日於房成多喜房書寫了一交了 釈門（花押）

同年十一日當于先師御遠忌開題之了

トアリ其他各卷ノ奥書皆畧々之ニ同ジ蓋シ貞永元年十月廿日ヨリ

天福元年十一月廿二日ニ至ル約一年ノ間ニ書寫シタルモノノ如シ

例として

「貞永元年十月廿日於成多喜房書寫了一交了 釈門（花押） 同年十一月一日當于先師御遠忌開題之了」という奥書を以下のように分けてみる。

- i) 経典を書いた年 貞永元年十月廿日
- ii) 経典を書いた場所 於成多喜房書寫了一交了

42 佐和隆研 編『密教辞典』法藏館 1999, pp.235－236.

43 【長谷寶秀全集 4巻 解説 pp.9－10】

iii) 経典を書いた人物 釈門（花押）

iv) 経典を書いた目的 同年十一月一日當于先師御遠忌開題之了

このように金剛三昧院所蔵本の奥書はこの形式が、2行のみしか書かれていないとしている。それ以上に付加された奥書は、元々は金剛三昧院所蔵本であったが、転写されたといったと考えられる。また書かれた期間が、貞永元年（1232）より天福元年（1233）の僅か1年である。

長谷寶秀師は「成多喜房」などに対しては、言及されていない。筆者は仁和寺に関係あると思う。理由として下記の3点を示す。

㊤仁和寺所在地の地名に「鳴滝（なるたき）」という地区がある。

㊦仁和寺の有力な僧侶として、鳴滝を冠した「鳴滝僧正」と呼ばれた守助（1240－1294）や「鳴滝法印」と呼ばれた道禅（1190－1235）がいた。

㊧京都市南区の小原家の古文書には、織田信長の朱印状が残されている。年未詳であるが、9月6日分には「仁和寺門跡雜掌成多喜坊宛礼状」であったとしている。⁴⁴

以上の理由で「成多喜房」は仁和寺関係の可能性が高いと思う。

b) 『梵学津梁』の『御請来目録』の原本の多くは、金剛三昧院所蔵本である。⁴⁵

高貴寺所蔵梵学津梁中ノ大師御請来ノ梵本ハ其ノ奥書ヲ檢スルニ多クハ高野山金剛三昧院所蔵本ヲ轉寫シタルモノヲ餘處ニ得テ明和安永天明ノ頃更ニ之ヲ轉寫シタル者ナリ
毘盧遮那三摩地儀軌及ヒ文殊五字真言儀軌ノ如キ高野山本ニ元ヨリ闕ケタル者ハ慈雲尊者何レノ本ニ依リテ補入セラタル者ナルカ其ノ原本ノ所在及ビ書寫ノ年月ヲ記サルカ故ニ今之ヲ知ルニ由ナシ

『梵学津梁』の「弘法大師請来 四十二部」の多くは、元々の梵本は金剛三昧院所蔵本であるとしている。あわせて、長谷寶秀師の「梵字真言校合録」によれば、先に述べたように金剛三昧院所蔵本（高野本とも表示）の奥書は形式として「天福元年十月廿二日於房成多喜房書寫了一交了 釈門（花押） 同年十一日當于先師御遠忌開題之了」などの形をとり、

44 『資料京都の歴史 第13巻 南区』平凡社 1992, p15.

45 【長谷寶秀全集 4巻 解説 pp.10－11】

46 【長谷寶秀全集 5巻 解説 pp.361－395】

これ以上のものは付け加えていない。⁴⁷この2行の奥書以上に付加された奥書を持ったものは、金剛三昧院所蔵本より転写されたものと考えられる。金剛三昧院に所蔵なく、他で得て慈雲自身が書いているもので毘盧遮那三摩地儀軌と文殊五字真言儀軌に奥書がないので、元の所在地が不明としている。(十六尊真言も奥書がない。)[弘法大師請来 四十二部]は、どこから、誰によって高貴寺にもたらされたのか。經典の奥書から、入手経路を探てみたい。

第3節 「弘法大師請来 四十二部」の奥書について

第1項 『梵学津梁』の「弘法大師請来 四十二部」の概略

「弘法大師請来 四十二部」と『梵学津梁』所蔵分を対照してみる。高貴寺DVD番号(001)から(0027)は「弘法大師請来 四十二部」から、順序よく配置されている。ほとんどが、義文尼が関係した梵写本である。第8番『梵字少隨求真言一卷』第10番『梵字金剛藏降三世讚王一卷』の2部は不明である。また慈雲の真筆といわれるものには奥書がない。

(0004) 毘盧遮那三摩地儀軌

(0020) 十六尊真言 及 大三摩耶真實讚

十六尊真言に奥書なし、大三摩耶真實讚奥書あり。

(0024) 文殊五字真言儀軌

この3点については、児玉義隆師によると長谷寶秀師が『長谷寶秀全集』で使用した梵写本で、この3点については慈雲の真筆を写したとしている。⁴⁸長谷寶秀師の著書と高貴寺の写真資料を比べたところ、梵字の形や配列などが同一であるので、慈雲の真筆と考えられる。

(0027) 以上の数字でも(0040)から(0047)などでも「弘法大師請来 四十二部」がみられる。義文尼の梵写本と同じものや義文尼の梵写本を複製したものである。それに加えて(0001)から(0027)のなかで欠本となった第7番 梵字大隨求真言一卷や第14番 梵字菩提場莊嚴陀羅尼一卷が収められている。慈雲、義文尼以外の「弘法大師請来 四十二部」

47 【梵字貴重資料 p.194】金剛三昧院の『梵字胎蔵大儀軌』『梵字妙法蓮華経儀軌』の解説で奥書は2行のみとなっている。長谷寶秀師のものと一致しており、金剛三昧院所蔵本の奥書は2行以上の付加はなかったと判断できる。

48 【長谷寶秀全集 4巻 解説 pp.380-381】

では下記のものが見られる。

(0042) 梵字胎藏儀軌・上下

(0043) 梵字胎藏儀軌

(0040) 梵学津梁卷八之十二 本詮八之十四大佛頂等七部

大佛頂陀羅尼 梵字大宝楼閣經真言 梵字千臂甘露軍 荼利真言 梵字吉慶讚

(0041) 梵学津梁本詮 大宝楼閣真言 千臂甘露軍荼利真言 吉慶讚九首

無垢淨光陀羅尼 菩提場莊嚴陀羅尼 宝部金剛讚 如意輪讚 大悲心真言

維摩詰真言 法華儀軌

(0047) 兩大陀羅尼 全 大佛頂大陀羅尼・大随求陀羅

一切如来心真言・一切如来心印真言・一切如来金剛被用真言 他

(0042) 梵字胎藏儀軌・上下の奥書は、(0001) (0002) 胎藏大儀軌上下とほぼ同じである。ただし上巻、下巻の最後の行に以下の書き込みがある。

上巻 明和三年丙戌年正月自十二日小比丘覺日於和州式下郡伴堂邑延壽院拝寫竟

下巻 明和三年丙戌年正月自十五日小苾芻覺日於和州式下郡伴堂邑延壽院拝寫畢

これによれば、明和3年(1766)和州式下郡伴堂邑(奈良県磯城郡三宅町伴堂)の延壽院において覺日という人物が写したとしている。別系統で入手したものと考えられる。

梵文『普賢行願』は、義文尼の関係した(0005)『日貝行願讚 異本ノ一』だけを対照とした。『第42番 梵字悉曇章一卷』は、ここには収められていない。『梵学津梁』の別詮の(0241)『梵字悉曇章 弘法大師請来』として、刊本が収められている。

第2項 各奥書について

奥書を抜き出して、下記に示してみた。一部高貴寺DVDの番号と写真ごとのimagの番号が違う箇所があったので、注意が必要である。高貴寺DVDの番号と相違があるが、現状の数字を記載しておく。第1番から『御請来目録』に記載されている順に並べている。

1冊の折本に複数の経典が書かれていることがある。経典名に下線を引いた部分の経典が、該当するものである。太字は朱書きされた箇所を示している。対照は以下の通りである。

「天福元年十月廿二日於房成多喜房書寫了一交了 釈門(花押) 同年十一月當于先師御遠忌開題之了」などの形式と「安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉」などの形式だけが記された経典の奥書に対しての分析は省く。

第1番 梵字大毘盧舍那胎藏大儀軌二卷

(0001) 胎藏大儀軌・上 (imag.0001-16)

文和三年閏十月十一日於東寺西院僧坊以當寺御影堂本

御将来聖教内書寫之畢一部兩卷内依欠當卷所書繼之也

bhanadra mani 同年十一月十六日校了

以興然闍梨自筆本重加校合以朱注異本

右此一行写本朱書

享保丁酉年五月十六日以東寺觀智藏本書寫 同日校合了 老乞士 實詮

享保十五庚戌年三月十三日 以實詮闍梨之本寫之了 利生護國閑人覺心

享保十八年三月九日於金剛峯寺真別墅寫了 一校了 沙弥覺勝心行

請来録日梵字胎藏儀軌二卷 又六月上旬入學法灌頂壇

從此以後受胎藏之梵字儀軌學諸 尊之瑜伽觀智云

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

この奥書と部分一致するものが、東寺の塔頭である觀智院金剛藏に現在残っていた⁴⁹。下線部分が、ほとんど一致している。bhanadra mani は東寺觀智院第2代の賢寶を示している。奥書によれば、文和3年（1354）に東寺の御影堂の藏本を東寺の西院で賢寶が写したとしている。興然の自筆本で校訂をおこなった。享保丁酉年（享保2年 1717）に東寺觀智藏本を實詮が写した。その後享保15年（1730）にその實詮が写したを利生護國寺の覺心が写したとしている。享保18年（1733）には、覺勝心行により金剛峯寺真別墅で写された。元々は東寺の御影堂の藏本であったと考えられる。人物名で判る賢寶、興然、實詮について述べておく。

賢寶（1333-1398）⁵⁰

元弘3（1333）に生まれた真言宗の僧であり、東寺の觀智院第2世である。14歳で東寺の杲宝の弟子となった。頼宝、杲宝が未完の著書に尽力した。特に頼宝、杲宝のあとを引き継いで完成に43年間を費やした『大日経疏演奥鈔』や杲宝滅後の『東宝記』の編纂にも力を尽くした。応永5年（1398）寂する。著書は多く『理趣経积要鈔』『十住心文集』

49 【梵字貴重資料 p.203】

50 【密教大辞典 p.484】 参照

【人名辞典 法蔵館 p.237】 参照

などがある。弟子は宗海、仁重、融然などである。

興然 (1121–1203)⁵¹

保安2年(1121)に生まれた。勸修寺慈尊院第2世で、字は理明房といい、勸修寺理明房や慈尊院阿闍梨と呼ばれた。幼くして勸修寺の寛信に師事した。建仁3年(1203)に84歳で寂する。弟子には、覺禪や文覺など他多く名をつなげる。著書も多く『圖像集』や『曼荼羅集』などがある。

實詮 (1663–1740)⁵²

寛文3年(1663)生まれ真言僧で号は極喜堂と称した。江戸靈雲寺で梵学の巨匠である浄巖に師事する。華嚴宗の鳳潭との論争は十数年におよんだ。宝永4年(1707)延命寺(大阪府河内長野市)の蓮體の招きで住した、その後に京都清水寺の光乗院に移動した。元文5年(1740)に78歳で寂する。著書に『大日経教主義』『秘密灌頂印言義』などがある。

(0002) 胎蔵大儀軌・下 (imag,0002–13)

文和三年十一月十七日以東寺西院御経蔵本 校合了 大法師 賢寶

以他本大概校合了件本批云

長承二年九月一日以御筆本奉書寫畢云 件本隆海僧都本云

興然本私比校大日経真言出處為弁之押紙了 賢寶記之

享保二丁酉年五月廿六日以東寺觀智蔵本寫蔵本梵字雖勿他筆上古風致可甚愛矣

今全形容古本實畫虎為狗而已 乞士 實詮

(享保十五庚戌暮春十六日 以實詮闍梨之本寫之了 南紀護國閑人覺心

享保十八年三月十日於高野靈嶽峯 一校了 沙門覺勝心行

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫)

高貴寺DVDでは、この經典の最後の写真を見れば、もう1頁残っていて、撮影していないように見える。[Lokesh Chandra]⁵³には、この複本が載せられており、欠落部分をカッコで囲って補った。さきの『胎蔵大儀軌 上』と同じように、この經典も東寺の塔頭である觀智院金剛蔵にあった。金剛蔵本には1行目の「大法師 賢寶」のあとに「興然闍梨自筆本」

51 【密教大辞典 p.518】 参照

52 【密教大辞典 p.989】 参照

53 【Lokesh Chandra p.38】

が書かれているが『梵学津梁』では欠落している。東寺の経蔵は西院御影堂が相当する。弘法大師の住居場所の跡に御影堂が建立された。上巻は「東寺西院僧坊以當寺御影堂本」下巻は「東寺西院御経蔵本」となっているが、同一場所である。下巻は「隆海僧都本」により校訂をし「興然闍梨自筆本」は『大日経』の真言関係と比較して、注意書きや疑問箇所を押紙（張り紙）したとしている。200年ほど年代を逆行して「長承二年九月一日以御筆本奉書寫畢云 件本隆海僧都本云」の記述がある。文和3年（1354）に賢實が写した梵写本の説明として、書かれているとも考えられる。これによれば、長承2年（1133）に「隆海僧都本」といわれる「御筆本」から転写したものを写したとしている。「御筆本」の意味は、弘法大師の真筆によるものと考えられる。隆海僧都に関しては以下に述べておく。

隆海（1119－1177）⁵⁵

积迦院法印隆海は、大宮太夫であった少納言の藤原家隆（？－1125）の子である。大夫僧都と呼ばれる。覚鑿の孫弟子であり、師は兼海である。大伝法院の20代の座主である。保元3年（1158）に鳥羽上皇の女御である福門院御願として高野山に菩提心院を建立している。治承元年（1177）寂する。著書は『伝流鈔』『要尊法』などがあるが、確定していない。弟子には、隆位（久我内大臣雅通の子息）、成覚（入道少将公房の子息）、少納言阿闍梨覚尋などがいる。（藤原家隆と同名であるが、別人に歌人である（従二位）藤原家隆（1158－1237）という人物がいる。）

流れの概略を以下に示す。

文和3年（1354）に東寺西院御経蔵本の御将来聖教内を賢實が写した。

享保丁酉年（享保2年1717）に東寺觀智蔵本を實詮が写した。

享保15年（1730）に實詮闍梨の写した梵写本を利生護國寺（和歌山県橋本市下兵庫）の覺心が写した。

享保18年（1733）高野山にて覺勝心行という人物により写された。

安永2年（1773）義文尼が慈雲の命により写した。

54 【梵字貴重資料 p.197】高野山宝寿院所蔵の『梵字七俱胝儀軌』の奥書に「写本云以隆海僧都本書了件本云大師御筆本令写云云」と記載とあり、これより「御筆本」は弘法大師の筆によるものと考えられる。

55 苦米地誠一「隆海一門（家隆流）と高野山大伝法院」『大正大学大学院研究論集』第38巻 2014, pp.1－30. 参照

以上の流れとなる。このことより『胎藏大儀軌下』は、弘法大師の梵写本が隆海僧都本に転写され、東寺東寺西院御経蔵に保管された。その後東寺觀智院にあったもの（西院御経蔵のものか複本かは不明）が實詮により写された。實詮により写されたものを利生護國寺の覺心が写した。それを高野山で覺勝心行が写したと考えられる。

第2番 梵字胎藏曼陀羅諸尊梵名一卷 『梵学津梁』DVDには収められていない。

第3番 梵字金剛頂蓮花部大儀軌二卷

(0003) 金剛頂蓮華部大儀軌・上下・阿弥陀贊 (imag. 0003-19)

貞永元年十月廿八日於成多喜房書寫了 釋門 花押 一校了

右梵字蓮華部心儀軌一卷以慈光院蔵本元金剛三昧院蔵本寫之

新請來録并秘録云梵字蓮華部心軌二卷今以翻譯軌對校

首尾具亦矣附阿弥陀讚後人妄二卷合一卷欵

享保八年癸卯冬十月十八日金剛峯寺沙門維審識

右梵書以大師金界次第并翻譯軌校了寶

享保十四己酉後九月四日以無量壽院古本對校之異本云者乃是也 南山沙門 真源

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

「貞永元年十月廿八日於成多喜房書寫了 釋門 花押 一校了」のみで、それと組する箇所が抜けている。長谷實秀師の「梵字真言校合録」⁵⁶でも金剛三昧院所蔵本は欠落となっている。また、奥書は上巻に記載されており、下巻には奥書なしとしている。この義文尼のものは、金剛頂蓮華部大儀軌の次に阿弥陀贊が書かれている。奥書は最後に書かれており、阿弥陀贊の後となっている。「以慈光院蔵本元金剛三昧院蔵本寫之」の記載より慈光院という寺の蔵本のを写したとしている。高野山には、近江国の山本というところの出身で、光信尊儀房という僧が、弘安3年（1280）に建立した慈光院という寺があったという⁵⁷。その慈光院蔵本の元は金剛三昧院所蔵本であった。奥書の金剛峯寺沙門維審（寶の異体字）よれば、阿弥陀讚を付け足して後世の人が、妄りに二卷（『金剛頂蓮花部大儀軌 上下』2卷）を一巻にまとめたとしている。慈雲は、維審の教示もあり付加された阿弥陀讚も省略しなかったと思われる。朱書きで部分で、享保14年（1729）に真源（1689-1758）が「無量壽

56 【長谷實秀全集 5巻 解説 p.382】

57 『続真言宗全書』第三七「紀伊統風土記高野山之部」高野山大学出版部 2008, p.120. 参照

院古本」により校訂した。この「無量壽院古本」は異本らしい。この經典は、本来入るべきでない『阿弥陀贊』が編纂されており、これに対しての維審の説が記載されていることである。この高野山の碩学である維審を紹介しておく。

維審（1687-1747）⁵⁸について

維審は高野山の学僧で、貞亨4年（1687）に阿州板野郡（徳島県板野郡）に誕生する。13才で地元の東林院主権大僧都宥雄の許で出家した。15歳で高野山で一族になる蓮金院哲真師に事教を研鑽した。享保の初年に南院教栄阿閼梨の室に入って安祥寺流を学び、經典を多く写した。享保6年の頃高山寺に入り秘籍を精力的に写した。また、五智山道空僧正とも秘籍を交易したといわれる。40歳の頃积迦文院住した。享保11年から12年（1726-1727）に宝鎗を講じて秘蔵宝錦疏並玄談四十一巻を編纂した。元文元年（1736）には、文鏡秘府論笑十八巻を編纂した。延享4年（1747）に寂する。

以下に転写の経路を示しておく。

貞永元年（1232）以降に金剛三昧院蔵本を写して慈光院蔵本とする。

享保8年（1723）までに本来入らない阿弥陀贊が合本される。

享保14年（1729）真源によって異本である無量壽院古本をもって校訂する。

このように元は金剛三昧院所蔵本が、慈光院へ転写された。その後阿弥陀贊が挿入された。真源により無量壽院蔵本をもって校訂したと考えられる。

第4番 梵字毘盧遮那三摩地儀軌一卷

(0004) 毘盧遮那三摩地儀軌 奥書なし。慈雲の真筆か。

奥書がないため、出どころは不明である。

第5番 梵字普賢行願讚一卷

(0005) 日貝行願讚 異本ノ一 (imag.0006-14)

貞永元年十月廿九日於成多喜房奉書寫了 一校了 积門（花押）

同年十一月一日相當先師御遠忌開題了 一校了

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拝寫焉

第6番 梵字大佛頂真言一卷

(0009) 大佛頂真言 (imag.0010-10)

58 『続真言宗全書』第四二 解説 高野山大学出版部 2008, p.272. 参照

大佛頂如来頂髻白天盖陀羅尼 一 道 首 已竟 異本

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拝寫焉

奥書に尾題が書かれている。注目するのは「大佛頂如来頂髻白天盖陀羅尼 一 道 首 已竟」で、道に点をつけて首に修正している。道の修正がないのを記載したものが、東寺にあるらしい。奥書は以下の通り。⁵⁹

大佛頂如来頂髻白天盖陀羅尼 一 道 已竟 (尾題としている)

此中所註朱科积是後人以南忠註所書也 恐非御請来根本々欵檢証本

本来「一首」と書くところを「一道」と書いている。誤字の尾題が同じということは、同じ梵写本と考えられる。高貴寺のほうには「此中所註朱科积是後人以南忠註所書也 恐非御請来根本々欵檢証本」が記入されていないが、梵文には朱書き（梵字ではなく漢字のみ）で書き加えられている。これが「註朱科积」に該当する可能性がある。また朱書きで「異本」と記載されている。この『大佛頂真言』は不空訳と般刺蜜帝訳の2系統ある。この梵写本は不空訳になるようである。経典が2種類ある知識を持っていたので「異本」と記入したと考えられる。空海の御請来本には、朱書きでの註を欠いていると考えられる。

第7番 梵字大隨求真言一卷 義文尼分は収められていない。

第8番 梵字少隨求真言一卷 不明のため『梵学津梁』には収められていない。

第9番 梵字大寶樓閣經眞言一卷

(0010) 大宝楼閣 大宝楼閣眞言 (imag. 0011-05)

貞永元年十月廿七日於成多喜房奉書寫了 一校了积門 (花押)

同年十一月一日先師御遠忌開題了

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拝寫焉

第10番 梵字金剛藏降三世讚王一卷 不明のため『梵学津梁』には収められていない。

(0041) の中に題目「梵学津梁卷第十三 本詮一之十一 金剛藏降三世讚王」があるが、題目のみで経典の記載はない。

59 井ノ口泰淳編『高楠順次郎旧蔵日本梵語学資料集成』名著普及会 1988, p.770.

井ノ口泰淳氏によると内容は不空訳に一致するとの見解である。

【長谷寶秀全集 4巻 解説 pp.271-298】『梵字大佛頂真言』では東寺本を載せている。

第11番 梵字千臂甘露軍荼利眞言一卷

(0011) 千臂軍荼利 并 吉慶賛

千臂軍荼利 (imag. 0012-02)

貞永元年十月廿日於成多喜房奉書寫了 一校了 釈門 (花押)

同年十一月一日迎先師遷化同開題了 一校了

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拝寫焉

第12番 梵字吉慶讚一卷

(0011) 千臂軍荼利 并 吉慶賛

吉慶賛 (imag. 0012-05)

貞永元年十月廿日於成多喜房奉書寫了 一校了 釈門 (花押)

同年十一月一日當沙御遠忌開題了 一校了

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拝寫焉

第13番 梵字無垢淨光陀羅尼一卷

(0012) 無垢淨光陀羅尼 奥書なし

第14番 梵字菩提場莊嚴陀羅尼一卷 義文尼分は収められていない。

第15番 梵字寶部金剛讚一卷就中 如意輪讚 大悲眞言 維摩詰眞言

(0013) 宝部讚 并 大悲心 維摩 法華 如意輪賛

宝部金剛讚は奥書なし。

大悲心は奥書なし。

如意輪賛は奥書なし。

維摩詰眞言 (imag. 0014-05)

天福元年七月十六日於成多喜房書寫了 釈門 (花押)

同年十一月一日開題了

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拝寫焉

第16番 梵字妙法蓮華經儀軌一卷

(0013) 宝部讚 并 大悲心 維摩 法華 奥書

法華儀軌 (imag. 0014-07)

天福元年十月十七日於成多喜房書寫了 釈門 (花押)

同年十一月一日為先師頓證爲開題了 (爲は菩提の略字)

校本云本云長治二年孟秋之此以石山内供手筆本寫之若此請来梵本之内歟可尋處 > 破損

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拝寫焉

長治2年（1105）に石山内供（淳祐）の手筆本を写したとしている。その写本には、破損箇所があったとしている。石山内供について述べておく。

淳祐（890—953）⁶⁰

寛平2年（890）に京都で生まれる。父親は、菅原道真の子供の菅原淳茂である。観賢に入門した。延長3年（925）に伝法灌頂を受けた。生来病弱のため、醍醐寺座主を辞して、石山寺の普賢院に隠棲し、修行と著作に専念した。逸話としては、延喜21年（921）に醍醐天皇の命により、師の観賢とともに高野山も弘法大師御廟に詣でた。御廟を開扉したときに弘法大師の膝に手が触れ、薫香が手に付き一生涯消えなかったといわれる。天曆7年（953）に遷化。通称は石山内供、普賢院内供。弟子は、元杲、救世、寛忠などがある。著書は多く「石山七集」「金剛界次第法」「悉曇集記」などある。

石山内供が、天曆7年（953）に遷化しているので、長治2年（1105）に写されたとする、150から200年後に写されたことなる。その間に破損箇所が、発生したと考えられる。

第17番 梵字不動尊儀軌一卷

(0014) 不動尊儀軌 (imag. 0015-05)

天福元年七月廿三日於成多喜房書寫了 釈門（花押）

同年十一月一日開題了

校本云云天永二年六月十七日寫了請来之内本云梵漢共御筆寫之可

證本也但端一真言無之仍以他本加書也

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拝寫焉

校訂本として天永2年（1111）6月17日に梵漢共に弘法大師の書いたのを写したものを使用したとしている。「梵漢共」となっているが、『梵学津梁』に収められているものの本文は、梵字のみである。本文の3行目 (imag.0015-01) に「己下皆以御筆本寫之 校本」と朱書きがある。ところどころ違う梵字が朱書きしており、梵字の横にカタカナで「イ」と記されており、これが異本（弘法大師の真筆か）より書き加えたものと思われる。

第18番 梵字尊勝佛頂眞言一卷

(0015) 尊勝陀羅尼 并 七俱胝佛母 馬頭二讚

60 佐和隆研 編『密教辞典』法藏館 1999, p.370.参照

尊勝陀羅尼 奥書なし

第19番 梵字七俱胝佛母讚一卷

(0015) 尊勝陀羅尼 并 七俱胝佛母 馬頭二讚

七俱胝佛母 (imag. 0016-04)

天福元年九月廿七日於成多喜房書寫了一校了 釈門 (花押)

同年十一月一日開題了

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

第20番 梵字馬頭觀音陀羅尼一卷

(0015) 尊勝陀羅尼 并 七俱胝佛母 馬頭二讚

馬頭 (imag. 0016-06) (馬頭二讚は七俱胝佛母と馬頭を合わせて二讚と考えられる。)

天福元年十月廿二日於成多喜房書寫了一校了 釈門 (花押)

同年十一月一日開題了

校本云 正和五年丙辰九月八日於金剛三昧院以故上人御本書寫之以方丈之御本 一交了

金剛佛子 定惠 四十六才

文保三年己未四月廿二日奉傳受之了

享保十四歳九月十五日於金剛峯寺中院據以無量壽院藏本以朱校異畢 沙門覺勝

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

馬頭 (imag. 0016-04) 題目部分

『梵學津梁』卷^〇十九^〇 二十三 本詮第一之二十五^〇 四 (十九を二十三に五を四に訂正)

梵字馬頭觀音・心イ陀羅尼

「心」が入っているいて、「イ」は異本の意味と思われる。本文には、ところどころ違う梵字が朱書きしており、梵字の横にカタカナで「イ」と記されており、これが異本より書き加えたものと思われる。下線の部分と同じ奥書の『梵字馬頭觀音心陀羅尼』（「心」が入っている）⁶¹ものが、高野山の宝寿院にあることが判った。宝寿院は無量壽院と宝性院の後進の寺院であり、この3寺院の説明をしておく。

無量壽院⁶²

61 【日本韻学史の研究 III p.1288】

62 佐和隆研 編『密教辞典』法藏館 1999, p.668.参照

高野山にあった寺院で、1016（長和5年）に藤原師輔の子である深覚（955－1043）が創建した。本尊が無量寿仏で庭園を醍醐の無量寿院に摸したという。応永年中（1394－1429）には（1340－1416）が住持した。寿門の本拠となり、宝性院の宥快と並んで宝門と二分するほど栄えた。大正2年に宝性院と合併して宝寿院になった。

^{6.3}宝性院

高野山の中院谷（現在の大師教会付近）にあった寺院である。法性（？－1245）を開基とし法性院といわれたが、後に宝性院となった。応安7年（1374）に宥快（1345－1416）が住持し、教学を大成した。高野山の無量寿院の長覚の寿門と2大学派となる宝門の拠点となった。江戸時代には、広大な寺領を得たが、元始元年（1864）焼失し明治22年に仮本堂を建てたが、大正2年に無量寿院と合併して宝寿院に改名した。

^{6.4}宝寿院

高野山教学を支配して来た二大学派の無量寿院（寿門）と宝性院（宝門）が、大正2年に合併した。寺院名は両方の名前を用いて、新規に宝寿院と改めた。宝性院は火災で伽藍を失っており、旧無量寿院の建物を当てた。現在は専修学院を設けて、僧侶の養成機関となっている。

宝寿院蔵本の『梵字馬頭観音心陀羅尼』奥書部分は、以下のようになり、『梵学津梁』の馬頭（imag. 0016－06）の奥書の下線を引いた箇所と一致する。

正和五年丙辰九月八日於金剛三昧院以故上人御本書寫之以方丈之御本 一交了

金剛佛子 定惠 四十六才

文保三年己未四月廿二日奉傳受之了

この奥書によると正和5年（1316）に金剛三昧院で方丈之御本（住職の所持本のことか）を写した故上人御本で定惠が校訂したとしている。文保3年（1319）に受け継がれたとしている。文保3年に無量壽院に収められたと解釈できる。

『梵学津梁』の馬頭（imag. 0016－06）の奥書では、これに付加された奥書の次の行には、享保14年（1729）に金剛峯寺の中院で「無量壽院蔵本」をもって覺勝という人物によ

63 佐和隆研 編『密教辞典』法藏館 1999, p.627.参照

64 佐和隆研 編『密教辞典』法藏館 1999, p.626. 参照

り校訂したとしている。宝寿院は無量壽院の後進の寺院であるから、この宝寿院の梵写本が関与した可能性が高い。宝寿院所蔵本が、この異本であると筆者は考えている。

第21番 梵字千鉢文殊一百八名讚一卷

(0016) 千鉢文殊一百八名讚 (imag. 0017-10,11)

天福元年七月十三日於成多喜房書寫了 一校了 釈門 (花押)

同年十一月一日先師遠忌開題了 一校了

校本云 寫本云 以般若寺僧正御手跡本此交了

寛元三年六月十五日於西山法華寺以松橋本相當先師僧正十三年書之了 一交了

金剛佛子 頼一

正和五年丙辰九月十五日於金剛三昧院以故上人御本書寫之以方丈之御本 一交了

金剛佛子 定惠 四十六才

文保三年己未四月廿三日奉傳受之了

享保十四年九月十五日於金剛峯寺龍光院以无量壽院蔵本校之以朱示異了 沙門覺勝

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

下線の部分と同じ奥書の『梵字千鉢文殊一百八名讚』が、高野山の宝寿院にあることが判った。宝寿院蔵本と同じ奥書部分は、以下のようになる。

寫本云 以般若寺僧正御手跡本此交了

寛元三年六月十五日於西山法華寺以松橋本相當先師僧正十三年書之了 一交了

金剛佛子 頼一

正和五年丙辰九月十五日於金剛三昧院以故上人御本書寫之以方丈之御本 一交了

金剛佛子 定惠 四十六才

文保三年己未四月廿三日奉傳受之了

般若寺僧正 (観賢) の写本により校訂されたとしている。寛元元年 (1243) に西山法華寺において松橋本 (醍醐の无量壽院の蔵書と考えられる) で頼一 (一は略を表したのか) という人物により校訂されたとしている。その後は先の『梵字馬頭觀音心陀羅尼』と同じ流れで、正和5年 (1316) に金剛三昧院で方丈之御本 (住職の所持本のことか) を写した故上人御本で定惠が校訂し、文保3年 (1319) に受け継がれたとしている。同じく文保3

年に無量壽院に収められたと解釈できる。そして享保14年（1729）に金剛峯寺龍光院で、無量壽院蔵本によって覺勝により校訂されたとしている。観賢について述べておく。

観賢（854－925）⁶⁶

四国の讃岐で斉衡元年に生まれた。秦氏の（別説では伴氏）の出身といわれる。般若寺僧正と称され、東寺長者9世、高野山座主4世、醍醐寺1世に就任した稀代の僧である。872年真雅のもとで出家し、895年東寺で聖宝より灌頂を受ける。山城鳴滝に般若寺を建立した。909年東寺長者になり918年東大寺檢校などを歴任し919年醍醐寺座主、高野山座主に任じられる。空海の諡号を奏請し、弘法大師の諡を贈られた。919年空海請来の『三十帖冊子』を宮中より東寺経蔵に回収した。弟子には、一定（醍醐座主）、淳祐（石山内供）、遍基、平遍などがいる。著書は『大日経疏抄』『三十帖策子勘文』『三昧耶戒式』『胎蔵次』などがある。

この經典も宝寿院の梵写本が関与した可能性が高い。

第22番 梵字一切吉祥天女陀羅尼一卷

(0017) 吉祥天女 并 不空羂索 (imag. 0018－03)

貞永元年十二月廿日於成多喜房書寫了 一校了 釈門（花押） （十一を七に訂正）

同年十一月一日先師御遠忌日開題供養了

校本云 正和五年丙辰九月八日於金剛三昧院以故上人御本書寫之以方丈御本交了

金剛佛子 定惠 四十六才

文保三年己未四月廿四日傳受之了

享保十四年九月十五日據无量壽院本以朱示異了 覺勝

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

下線の部分と同じ奥書の『梵字一切吉祥天女陀羅尼』⁶⁷が、高野山の宝寿院にあることが判った。宝寿院蔵本と同じ奥書部分は、以下のようになる。

正和五年丙辰九月八日於金剛三昧院以故上人御本書寫之以方丈御本交了

金剛佛子 定惠 四十六才

66 佐和隆研 編『密教辞典』法藏館 1999, p102.参照

大山公淳「観賢僧正の教学」密教文化 83号 1968, PP.1－5.

67【日本韻学史の研究 III p.1286】

文保三年己未四月廿四日傳受之了

先の『梵字馬頭觀音心陀羅尼』および『梵字千鉢文殊一百八名讚』と同じ流れで、正和5年（1316）に金剛三昧院で方丈之御本（住職の所持本のことか）を写した故上人御本で定恵が校訂し、文保3年（1319）に受け継がれたとしている。同じく文保3年に無量壽院に収められたと解釈できる。そして享保14年（1729）に場所は不明であるが、無量壽院蔵本によって覺勝により校訂されたとしている。

第23番 梵字不空羂索陀羅尼一卷

(0017) 吉祥天女 并 不空羂索 奥書なし

不空羂索 奥書なし

第24番 梵字千手千眼眞言一卷

(0018) 千手千眼眞言 (imag. 0019-03)

正和五年丙辰九月四日金剛三昧院以方丈本書寫之了 金剛佛子 定恵 四十六歳

文保三年己未四月廿五日奉傳受之了

享保十四年在巳酉閏九月七夜於以无量壽院蔵本寫取功訖 金剛佛子 眞源 四十一

安永二年癸巳四月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大咏上位命而敬拜寫焉

下線の部分と同じ奥書の『梵字千手千眼眞言』⁶⁸が、高野山の宝寿院にあることが判った。

宝寿院蔵本と同じ奥書部分は、以下のようになる。

正和五年丙辰九月四日金剛三昧院以方丈本書寫之了 金剛佛子 定恵 四十六歳

文保三年己未四月廿五日奉傳受之了

先の『梵字馬頭觀音心陀羅尼』と『梵字千鉢文殊一百八名讚』および『梵字一切吉祥天女陀羅尼』と同じ流れで、正和5年（1316）に金剛三昧院で方丈之御本（住職の所持本のことか）を写した故上人御本で定恵が校訂し、文保3年（1319）に受け継がれたとしている。同じく文保3年に無量壽院に収められたと解釈できる。それに続く奥書が以下である。

享保十四年在巳酉閏九月七夜於以无量壽院蔵本寫取功訖 金剛佛子 眞源 四十一

この部分は、先の『梵字馬頭觀音心陀羅尼』と『梵字千鉢文殊一百八名讚』および『梵字一切吉祥天女陀羅尼』と違うことが述べている。『梵字馬頭觀音心陀羅尼』と『梵字千鉢文殊一百八名讚』および『梵字一切吉祥天女陀羅尼』は、無量壽院蔵本によって覺勝によ

68 【日本韻学史の研究 III p.1293】

り校訂されたとしている。しかし、これは享保14年（1729）に真源によって無量壽院蔵本を写し取ったとしている。ただし、それまでの宝寿院蔵本の奥書から察すれば、校訂箇所を写し取ったと考えるほうが妥当である。

第25番 梵字阿彌陀佛眞言一卷

(0019) 弥陀 并 宝篋真言 十六大菩薩讚

弥陀 奥書なし

第26番 梵字寶篋眞言一卷

(0019) 弥陀 并 宝篋真言 十六大菩薩讚

宝篋真言 (imag. 0020-04)

安永二年癸巳四月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

第27番 梵字十六大菩薩讚一卷

(0019) 弥陀 并 宝篋真言 十六大菩薩讚

十六大菩薩讚 (imag. 0020-08)

三蔵不空阿闍梨手書也 イ本

天福元年七月十七日於成多喜房書寫了 一交了 釈門 (花押)

同年十一月一日先師遠忌開題了

校本云 寫本云 内題依本書之本云高野大師御本云云件正本醍醐法眼房在之云云

以般若寺僧正御本 一交了

寛元ノ年六月十六日於西山法華寺以松橋本書之了 金剛佛子 頼一

正和五年丙辰十月一日於金剛三昧院以故上人御本今書寫之以方丈之御本 一交了

文保三年己未四月廿六日奉傳受之了 金剛佛子 定惠 四十六才

安永二年癸巳五月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

下線の部分と同じ奥書の『梵字十六大菩薩讚』⁶⁹が、高野山の宝寿院にあることが判った。宝寿院蔵本と同じ奥書部分は、以下のようになる。

寫本云 内題依本書之本云高野大師御本云云件正本醍醐法眼房在之云云

以般若寺僧正御本 一交了

寛元ノ年六月十六日於西山法華寺以松橋本書之了 金剛佛子 頼一

69 【日本韻学史の研究 III p.114】

正和五年丙辰九月八日於金剛三昧院以故上人御本書寫之以方丈御本交了

金剛佛子 定惠 四十六才

文保三年己未四月廿四日傳受之了

この部分は、先の『梵字馬頭觀音心陀羅尼』と『梵字千鉢文殊一百八名讚』『梵字一切吉祥天女陀羅尼』および『梵字千手千眼眞言』と同じ形式であり、正和5年（1316）に金剛三昧院で方丈之御本（住職の所持本のことか）を写した故上人御本で定惠が校訂し、文保3年（1319）に受け継がれたとしている。同じく文保3年に無量壽院に収められたと解釈できる。

第28番 梵字十六菩薩眞言一卷

(0020) 十六尊眞言 及 大三摩耶眞實讚

御請来目録では『梵字十六菩薩眞言一卷』となっているが『梵学津梁』では『十六尊眞言』となっている。十六尊眞言 (imag.0020-02) は奥書でなく、第1頁に書かかれている。長谷寶秀師は、慈雲の眞筆と考えており、その原本は不明としている。⁷⁰

梵學津梁卷第三十一 本詮第三十一

十六尊眞言 教王經卷下出 梵文私加也 此本写之後得西西本云

梵写本の異本対照の形式をとっている。梵字を2行ずつ書いている。上段は全文を書き、下段は梵字の違うもののみ書き加えられている。下線部分をみると『教王經』の下巻よりの出典であり、梵文を私（慈雲と思われる）が書き加えたとしている。これを写した後に西西本（醍醐本の略）を得たとしている。長谷寶秀師は、原本が不明としているが、慈雲は「教王經卷下出」と書いている。『教王經』下巻が何に当たるかが、原本の手がかりとなる。高貴寺DVDで十六尊が題目名となる經典が（0067）十六大菩薩 賢劫十六尊がある。表紙は「十六大菩薩」となっているが、内題は「賢劫十六尊梵名」となっている。内題のあとに「出金剛頂經下」となっている。形式は縦書きで、梵字、音写漢字、現圖と尊形の3行で、一尊をあらわしている。下記に1例を示す。（弥勒に該当分）

(imag.0067-01)

oṃ maitrāya svā hā

唵引昧怛哩二合野婆嚩二合賀引 慈氏

70 【長谷寶秀全集 5卷 p.399】

(現圖在) 東一三形瓶 (尊形) 左拳安腰右蓮上瓶白色

これが『教王経』下巻よりの出典になるようである。音写漢字の「唵引昧怛哩二合野婆囉二合賀引」に注目すれば『教王経』下巻とは不空訳『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王経 卷下』⁷¹にあり、残りの音写漢字もほぼ一致する。慈雲は、この不空訳の音写漢字を梵字に直したものと考えられる。下段の醍醐本は、慈雲が音写漢字より梵字に変換したものと差異がある。漢訳に(唐の法全訳といわれている)『賢劫十六尊』⁷²があり、音写漢字と梵字が併記されている。醍醐本の梵字は、こちらに近い。これにより、慈雲は『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王経 卷下』を原本として音写漢字より梵字に変換したと考えられる。下段の醍醐本は『賢劫十六尊』が原本と思われる。

第29番 梵字大三昧耶眞實一百八名讃一卷

(0020) 十六尊眞言 及 大三摩耶眞實一百八名讃

大三昧摩耶眞實一百八名讃 (imag.0020-06)

享保八年癸卯冬十月廿四日以慈光院蔵古本謄焉訖

金剛峯寺沙門維寶馳毫於蓮金教院

安永二年癸巳五月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

享保八年(1723)に蓮金教院において、維寶(1687-1747)により慈光院蔵の古本を転写したとしている。蓮金教院は、高野山の蓮金院のことと思われる。この寺は、維寶の師になる高野山検校職の哲眞の寺である。蓮金院について述べておく。

⁷³
蓮金院

検校月乗房阿闍梨理賢(1117-1190)が建立した寺で、高野山高校入口付近にあったといわれる。現在は宝亀院の北の旧功德聚院境内地に移り、院務は正智院で取扱われている。建立された年代は、理賢が建久元年(1190)に74歳で入滅したので、それ以前となる。本尊は愛染明王であり、毎日僧侶のために米を吐いたという伝説があり、米吐愛染とよばれた。鎌倉時代には、荒廃してしまつた。慶長13年(1608)に薩摩の島津氏の尽力により、

71【大正第18巻 p.318中】

72【大正第18巻 pp.339-340】

73『統眞言宗全書』第三七「紀伊統風土記高野山之部」高野山大学出版部 2008, p.114-116. 参照

『大和紀伊寺院神社大事典』平凡社1977, p.326.

南谷宝性院政遍が再興した。

第30番 梵字七俱胝儀軌一卷

(0021) 七俱胝佛母儀軌 (imag.0021-02)

天福元年十月廿二日於成多喜房書寫了 釈門 (花押)

同年十一月一日相當先師遠忌開題了

寫本云 以隆海僧都本書了件本云大師御筆本今寫云云

寛元三年六月十六日以松橋本於西山法華寺書了 金剛佛子 頼一

正和五年丙辰八月廿一日於金剛三昧院以故上人御本書寫以方丈御本 一交了

金剛佛子 定惠 四十六才

文保三年己未四月廿七日奉傳受之了

享保十四年九月十五日以金剛峯寺無量壽院本校異了 覺勝

安永二年癸巳五月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

弘法大師が書いた写本を隆海僧都が写したものとしている。以下は、先の『梵字馬頭觀音心陀羅尼』と『梵字千鉢文殊一百八名讚』と『梵字一切吉祥天女陀羅尼』および『十六大菩薩讚』と同じ流れで、寛元元年(1243)に金剛佛子 頼一という人物により、西山法華寺で松橋本(醍醐の無量寺院)により、校訂されたとしている。正和5年(1316)に金剛三昧院で方丈之御本(住職の所持本のことか)を写した故上人御本で定恵が校訂し、文保3年(1319)に受け継がれたとしている。同じく文保3年に無量壽院に収められたと解釈できる。それに続く奥書が以下である。

享保十四年九月十五日以金剛峯寺無量壽院本校異了 覺勝

享保14年巳酉(1729)の9月15日に覺勝により、無量壽院蔵本で校訂したとしている。下線部と同じ奥書の『七俱胝佛母儀軌』が、宝寿院にあることが判った。⁷⁴

第31番 梵字葉衣觀音眞言一卷 『梵学津梁』DVDには収められていない。

第32番 梵字大悲心眞言一卷

(0022) 大悲心眞言 (imag.0022-05)

天福元年七月十四日於成多喜房書寫了 釈門 (花押)

同年十一月一日相當先師遠忌開題了

74 【日本韻学史の研究 III p.1266】

安永二年癸巳五月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉
第33番 梵字一字頂輪王儀軌一卷

(0023) 一字頂輪王儀軌 (imag. 0023-10)

本云 御室御本云 遍知院根本御本書之云々

建久四年十月廿日於神護寺以理明房之闍梨之書之了交合畢 高尾本

寔永元年甲申七月朔日以梅尾本書寫了 小佛子 浄光

享保九年甲辰李夏十一日以五智山之本寫之了 南紀護圀寺沙門覺心

同十四年乙酉六月三日以覺心師本寫之了 南山沙門入寺真源 享年卅一 法臘廿七

同年九月廿八日於高野山真別墅律藏院寫了 沙門覺勝

安永二年癸巳於京西山善妙寺沙弥尼義文

受法主 大味上位命而敬拜寫焉

元々は、遍知院蔵本であったのが、写されて御室蔵本となったようである。建久四年（1193）10月20日に高雄山神護寺（京都府京都市右京区梅ヶ畑高雄町）において、理明房（興然 1121-1203）が写したもので、校訂したとしている。これが、高尾本（高雄山より名付けたものと思われる）と呼ばれるようである。宝永元年甲申（1704）7月1日に梅尾本にて浄光という人物が校訂したとしている。梅尾は、梅尾山高山寺（京都市右京区梅ヶ畑梅尾町）をさしていると考えられる。享保9年（1724）に護圀寺の覺心が、五智山の写本で校訂したとしている。享保14年（1729）6月3日に真源が、覺心が校訂したものを写したとしている。享保14年（1729）9月28日に覺勝が、律藏院（新別所）で写したとなっている。原本は遍知院蔵本であったが、御室蔵本に転写され、興然の写本で校訂され、高尾本と称されたようである。高尾本を梅尾本で校訂し、そののちに五智山の写本で校訂したものがある。

第34番 梵字文殊五字眞言儀軌一卷

(0024) 文殊五字眞言儀軌

文殊五字眞言儀軌 奥書なし。 慈雲の眞筆と考えられている。

第35番 梵字烏芻濕摩儀軌一卷

(0025) 烏芻濕摩儀軌・勝初瑜伽儀軌

烏芻濕摩儀軌 (imag. 0025-05)

天福元年九月廿四日於成多喜房書寫了 釈門（花押）

同年十一月一日奉為先師聖靈頓證為開題了

安永二年癸巳五月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

第36番 梵字勝初瑜伽儀軌一卷

(0025) 烏葛濕摩儀軌・勝初瑜伽儀軌

勝初瑜伽儀軌 (imag. 0025-9)

天福元年十月廿八日於成多喜房書寫了 一交了 釈門 (花押)

同年十一月一日相當先師之年忌開題了

安永二年癸巳五月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

第37番 梵字天龍八部讚一卷

(0026) 天龍八部讚・法身偈・十一面讚 (蓮華部讚 表題に記載なし)

天龍八部讚 (imag.0026-02)

貞永元年十一月十九日於成多喜房書寫了 一交了 釋門 (花押)

同年十一月一日 奉為聖靈先師速證爲開題了

第38番 梵字法身偈一卷

(0026) 天龍八部讚・法身偈・十一面讚

法身偈 (imag.0026-03)

表題 本詮第一之四十二 法身偈 異本及對註附

以般若寺僧正御本書之注才本小野僧正本朱字傳法院經藏本也

表題に異本及對註附と書かれている。奥書から般若寺僧正 (觀賢 853-925) のものに傳法院にあった小野僧正 (仁海 951-1046) の朱書きの註をいれたと思われる。

第39番 梵字十一面讚一卷 画像

(0026) 天龍八部讚・法身偈・十一面讚

十一面讚 (imag.0026-03)

貞永元年十月十九日於成多喜房書寫了 釋門 花押 一交了

同年十一月一日 先師遷化日開題了

安永二年癸巳五月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大味上位命而敬拜寫焉

第40番 梵字金剛峯樓閣眞言并一百八名讚一卷

(0027) 金剛峯樓閣眞言 并 一百八名讚寫相承之本 奥書なし

第41番 梵字蓮花部讚一卷

(0026) 天龍八部讚・法身偈・十一面讚 (蓮華部讚 表題に記載なし)

蓮華部讚 奥書なし

第42番 梵字悉曇章一卷 義文尼分は収められていない。

別詮（0241）『梵字悉曇章 弘法大師請来』が該当する。

（刊本 東寺観智院権僧正賢賀謹書 享保十九年甲寅（1726）春二月）

以上高貴寺DVDと対照してみた。

まとめ

『梵学津梁』所蔵の「弘法大師請来 四十二部」の書き手は義文尼の功績が非常に大きい。長谷寶秀師のいう、金剛三昧院蔵本を原本とするものが多くあり、東寺や仁和寺に関するものもあった。金剛三昧院蔵本が転写されてから、他の梵写本での校訂をおこなったものも多くあった。奥書からは、長い間に多くの寺や多くの人物により『梵学津梁』に収められるまでの経緯が判ってきた。奥書に記載されている寺も有名な寺院やもう廃寺となり存在が判らないところもあった。関わった人物も有名な僧侶もいたが、名前の判らない人物もいた。本来除くべき『阿弥陀讃』が付け加えられたものがあったが、学僧といわれる維審の説明もあり、そのまま受けいれていた。まとめとして一覧表を作成した。奥書に長谷寶秀師のいう金剛三昧院形式で記載されているものは「金剛三昧院形式」とした。

經典名	元の所在場所	校訂本など	関わった人	その他
第1番 梵字大毘盧舍那胎藏大儀軌卷 (0001) 胎藏大儀軌・上	東寺	興然閣梨自筆本 東寺観智蔵本	賢寶 實詮 覺心 勝心行	観智院金剛蔵に梵 写本あり
(0002) 胎藏大儀軌・下	東寺	隆海僧都本 興然本	賢寶 實詮 覺心 勝心行	観智院金剛蔵に梵 写本あり
第2番 梵字胎藏曼陀羅諸尊梵名一卷	未入手			
第3番 梵字金剛頂蓮花部大儀軌二卷 (0003) 蓮華部弥陀贊・金剛頂蓮華部大儀軌	金剛三昧院	慈光院蔵本	維審 真源	阿弥陀贊が付け加 えられている
第4番 梵字毘盧遮那三摩地儀軌一卷 (0004) 毘盧遮那三摩地儀軌	不明			奥書なし
第5番 梵字普賢行願讃一卷 (0005) 日貝行願讃 異本ノ一	金剛三昧院			金剛三昧院形式
第6番 梵字大佛頂眞言一卷 (0009) 大佛頂 大佛頂眞言	不明			東寺に梵写本あり
第7番 梵字大隨求真言一卷	未入手			
第8番 梵字少隨求真言一卷	存在が不明			
第9番 梵字大宝樓閣經眞言一卷 (0010) 大宝樓閣 大宝樓閣眞言	金剛三昧院			金剛三昧院形式
第10番 梵字金剛蔵降三世讃王一卷	存在が不明			
第11番 梵字千臂甘露軍荼利眞言一卷 (0011) 千臂軍荼利 并 吉慶贊 千臂軍荼利眞言 吉慶贊九首	金剛三昧院			金剛三昧院形式
第12番 梵字吉慶讃一卷 (0011) 千臂軍荼利 并 吉慶贊 千臂軍荼利眞言 吉慶贊九首	金剛三昧院			金剛三昧院形式

第13番 梵字無垢淨光陀羅尼一卷 (0012) 無垢淨光陀羅尼	不明			奥書なし
第14番 梵字菩提場莊嚴陀羅尼一卷	未入手			
第15番 梵字寶部金剛讚一卷就中 如意輪讚 大悲眞言 維摩詰眞言 (0013) 宝部金剛讚 如意輪贊 大悲心 維摩詰眞言・妙法蓮華經儀軌	宝部金剛讚 大 悲眞言 如意輪 贊は不明 維摩詰眞言は 元金剛三昧院			宝部金剛讚 大悲 眞言 如意輪贊奥 書なし 維摩詰眞言は 金剛三昧院形式
第16番 梵字妙法蓮華經儀軌一卷 (0013) 宝部讚并 大悲心 維摩 法華	金剛三昧院	石山内拱手筆本		
第17番 梵字不動尊儀軌一卷 (0014) 不動尊儀軌	金剛三昧院	天永二年に請来 之内本より		
第18番 梵字尊勝佛頂眞言一卷 (0015) 尊勝陀羅尼并七俱胝佛母馬頭	不明			奥書なし
第19番 梵字七俱胝佛母讚一卷 (0015) 尊勝陀羅尼并七俱胝佛母馬頭	金剛三昧院			金剛三昧院形式
第20番 梵字馬頭觀音陀羅尼一卷 (0015) 尊勝陀羅尼并七俱胝佛母馬頭	金剛三昧院	金剛三昧院以故 上人御本 無量壽院蔵本	定惠 覺勝	宝寿院に校訂本 あり
第21番 梵字千鉢文殊一百八名讚一卷 (0016) 千鉢文殊一百八名讚	金剛三昧院	般若寺僧正本 松橋本 金剛三昧院以故 上人御本 無量壽院蔵本	頼一 定惠	宝寿院に校訂本 あり
第22番 梵字一切吉祥天女陀羅尼一卷 (0017) 吉祥天女 并 不空羂索	金剛三昧院	金剛三昧院以故 上人御本 无量壽院蔵本	定惠 覺勝	宝寿院に校訂本 あり
第23番 梵字不空羂索陀羅尼一卷 (0017) 吉祥天女 并 不空羂索	不明			奥書なし

第24番 梵字千手千眼真言一卷 (0018) 千手千眼真言		金剛三昧院以故 上人御本 无量壽院蔵本	定惠 真源	宝寿院に校訂本あり
第25番 梵字阿彌陀佛真言一卷 (0019) 弥陀并宝篋真言十六大菩薩讚	不明			奥書なし
第26番 梵字寶篋真言一卷 (0019) 弥陀并宝篋真言 十六大菩薩讚	不明			義文尼の奥書のみ
第27番 梵字十六大菩薩讚一卷 (0019) 弥陀并宝篋真言十六大菩薩讚		醍醐法眼房在本 般若寺僧正御本 松橋本 金剛三昧院以故 上人御本	頼一 定惠	宝寿院に校訂本あり
第28番 梵字十六菩薩真言一卷 (0020) 十六尊真言 及大三摩耶真實讚	不空訳『金剛 頂一切如來眞 實攝大乘現證 大教王経 卷 下』より			醍醐本を後に入手 する 法全訳『賢劫十六 尊』が合致する
第29番 梵字大三昧耶眞實一百八名讚 (0020) 十六尊真言 及 大三摩耶眞實讚	慈光院	慈光院蔵古本	維寶	
第30番 梵字七俱胝儀軌一卷 (0021) 七俱胝佛母儀軌	金剛三昧院	隆海僧都本 松橋本 金剛三昧院以故 上人御本 無量壽院本	頼一 定惠 覺勝	
第31番 梵字葉衣觀音眞言一卷	未入手			
第32番 梵字大悲心眞言一卷 (0022) 大悲心 大悲心眞言	金剛三昧院			金剛三昧院形式

第33番 梵字一字頂輪王儀軌一卷 (0023) 一字頂輪王儀軌	遍知院	御室本 理明房之闇梨之書（高尾本） 梅尾本 五智山之本 覺心師本	浄光 覺心 真源 覺勝	金剛三昧院形式
第34番 梵字文殊五字眞言儀軌一卷 (0024) 文殊五字眞言儀軌	不明			奥書なし
第35番 梵字烏芻濕摩儀軌一卷 (0025) 烏芻濕摩儀軌・勝初瑜伽儀軌	金剛三昧院			金剛三昧院形式
第36番 梵字勝初瑜伽儀軌一卷 (0025) 烏芻濕摩儀軌・勝初瑜伽儀軌	金剛三昧院			金剛三昧院形式
第37番 梵字天龍八部讚一卷 (0026) 天龍八部讚法身偈 十一面讚	金剛三昧院			金剛三昧院形式
第38番 梵字法身偈一卷 (0026) 天龍八部讚法身偈 十一面讚	般若寺僧正御本	小野僧正本 傳法院経蔵本		
第39番 梵字十一面讚一卷 (0026) 天龍八部讚法身偈 十一面讚	金剛三昧院			金剛三昧院形式
第40番 梵字金剛峯樓閣眞言 并 一百八名讚 (0027) 金剛峯樓閣眞言 并 一百八名讚	不明			奥書なし
第41番 梵字蓮花部讚一卷 (0026) 天龍八部讚 法身偈 十一面讚 (蓮花部讚)	不明			奥書なし 高貴寺DVDの題目 が未記入
第42番 梵字悉曇章一卷 別註(0241) 『梵字悉曇章 弘法大師請来』 は、次の刊本を収めている。 (東寺観智院権僧正賢賀謹書 享保十 九年甲寅春(1726) 二月)	本註には、記載されていない			

第5章 『梵学津梁』の梵文『阿弥陀経』について

はじめに

梵文『阿弥陀経』は、完全なものとしては日本でしか発見されていない。日本で発見された梵文『阿弥陀経』は、イギリスのMax Müllerの許へ送られた。そこで校訂され"The smaller sukhāvativyūhasūtra"として刊行された。

第1節 『阿弥陀経』について

第1項 梵文の『阿弥陀経』について

梵文の『阿弥陀経』の成立は、原始浄土思想の形成と切り離されない。浄土思想は西暦100年ごろ、クシャーナ王朝時代に北西インドで成立したと推定されている。浄土思想に連動して『無量寿経』『阿弥陀経』が作成されたとみられる⁷⁵。梵文の『阿弥陀経』の完全なものは、梵字で書かれた日本のものだけである。最近の研究では、断片を大英博物館の中央アジアの写本の中より発見した⁷⁶。

第2項 漢訳『阿弥陀経』について

- a) 『仏説阿弥陀経』 鳩摩羅什訳 402年
- b) 『仏説小無量寿経』 求那跋陀羅訳 455年ごろの訳で欠本となっている。
- c) 『称讃浄土仏摂受経』 玄奘訳 650年

第3項 日本に将来された梵文『阿弥陀経』について

i) 円仁 (794-864)

- 『日本國承和五年入唐求法目録』 承和5年 839年 『梵漢兩字阿弥陀経』
- 『慈覚大師在唐送進録』 承和7年 841年 『梵漢對譯阿弥陀経』
- 『入唐新求聖教目録』 承和14年 848年 『唐漢対訳阿弥陀経』

ii) 宗叡 (809-884)

- 『新書写請来法門等目録』 貞観7年 865年 『梵漢兩字阿弥陀経』

75 【藤田 浄土三部経 p.7】

76 "Buddhist Manuscripts from central Asia The British Library Sanskrit Fragments" by Seishi Karashima and Klaus Wille 2009, pp.119-120.

円仁は目録ごとに名称が違っているが、各目録には1点しか記されていないので、同じものといえる。宗叡の目録は、唐より貞観7年に帰国しているので、留学終了後すぐに作成したものと考えられる。以上のように将来された梵文『阿弥陀経』は2種類となる。

第2節 梵文『阿弥陀経』について

第1項 高貴寺DVD以外の梵文『阿弥陀経』と『梵学津梁』との関係

藤田宏達⁷⁷氏の研究によると以下のものがみられる。

- ㊸寂巖『梵唐対訳阿弥陀経』
- ㊹石山寺所蔵『梵漢阿弥陀経』
- ㊺寂巖『梵漢両字阿弥陀経』 元文3年（1738）
- ㊻常明『梵漢両字阿弥陀経』 安永2年（1773）
- ㊼幻住 勝道共著『梵文阿弥陀経』 寛政壬子4年（1792）

また、慈雲が刊行した梵文『阿弥陀経』を含む『梵篋三本』の奥書より、基本的には3系統の梵文『阿弥陀経』があり、慈雲は以下の3種類を校訂に使用したとしている。校訂に使用した写本は、以下の3種類である。

- ㊽『建久年本』 和州法宣律師（建久年間1190-1198）
- ㊾『文亀年本』 石山所蔵（文亀年間1501-1503）
- ㊿『承久年本』 信州佐久郡（承久年間1219-1221）

各梵本と『梵学津梁』に関連する写本について述べてみる。奥書などに書かれている人物名なども判る範囲で述べておく。㊿『承久年本』 信州佐久郡（承久年間1219-1221）は、高貴寺DVDに収められているので、別に述べる。

第2項 『建久年本』に関連する梵文『阿弥陀経』

㊸寂巖『梵唐対訳阿弥陀経』について

この『阿弥陀経』は、岡山の宝島寺の寂巖によって、書かれたものである。寂巖について述べてみる。

寂巖（1702-1771）⁷⁸

備中の宝島寺（現在の岡山県倉敷市連島町矢柄）の学僧であった。字は、諦乗と称した。

77【藤田 阿弥陀経 pp.11-29】

78【密教大辞典 pp.1046-1047】参照

元禄15年（1702）に、備中足守藩士の子として生まれた。9歳の時、普賢院の超染真浄に弟子入りした。35歳の時に、京都五智山蓮華寺の曇寂（1674-1742）に入門した。40歳の寛保元年（1741）備中都羅島の宝島寺の住職となった。宝暦10年（1760）には、常明（1702-1784）の元でも研鑽した。明和4年には、宝島寺を弟子の真染（文敞 1723-1797）に譲り、玉泉寺に隠居し、明和8年8月3日（1771）に寂した。享年70歳である。著作には『大悉曇章稽古録』『悉曇字記大観』『梵本弥陀経私記』『梵字心経私記』などがある。次に『梵唐対訳阿弥陀経』の奥書について述べてみる。

建久六年二月十八日書了 元文五年歳次庚申九月三日於京西五智山

以和州内山本写之畢 沙門寂巖 考建久六年至元文五年凡五百四十六年也

右建久写本外題云梵唐対訳阿弥陀経 和州安堵極楽寺蔵本乃是巖所写内山本也

奥書によれば、建久六年二月十八日（1195）に写された『和州 内山本』をおよそ五百四十六年のちの元文五年（1740）に京都の五智山（当時は、仁和寺北側の鳴滝音戸山の山上にあった蓮華寺か）で、写したとしている。『和州 内山本』は『和州 安堵極楽寺蔵本』と同じものであるとも述べている。奥書より『建久六年本』と『和州 内山本』と『和州 安堵極楽寺蔵本』は、名前が違うがこの3種類は同じものとなる。

まず『和州 内山本』については、次の奥書に注目して⁷⁹みた。

和州安堵極楽寺蔵本乃是巖所写内山本也

下線部が「乃是巖所（これ、いわゆるところの）内山本を写す也」となる。これから「内山本」の存在したことになる。明治の廃仏毀釈により、和州山辺郡内山村（奈良県天理市 杣之内町）の有力な寺が廃寺になった「内山永久寺」があった。『和州 内山本』と書かれていることから「内山永久寺」に関連した梵本が、存在していたと考えた。奈良県天理市 杣之内町から、極楽寺のある奈良県生駒郡安堵町まで、距離にして僅か10キロメートルほどの間である。地域的に見て『内山本』が「内山永久寺」の蔵書の可能性がある。内山永久寺について述べておく。

79【藤田 阿弥陀経 p.26】藤田氏は「『和州 内山本』『和州 安堵極楽寺蔵本』とあるのは、慈雲が参看した前掲①「和州 法宣律師の手より得たものと同じものをさすか？」

【藤田 浄土三部経 p.115】では「『和州 内山本』『和州 安堵極楽寺蔵本』とあるのは、慈雲が参看した前掲①『和州 宣律師の手より得たもの』と同じものをさすようである。」としている。

内山永久寺⁸⁰

地形的に三方を山に囲まれているので、山の内側の意味から内山といい、内山永久寺とも呼ばれ、院号を金剛乗院といた。西の日光と称された一大寺院であった。永久寺は永久年間（1113-1117）に鳥羽天皇の勅願によって、興福寺大乘院の第2世院主であった頼実が建立した。大乘院第3世院主になった太政大臣藤原師実の実子である尋範は、さらに造成を進めた。室町時代まで興福寺大乘院の末寺として繁栄した。江戸時代には寺領971石となり、真言宗寺院となった。東大寺・興福寺・法隆寺に次ぐ寺院として優遇されたという。寛文年間にも52の堂宇を数えた。しかし明治7年に廃仏毀釈によって完全に消滅した。

『和州安堵極楽寺蔵本』が『内山本』（内山永久寺所蔵の梵写本か）を写した可能性がある。極楽寺について述べておく。

極楽寺⁸¹

奈良県生駒郡安堵町東安堵にある真言宗国分寺派の寺院。用明天皇2年（587）に聖徳太子によって建立された常楽寺を起源とする。往時には東之坊、西之坊、北之坊、南之坊、角之坊、奥之坊、明智坊、宮之坊など70ほどの塔頭があったといわれる。常楽寺は平安時代以降は衰退していった。寛弘3年（1006）に恵心僧都源信の助力により、諸堂を再建して、極楽寺と名を改めてといわれる。江戸時代の寛保3年（1743）以降は京都の御室仁和寺の末寺となった。塔頭の東之坊、西之坊も整備された。東之坊は別当寺といわれ、極楽寺の寺務をおこなった。

内山永久寺は、廃仏毀釈により廃寺になったが、安堵極楽寺は現在でも存続している寺院である。内山永久寺とは本寺、末寺との関係ではなかったようである。

次に慈雲の校訂用の『建久年本』と安堵極楽寺の関係について述べておく。

⑧『建久年本』和州 法宣律師（建久年間1190-1198）

慈雲は、校訂用としての『建久年本』のあった場所は明記していない。手掛かりとなるのは、和州にいた法宣律師という僧侶である。吉田恵弘師の著書『金胎両部真言解記』に極

80 『内山永久寺の歴史と美術（資料編）』東京国立博物館編1994. pp.7-8.参照

81 『安堵町史 本編』安堵町史編纂委員会編 1993, pp.726-736.

『安堵風土記 安堵町の歴史と伝承』安堵町歴史民俗資料館編 1996, pp.40-42.

楽寺の住職として法宣阿闍梨が、断片的に記載されていた⁸²。大阪市の興徳寺の住職であった吉田恵弘師は、昭3年より京都帝国大学の選科生となり、榊亮三郎教授についてサンスクレットの研修に励んだようである。戦災で大阪の自坊の消滅により、昭和30年に縁あって極楽寺に入寺した。そのときに真言関係の経典が、法宣阿闍梨や覺城阿闍梨により享保年間後半から元文年間初めに写された朱注入りのものなどを見つけたようである。たとえば『金剛界蓮華部心念誦儀軌』（極楽寺法宣阿闍梨書写本 享保11年初冬）や『胎藏界梵字儀軌』（極楽寺法宣阿闍梨書写本 元文4年）などがあったとしている。

法宣律師が、極楽寺の住職と判明したので、極楽寺に過去帳か位牌がの有无の確認をした。位牌があると確認がとれ、覺城阿闍梨（1686-1744）と法宣阿闍梨（1702-1777）の年代確認ができた。その後、安堵町の郷土史から断片的であるが、法宣律師について記載されていたことが判った。位牌と郷土史の記述より簡単であるが、法宣律師について述べておく。生誕年代は、位牌の享年より計算したのもである。

法宣（1702-1777）⁸³

快嚴ともいわれ、元禄15年（1702）に西椎木村（大和郡山市椎木町）の中條家の生まれである。極楽寺第8世住職で、傳燈大阿闍梨の称号を持つ。安永6年正月22日に76歳にて寂した。

これにより慈雲が地名を期していなかった『建久年本』（和州 法宣律師の手より得たもの）と『和州 安堵極楽寺蔵本』の梵写本は、極楽寺にあったと考えられる。また『内山本』（内山永久寺蔵本か）も同じ梵写本と考えて『内山本』はそれら一連の梵写本の原本と思

82 吉田恵弘著『金胎両部真言解記』極楽寺発行 1970, p.352, p.704.

覺城阿闍梨、法宣阿闍梨に関しては人名辞典などからの情報が得られなかった。実際に極楽寺を訪問して、位牌より存命時期が確定できた。住職の田中全義師に紙面を借りてお礼を申し上げます。

覺城阿闍梨位牌記載分

「延享元甲子年九月廿四日西剋 五十九歳 大阿闍梨法印權大僧都覺城大和尚位」

法宣阿闍梨位牌記載分

「東之坊中興ヨリ八世ノ師 傳燈大阿闍梨法宣不生位 安永六丁酉年正月二十二日申剋寂 七十六歳 極楽寺密宗中興ヨリ三世也裏建立」

83 『安堵町史 本編』安堵町史編纂委員会編 1993, pp.726-736.

『安堵風土記 安堵町の歴史と伝承』安堵町歴史民俗資料館編 1996, pp.40-42.

われる。

残念ながら、高貴寺DVDには『建久年本』（和州法宣律師）の梵写本は、完全には収められていない。(0451)『弥陀経梵本 中』のなかに一部だけ、読み取れるところがある。第4段（第4章）までの部分の校異として、記載されている。藤田宏達氏が校訂した『阿弥陀経』のローマナイズ校訂本のなかの注で寂巖本の原文が（単語の欠落部分など）(0451)『弥陀経梵本 中』の校異と合致しているので、内容的にも同じものと考えた。(0451)『弥陀経梵本 中』は、明和4年（1767）に作成された。これから、法宣が梵文『阿弥陀経』を写した時期の下限が明和4年（1767）となる。

第3項 文亀年本（石山寺所蔵本）に関連する梵文『阿弥陀経』

a) 石山寺所蔵『梵漢阿弥陀経』

（旧足利惇氏氏写本分）⁸⁵

写本云 右以江州石山蔵本写之 寛保第三龍集癸亥八月十三日写之畢

朱書以御本校合之畢 于時宝曆壬午歳次晩夏晦日

明和六年己丑七月奉命恭修写焉 伴隸慧鎧幸撰州萬法蔵院住侶顕明律師正本与京師六波羅蜜寺前監法印智聞秘蔵一卷矣因任師教再校檢之則以△圈為顕明異○圈点智聞之巻智聞之字多同朴本顕明之文頗類前校 于時閣筆廿九日也

寛保第三（寛保3年 1743）に書かれた江州の石山寺の梵本を宝曆壬午歳（宝曆13年 1763）に朱書きで校訂したとしている。後に明和六年己丑（明和6年 1769）慧鎧が撰州萬法蔵院の顕明は△印をもって、京都の六波羅蜜寺の智聞は○印をもって二人の所持していた二種の梵本と校合したとする。

江州の石山寺は、滋賀県大津市石山寺にある真言宗の寺である。慧鎧は、不明であるが、年代的には真宗本願寺派の学僧に同名のものがいた。この真宗本願寺派の慧鎧は、遊諸仏国子とも呼ばれ『真宗安心義』『俳諧四十八願』の著書があり、俳人でもあった人物である。天明元年（1781）に没している。候補のひとりとして、記しておく。撰州萬法蔵院は不明である。京師六波羅蜜寺は、空也上人で有名な京都府京都市東山区にある、六

84 藤田 宏達 校訂『梵文無量寿経 梵文阿弥陀経』法蔵館 2011, pp.83-86.

85 【藤田 阿弥陀経 p.28】藤田宏達氏所蔵分 現在、石山寺の『梵漢阿弥陀経』は欠本となっているようである。石山寺の『梵漢阿弥陀経』奥書の詳細が判る唯一のものといえる。

波羅蜜寺と思われる。ただし、この奥書を見る限り石山寺の写本は、2度にわたり校訂をおこなっていることになる。

b) 寂巖『梵漢両字阿弥陀経』⁸⁶ 元文3年（1738）

奥書は以下のようにになっている。

元文三年七月七日寓洛西五智山写畢 江州石山蔵本也

其巻軸云 文亀之比於倉坊少加修 補畢 梵形臨写不失古体後之写者以此

黄蘗沙門寂巖

石山寺の写本を元文3年（1738）に五智山で写された。その後、少しながらの修正をおこなったとしている。

c) 常明『梵漢両字阿弥陀経』 安永2年（1773）

常明は、曇寂（1674－1742）の弟子で、曇寂の寂巖とは兄弟弟子の関係であった。常明について述べてみる。

常明（1702－1784）⁸⁷

和泉の国で生まれた。根来山の学頭で五智山の山主で字は空白と称した。12歳で和泉の家原寺の基榮の門下に入った。のちに久蔵院で修行をした。20歳以後は遊学し、俱舎唯識を高範や湛慧に学んだ。また、法華や華嚴を園城寺の義瑞や鳳潭にも学んだ。35歳の時に五智山の曇寂に入門して宗義を修めてた。地藏院流（土巨流）も修した。41歳で曇寂の遺命により、五智山主となった。61歳で根来寺の衆首となった。天明4年3月に寂す。83歳で寂した。法嗣に、寂巖や覺眼がいる。

刊本として京都で出版された。縦に梵字を書いて、右側にはカタカナで発音を振っている。梵字の左側には、漢字で単語の意味を書いている。第18丁裏に「安堵本作○諦乗説ma」とあり「○」は、梵字の崩れたように見る。諦乗は寂巖のことである。「安堵本作○」では、不明の箇所を寂巖は「ma」という文字と解説しているようである。この刊本には記

86【藤田 阿弥陀経 p.27】

87【密教大辞典 p.1201】参照

載はないが、香月院深励によると石山寺蔵本によるものとしている。⁸⁸この梵写本は栗原重冬師が、Max Müllerに送られたうちの1冊である。⁸⁹

第4項 その他の梵文『阿弥陀経』

a) 『梵文阿弥陀経』寛政壬子4年（1792）

折本型の刊本として、大阪で出版されたものである。序と奥書を下記に示す。

河内慈雲律師校梵文彌陀経而成其績偉矣善本既蔵諸能華頂山予獨惜其
傳之不廣也遂國字音之興緇素共之又請律師上之梓夫修多羅者親出於
佛口而澄濁世之摩尼珠也今誦梵文則無以異佛音也嗚乎摩尼珠不磨無
見其光珠既光明矣世之滓濁豈不澄澈乎抑亦律師之賜云

寛政壬子中秋 幻住謹識 時舊堂蔵 寛政四壬子歳十月穀旦

大坂堺筋通長堀橋北 書林 増田屋源米兵衛

予○獲梵文阿彌陀経善本不知何人所校頗為精寶之久矣乃懼其泯滅無
傳也國字音之以付肘劓刷與緇素共之夫修多羅者親出於佛口而澄濁世之
摩尼珠也今誦梵文則以異佛音也摩尼珠不磨無見其光珠既光明

矣世之滓濁豈不澄澈乎哉 寛政壬子中秋 勝道謹識

時舊堂蔵 寛政四壬子歳十月穀旦發行

寛政3年（1792）に幻住と勝道という人物が、梵文弥陀経の善本によって編集したとしている。1頁に4行の間隔で、梵字が書かれている。梵字の右横にカタカナで、発音が記されている。幻住と勝道については不明である。両名は、第3節の⑮（0078）『阿弥陀経諸譯

88 香月院深励著作集7『阿弥陀経講義3』法蔵館, 1981, p.54.

「一にはもと石山寺の珍蔵の梵本これは文龜年中に寫した處の梵本なり。此一本は書方が下行に書いてあり。下行とは常の漢和の書物と同じことで豎に一行づつ上から下へ書きくだすを下行と云ふ。

即ち常明法師が梵本阿彌陀経と云ふを開版せらるは此梵本によられたと云ふこと。」

小島通正「日本梵語学史の研究—五智山の梵語学、特に寂巖について—」

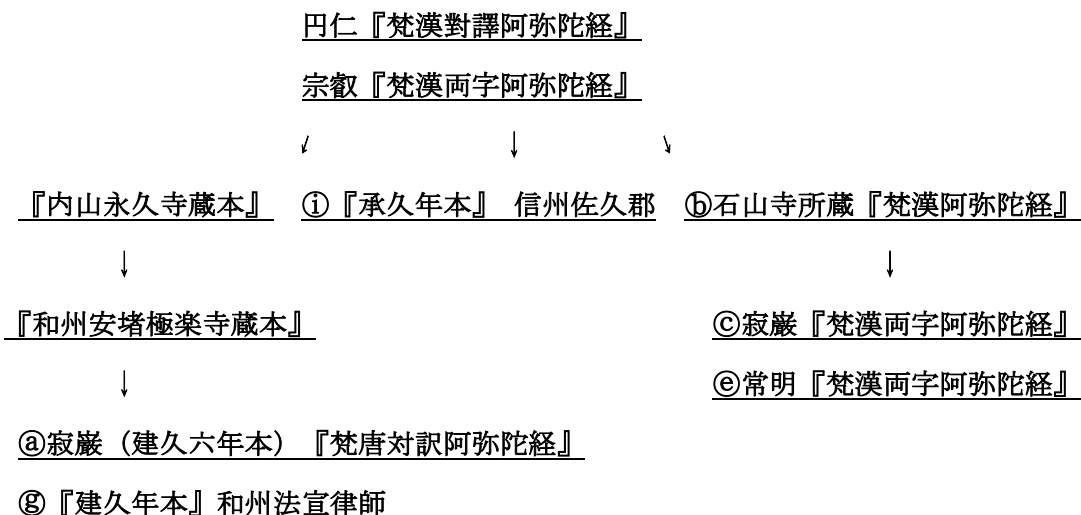
『叡山学院研究 紀要 創刊号』1978, p.36.

小島氏は、常明より35年前に寂巖が写したb) 寂巖『梵漢両字阿弥陀経』が石山寺本であり、それによってc) 常明『梵漢両字阿弥陀経』の校訂が可能としている。

89 羽溪了諦「明治佛教學者の海外進出」『現代佛教』105号 1933, p.99.

互證』に関わったことがうかがえる。

慈雲の校訂に使用した梵写本の流れ



第2節 高貴寺所藏の梵文『阿彌陀經』について

高貴寺DVDの梵文『阿彌陀經』を調べたところ、15種類あることが判明した。それらを列挙して、次に各写本の概略を述べてみたい。①-⑦は本詮部にあり⑧-⑮は末詮部にあった。②③⑨⑫は刊本（木版出版）である。

- ① (0028) 『弥陀經梵本 承久本』
- ② (0036) 『梵篋三本 漢梵・普賢行願讚 阿彌陀經 般若心經』
- ③ (0037) 『梵篋三本』
- ④ (0038) 『梵篋三本』
- ⑤ (0052) 『梵文彌陀經』
- ⑥ (0053) 『弥陀經梵本』
- ⑦ (0054) 『梵本阿彌陀經』
- ⑧ (0063) 『アミダ經梵本』
- ⑨ (0079) 『梵文阿彌陀經諸譯互證 全』 梵学津梁第三百十九卷
- ⑩ (0080) 『梵文阿彌陀經諸譯互證 地』
- ⑪ (0081) 『阿彌陀經諸譯互證 上 乾』

- (0082) 『阿彌陀經諸譯互證 下 坤』
- ⑫ (0083) 『梵文阿彌陀經 義釋上』 梵学津梁卷代三百四十二
- (0084) 『梵文阿彌陀經 義釋中の上』
- (0085) 『梵文阿彌陀經 義釋中の下』
- (0086) 『梵文阿彌陀經 義釋下』
- ⑬ (0087) 『彌陀經 國讀』
- ⑭ (0450) 『弥陀經梵本 上』
- (0451) 『弥陀經梵本 中』
- (0452) 『弥陀經梵本 下』
- ⑮ (0078) 『阿弥陀經諸譯互證』 梵学津梁第二百六十一卷？

第3節 各写本について

- ① (0028) 『弥陀經梵本 承久本』

書写の時期は寛保辛酉冬（寛保元年1741）となっている。写本の形は折本型である。1頁に梵字を3行書いており、各梵字の行の下に漢字の単語訳が書かれている。奥書には

承久三年八月三日寫光覺阿闍梨所持本○ 亮 法三十二 俗五十七

寛保辛酉冬在信州佐久郡内山村正安寺辯天堂而繕寫焉 小比丘慈雲敬拝識

慈雲は寛保辛酉（寛保元年 1741）より3年間にわたり、禪の研鑽のために信州正安寺の大梅禪師に師事している。この時期に『弥陀經梵本 承久本』の所在を知り、写したと考えられる。高貴寺のDVD資料の中に「筆者慈雲とあるが義文の字か」のコメントが書かれている。慈雲の弟子の尼僧義文が書いた可能もある。

- ② (0036) 『梵篋三本 梵漢 普賢行願讚 阿弥陀經 般若心經』

表紙には『梵漢 普賢行願讚 阿弥陀經 般若心經 刊本 天明三年 慈雲』と記されている。写本の形は、折本型である。その中に1冊ずつ『普賢行願讚』『阿弥陀經』『般若心經』と3冊に分かれている。梵字が1頁に梵字が3行ずつ書かれ、各梵字の行の下に漢字で、意味を書いている。刊行時期は天明3年（1783）となっている。刊行方法は木版印刷と思われる。各梵写本の最後のところに奥書が書かれている。

此經之有梵文予也得三本一則寫文龜年本石山所藏也其文下行一則建久年本得之和州法宣律師手一則承久年本得之信州佐久郡二本並右行皆有指注蓋是譯場之餘澤耳三本校讎互含得失至其取捨之則予也不敢且筆其多例證而便于受誦共之見聞共之遐

邇而有縁無縁同俱期蓮華藏云天明三癸卯夏 小比丘慈雲敬拜識

- 奥書より i) 文亀年本 (石山所蔵) (文亀年間1501-1503)
ii) 建久年本 (和州法宣律師) (建久年間1190-1198)
iii) 承久年本 (信州佐久郡) (承久年間1219-1221)

の3写本を校訂したことを記している。i) の 文亀年本については、石山寺の写本を見たのか、寂巖の写した『文亀年本』(正式には『梵漢兩字阿弥陀經』)を見たのかは定かでない。ただ、根来学頭の常明(1702-1784)が安永2年(1773)に刊行した『梵漢兩字阿弥陀經』が、石山本より写したといわれる。宝暦9年(1759)に常明から慈雲が42歳のときに密教の作法として『地藏院流』(土巨流)を伝授されている。寂巖の同門である常明からの情報提供の可能性もある。

③ (0037) 『梵篋三本』

これも折本形式になっており、表紙には『梵篋三本』とのみ書かれている。② (0036) 『梵篋三本梵漢 普賢行願讚 阿弥陀經 般若心經』が3冊本であったが、それらを合本して、1冊本にしている。奥書も同じ文章である。

④ (0038) 『梵篋三本』

和本形式になっており、表紙に『梵篋三本』と書かれている。その下に梵字でjnādīpaṃ^{ママ}と書かれている。さきの奥書には② (0036) 『梵篋三本』と③ (0037) 『梵篋三本』を各奥書も含め写したものである。この写本の奥書は次のように書いてある。

斯梵本也慈雲律師應某甲之需而所書彫 刻既成請寄版乎吾山故美其志藏之寶庫

云天明五年秋八月 洛東華頂山知藏誌

文化九壬申八月二十八日 洛西於虚空藏書写之 amṛta vihārā 智鑑

樂無限量信士 量譽壽心信女 為 bodhi 十三廻忌 十七廻忌

この奥書から、表紙の梵字名jnādīpaṃで僧名は「智鑑」(読みチトウか?)である。「鑑」には、馬具の「あぶみ」の意味と照明用の「火をともし皿」の意味がある。またamṛta vihārāは、洛西という言葉を手がかりにすると「阿弥陀寺」を示すと思われる。阿弥陀寺は、すでに廃寺となっているが、慈雲の京都での重要な拠点であった。場所は現在の上京区の西の端になる。この梵写本は、文化9年(1812)供養のために写本をおこなったと考えられる。

⑤ (0052) 『梵文彌陀經』

和本形式で1頁に梵字が規則正しく5行ずつ書いている。朱書きで訂正や覚書を書いている。最後に梵字でsamghā vedana 拝写 と書いている。

⑥ (0053) 『弥陀経梵本』

和本形式であり表紙に『弥陀経梵本』となっている。梵文のみ1頁に横書きで2行書かれている。単語ごとに、朱点が打ってある。奥書は「天明乙巳九月朔日 小子 智空敬拝書とのみ書かれている。」天明乙巳は、天明5年（1785）である。

⑦ (0054) 『梵本阿弥陀経』

折本形式で、表紙に『梵本阿弥陀経』と書かれている。1頁に梵字のみが、横書きで3行書かれている。朱書きで、梵字の訂正がおこなわれている。

⑧ (0063) 『アミダ経梵本』

和本形式で、梵字のみ1頁に縦に規則正しく書かれている。

⑨ (0079) 『梵文阿彌陀経諸譯互證 全』

刊本で和本方式となっている。

第1頁には凡例が書かれており、文の最後には「寛政甲寅季夏 疊峰法護識」と書かれている。刊行時期は寛政甲寅（寛政6年1794）となる。題目は以下のとおり。

梵学津梁第三百十九卷末註 第二之十一 梵文阿彌陀経諸譯互證

河内高貴寺沙門 法護 纂 同 寺沙門 諦濡校

1頁に10行書かれている。i) 漢字の訳、ii) カタカナで発音のふりがな付きの梵字、iii) 漢訳の羅什訳、iv) 漢訳の玄奘訳の4行を1ブロックとして、黒枠で区切っている。たとえば、頁の中では4行分を2ブロックと残りの「i) 漢字の訳 ii) カタカナでふりがな付きの梵字」の2行を加えて、1頁を10行に整理している。

⑩ (0080) 『梵文阿彌陀経諸譯互證 地』

さきの⑨ (0079) 『梵文阿彌陀経諸譯互證 全』と同じ方式で手書きされたものである。刊行前の手書き本と思われる。1頁には12行書かれている。さきの4行を1ブロックとして、1頁に3ブロックずつ書かれている。梵字には、発音のふりがなは付いていない。

⑪ (0081) 『阿彌陀経諸譯互證 上 乾』

(0082) 『阿彌陀経諸譯互證 下 坤』

和本形式となっている。1頁に横書きで梵字を2行ずつ書いている。梵字の下には黒、朱、青と色を変えて、漢字で単語が記されている。所々の梵字に他の写本の対照をしている。

たとえば梵字でyaに対して「ya:石」と別の箇所のyaに対して「yā久」と書かれている。「石」は石山本「久」は建久の略である。高貴寺のCD資料の中に「慈雲校 互證の原本」とのコメントが書かれている。そうならば寛政6年（1794）以前の作成となる。

⑫ (0083) 『梵文阿彌陀經 義釋上』

(0084) 『梵文阿彌陀經 義釋中の上』

(0085) 『梵文阿彌陀經 義釋中の下』

(0086) 『梵文阿彌陀經 義釋下』

刊本で和本方式で全4冊となっている。寛政甲寅（寛政6年1794）7月の刊行となっている。梵字も文章も縦書きとなっている。梵文の文法上の解釈を伝統的悉曇学により行っている。題目は以下のとおり。

梵学津梁卷代三百四十二 末詮第二ノ三十八 梵文阿彌陀經義釋卷第一

河内 高貴寺 沙門 法護 述 同 寺 沙門 諦濡 同校 江戸沙門 典壽

法護が口述したものを諦濡が校訂したとしている。高貴寺以外の僧侶で、校訂者として典壽の名が挙がっている。典壽について述べてみる。

典壽 (?-1815)⁹⁰

典壽律師は、三縁山（江戸 増上寺）で修行をした後に京に移った。はじめは、獅が谷の金毛（院）窟（現在の法然院あたり）に住した。博学で、特に華嚴に通じていた。また、文献学にも通じ、寛政4年（1792）に刊行された『阿彌陀經疏』の跋を書いたり、音澁上人と大藏對校録の校正をおこなった。嵯峨寶篋庵にて、文化12年7月23日に示寂。

典壽と高貴寺のとの関わりは、不明である。しかし、天明5年（1785）に法護が高貴寺を正法律の本山と認定してもらうために江戸の幕府へ出かけた。江戸では増上寺に滞在し、増上寺で『梵本阿彌陀經』を講義した。この時に典壽と出会いがあった可能性がある。

⑬ (0087) 『彌陀經 國讀』

和本方式となっている。1頁に横書きで梵字を2行ずつ書いている。梵字の上に縦書きで漢字で訳を入れている。また朱書きで梵字の横に点の記入や下に訂正をしている。

90 『浄土宗全書』浄土宗典刊行會 1928-1936, 第5巻 p574, 第18巻 p360, p529, p544.

典壽律師については、断片的な資料しか得られなかった。

⑭ (0451) 『弥陀経梵本 上』

(0450) 『弥陀経梵本 中』

(0452) 『弥陀経梵本 下』

和本方式となっている。1頁に横書きで梵字を2行ずつ書いている。梵字の上に朱書きで縦に漢字で訳を入れている。梵字の下にも数字や訂正を朱書きで行っている。(0451)

『弥陀経梵本 上』の終わりには『校異』として建久本、文亀本と梵字の違う箇所を書いている。奥書は次のように書かれている。

寫梵弥陀経謹加朱點畢願見聞者相見莫逆俱生
極樂世界而已明和丁亥秋小比丘飲光在河州雙龍庵
扨記然斯中三本校讎私取捨之若欲寫別有古本

慈雲（飲光）が明和丁亥（明和4年 1767）に書いたものである。

⑮ (0078) 『阿弥陀経諸譯互證』

和本型式である。第1頁には

梵弥陀経諸譯互證 幻住居士 受筆

と書いている。梵字を縦に一区切りずつ書いており、その右に漢字で訳を左側に秦訳（羅什訳）と唐訳（玄奘訳）を書いている。しかし第1頁は1枚分を貼り付けている。次の頁からは、書き手が変わって罫線を入れた原稿用紙を使用して書き始めている。再び表題が書かれている。薄紙に『梵学津梁第二百六十一卷』と書いて貼り付けている。続いて『末證二之一 阿弥陀経諸譯互證 優婆塞 幻住 受筆』と書かれている。次から第1頁と同じように梵字に対して漢訳2本が対照されている。それらが終わると① (0028) 『弥陀経梵本 承久本』の奥書と同じものが書かれている。

承久三年八月三日寫光覺阿闍梨所持本○ 亮 法三十二 俗五十七
が記されている。次に⑭ (0452) 『弥陀経梵本 下』の奥書と同じものが書かれている。

寫梵弥陀経謹加朱點畢願見聞者相見莫逆俱生
極樂世界而已明和丁亥秋小比丘飲光在河州雙龍庵
扨記然斯中三本校讎私取捨之若欲寫別有古本

そのあとに⑭ (0451) 『弥陀経梵本 上』に書かれている『校異』（文亀本と建久本との相違）が記されている。再び① (0028) 『弥陀経梵本承久本』の奥書が書かれている。

承久三年八月三日寫光覺阿闍梨所持本○ 亮 法三十二 俗五十七

寛保辛酉冬在信州佐久郡内山村正安寺辯天堂而繕寫焉 小比丘慈雲敬拝識

但此本ハ梵漢トモニ他本〇

最終頁には、以下のように書かれている。

寛政四壬子十二月十七日写畢 勝道

寛政4年（1792）に勝道が、写し終わったと書かれている。高貴寺のDVD資料の中に「慈雲述」と書いている。この写本に関わった幻住居士と勝道については、今のところはっきりとは判らない。高貴寺とは関係ない別の写本で、本章第2節第4項の「その他の梵文『阿弥陀経』」で紹介した2名の名がでてくる『梵文阿弥陀経』（時舊蔵）の刊本がある。この刊本の形式は折本である。梵字のみを縦書きにしてカタカナで梵字の読みが、振られている。寛政四壬子十月穀旦（穀旦は吉日の意味）に大阪の書林増田屋源兵衛が刊行したものである。勝道が⑮（0078）『阿弥陀経諸譯互證』を写し終える2ヶ月ほど前に、刊行されたことになる。刊本の⑨（0079）『梵文阿彌陀経諸譯互證 全』より2年早く刊行している。高貴寺の写本や慈雲の口述を参考にして『梵文阿弥陀経』（時舊蔵）を作成し刊行した可能性はある。

第4節 梵文『阿弥陀経』ローマナイズ対照と分析

第1項 単語の変化について

(0036) 『梵篋三本 漢梵・普賢行願讚 阿弥陀経 般若心経』の梵文『阿弥陀経』（慈雲校訂本）をローマナイズして、以下のことが判った。

1. 単語で音が重複されている例

① 子音t音が、重複される例

parikīrtanaṃ → parikīrttanam

pratīyatha → prattiyatha （rが落ちて pattiyathaになることもある。）

② 半母音r音が、挿入される例

lokadhātuḥ → lokardhātuḥ

2. 単語で子音が落ちている例

bodhisattvair → bodhisatvair mahāsattvaiḥ → mahāsatvaiḥ

3. 単語で母音が、変換されている例

kiṃkiṇī → kaṃkaṇī

以上の変化は、承久本や石山寺本にもみられる変化である。

第2項 梵文の校訂について

慈雲は、下記の3種類の梵写本によって校訂をおこなった。

- i) 文亀年本（石山寺所蔵）（文亀年間1501-1503）
- ii) 建久年本（和州法宣律師）（建久年間1190-1198）安堵極楽寺蔵本に相当
- iii) ①（0028）『弥陀経梵本 承久本』（寛保元1741写）

そして校訂本として（0036）『梵篋三本 漢梵・普賢行願讚 阿弥陀経 般若心経』の梵文『阿弥陀経』を完成した。高貴寺DVDには『文亀年本』（石山所蔵）『建久年本』（和州法宣律師）は、見当たらなかった。しかし（0451）『弥陀経梵本 中』（高貴寺DVDの題目は『弥陀経梵本 中』となっているが、画像は『弥陀経梵本 上』である。）において、慈雲は梵字の違う箇所を『文亀年本』と『建久年本』として、本文の最後に訂正の梵字を校異として記載している。第4段まで校異があり、『文亀年本』と『建久年本』の一部分が読み取れる。『文亀年』と『建久年本』は、校異により修正したものを対照してみた。

（0036 慈雲本） namaḥ sarvajñaya :

（0451 元の本） nama sarvajñaya :

（0451 石山本） nama sarvajñaya :

（0451 建久本） nama sarvajñaya :

（0028 承久本） nama sarvajñaya :

（0036 慈雲本） evaṃ maya śrutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ śrāvastyāṃ

（0451 元の本） evaṃ maya śrutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ śrāva

（0451 石山本） evaṃ maya śratam ekasmiṃ samaya bhagavāṃ śrāva

（0451 建久本） evaṃ maya śrutam ekasmiṃ samaya bhagavāṃ śrāśrāva

（0028 承久本） evaṃ mayā śrutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ śrāvastyāṃ

（0036 慈雲本） viharati sma jetavane anāthapiṇḍadaśa syārāme mahatā

（0451 元の本） viharati sma jetavane anāthapiṇḍadaśa syārāme mahatā

（0451 石山本） viharati sma jetavane anāthapiṇḍadaśa syārāme mahatā

（0451 建久本） viharati sma jetavane anāthapiṇḍada syārāme mahatā

（0028 承久本） viharati sma • jetavane anāthapiṇḍadaśa syārāme • mahatā

(0036 慈雲本) bhikṣusumḡhenā sāvaṃm avatrayodaśabhir bhikṣuśataih
(0451 元の本) bhikṣusamḡhenā sāvaṃm avatrayodaśabhir bhikṣuśatair
(0451 石山本) bhikṣusamḡhenā sāvaṃm avatrayodaśabhir bhikṣuśatair
(0451 建久本) bhikṣusamḡhenā sāvaṃm arvatrayodaśakibhir bhikṣuśatai
(0028 承久本) bhikṣusamḡhenā sāvaṃm avatrayodaśabhir bhikṣuśataih

(0036 慈雲本) abhijñatābhājñataih śthavirair mahāśrāvakai sarvar arhantaiḥ
(0451 元の本) abhijñatābhājñataih śthavirair mahāśrāvakai sarvar arhardbhiḥ
(0451 石山本) abhijñatābhājñataih śthavirair mahāśrāvakai sarvar arhardbhiḥ
(0451 建久本) ~~r abhijñatābhājñataih~~ śthavirair mahāśrāvakai ~~sarvar~~ arhardbhiḥ
(0028 承久本) abhijñanābhājñataih śthavirair mahāśrāvakai sarvar arhaḥ

このように、全体的には文脈は、他の梵写本もほとんど同じである。ここでは (0451) 『建久年本』のみ欠落 (r abhijñatābhājñataih, sarva の2語) がみられる。では、文脈の混乱した箇所の校訂を調べてみたい。第4段の部分では、以下のようにになっている。

(0036 慈雲本) saptaratnamayyaḥ puṣkariṇyaḥ **tadyathā suvarṇasya rūpyasya vaidūryasya**
(0451 元の本) saptaratnamayyaḥ puṣkariṇyaḥ 欠落
(0451 石山本) saptaratnamayyaḥ puṣkariṇyaḥ 欠落
(0028 承久本) saptaratnamayyaḥ puṣkariṇyaḥ 欠落
(0451 建久本) saptaratnamāyyaḥ puṣkariṇyaḥ 欠落

(0036 慈雲本) **sphaṭikasya lohitaṃuktasya aśmagarbhasya musāragalvasya**
(0451 元の本) 欠落
(0451 石山本) 欠落
(0028 承久本) 欠落
(0451 建久本) 欠落

(0036 慈雲本) **saptamasya ratnasyaḥ** aṣṭāṃgopetaḥ vāriparipurṇṇāḥ samatīrthikāḥ
(0451 元の本) aṣṭāṃgopeta vāriparipurṇṇāḥ samatīrthikāḥ

(0451 石山本)	aṣṭāṅgopeta vāriparipurṇṇāḥ samatīrthikāḥ
(0028 承久本)	aṣṭāṅgopetaḥ vāriparipurṇṇāḥ samatīrthikāḥ
(0451 建久本)	aṣṭāṅgopetaḥ vāriparipurṇṇāḥ samatīrthakāḥ

太文字 "**tadyathā suvarṇasya rūpyasya vaiḍūryasya sphatikasya lohitaṃuktasya aśmagarbhasya musāragalvasya saptamasya ratnasyaḥ**" は七宝池の構成している宝石の説明と思われる。

「八功水」の前に慈雲が、校訂として挿入している。慈雲は他の3種類の写本が合致していてもその梵文は採用せず、独自の校訂したあとがみられる。(校異の指示が、この箇所ではなかったので、ローマナイズは、ほぼ同じものとなっている。)

まとめ

高貴寺にある15種類の阿弥陀経写本の紹介を兼ねて述べてみた。慈雲が校訂に使用したとする『石山寺本』『建久年本』は、校異という箇所では断片的に確認はできたが、梵本が確認できなかった。阿弥陀経の比較対照をおこなった一番古いのが、⑭ (0451) 『弥陀経梵本 上』で、明和4年(1767)であった。慈雲が② (0036 『梵篋三本』) と③ (0037) 『梵篋三本』の奥書に3写本より校訂したと記したのが、天明3年(1783)であるから、15年以上の経過があった。梵文を校訂するという難易度は計り知れないと思う。また、慈雲が参照した法宣律師の『建久年本』の原本は、法宣が住職をしていたと思われる『安堵極楽寺』にあったものと位置づけてみた。『建久年本』『和州安堵極楽寺蔵本』『内山本』の関係が明らかになったと思う。また、法宣律師という人物も極楽寺の住職だったこともはっきりと判った。法宣律師の『建久年本』は、安永6年(1777)以前に写されたことも判明した。梵写本の原本は、内山永久寺にあった可能性も大きくなってきた。幻住居士と勝道のように高貴寺の写本を学習して、独自に梵字の阿弥陀経を刊行した資料も出てきた。慈雲が校訂に使った梵写本の流れを下記に示しておく。

高貴寺阿弥陀経の流れ（年代の判明したもの）

①（0028）『弥陀経梵本 承久本』 1741年

↓

⑬（0451）（0450）（0452）『弥陀経梵本 上中下』 1767年

↓

②（0036）『梵篋三本 漢梵・普賢行願讃 阿弥陀経 般若心経』 1783年

③（0037）『梵篋三本』 1783年 → ④（0038）『梵篋三本』 1812年供養の為智鑑写

↓

↓ ⑤（0053）『弥陀経梵本』 1785年 智空写

↓

↓

↓

⑭（0078）『阿弥陀経諸譯互證』 幻住 勝道1792年

⑧（0079）『梵文阿彌陀経諸譯互證 全』 1794年刊行

⑪（0083）（0084）（0085）（0086）『梵文阿彌陀経 義釋』 4冊 1794年刊行

この中で③⑧⑪の3種類がオックスフォード大学へ送られた。

第6章 『梵学津梁』の梵文『普賢行願讚』について

はじめに

梵文『普賢行願讚』の研究は、古くは渡辺海旭⁹¹氏の研究が有名である。また高貴寺の『普賢行願讚』については一部は『慈雲尊者全集』に活字印刷で紹介されている。高貴寺が所蔵する梵文『普賢行願讚』について述べていきたい。

第1節 『普賢行願讚』について

第1項 梵文による『普賢行願讚』について

『普賢行願讚』の梵文題名は"Bhadracarī nāmārya samantabhara praṇidhāna"である。梵本は、ネパール系の北伝本と不空三蔵により、インドの南地方よりもたらされた南伝本の2系統がある。不空三蔵の南伝本が、慈雲が入手したものに近いといわれている。

第2項 漢訳『普賢行願讚』について

漢訳として、以下の3種類が該当する。

- a) 『文殊師利発願経』 仏陀跋羅（覚賢）訳 420年
- b) 『普賢行願讚』 不空訳 746–771年
- c) 『大方広仏華嚴経』（『四十華嚴』）般若訳 796–798年

第3項 日本に将来された梵文『普賢行願讚』について

日本への梵本の将来は、以下のように4回あった。

i) 空海『御請来目録』

『梵字普賢行願讚一卷』大同元年（806年）

ii) 圓行『靈巖寺和尚請来法門道具等目録』

『梵字普賢行願讚一卷 梵漢両字相對』承和6年（839年）

iii) 恵運『恵運禅師将来教法目録』

『梵本普賢行願讚一卷』承和14年（847年）

iv) 圓仁『入唐求法目録』

『梵漢對譯普賢行願讚一卷』承和14年（847年）

91 DIE BHADRACARI EINE PROBE BUDDHISTISCH—RELIGIÖSER LYRIK

VON KAIKIOKU WATANABE LEIPZIG 1912.

しかしながら、圓行、恵運、圓仁の請来した『普賢行願讚』は散逸した考えられている。その結果、空海の請来した『梵字普賢行願讚一卷』のみが残ったといわれる。

第2節 梵文『普賢行願讚』について

第1項 高貴寺DVD以外の梵文『普賢行願讚』について

先行研究によると以下のものがみられる。⁹² 奥書の判るものは書いておく。

㉑ 『普賢行願讚』一軸 河内 金剛寺蔵⁹³

全六十二頌完結般若三蔵對註あり梵字漢字とも三十帖策子中に同等と見得べきもの数多あり弘法大師筆ならん

㉒ 『梵字普賢行願讚』一帖 東寺三密蔵

承安元年六月九日於仁和寺功德房以常林房御本書之同交勘了顕耀

㉓ 『梵漢對翻普賢行願讚』一卷

于時永和五年正月廿二日於總持寺金剛臺 以東寺交合本書寫了右筆 永遍 生十八歳

享保十四年己酉七月以重校合了用紫墨是也 道空 行年六十四

元文二年十月以右本書寫校了洛西比丘旅宿沙門 敬覺

㉔ 『普賢行願讚梵本』一卷

享保十三年歳次戊甲四月下旬於但馬國湯嶋書寫之洛西五智山沙門曇寂重校本云

于時永和五年正月廿二日於總持寺金剛臺以東寺本交合書寫右筆 永遍 生年十八書之

表紙文重校了 篠尾山大總持寺

享保十四年己酉七月以大總持寺本重校合了用紫墨者是也

彼本梵字右附漢字今名隨當沙門 曇寂 五十六

92 小島通正「日本梵語史の研究 宗淵写本中に見る普賢行願讚について」

『天台教学報』18,1976, p.72. ㉑-㉔記載分

泉芳璟「梵文普賢行願讚」『大谷学報』10, 第2號1929, p382.㉑-㉔記載分

93 金剛寺の『普賢行願讚』に関しては、北海道大学の林寺正俊氏が、漢字で音写した新出の『普賢行願讚』の発表をしている。詳しくは以下の論文に記載されている。

林寺正俊「金剛寺の新出『普賢菩薩行願讚』サンスクリット音写本」

インド哲学仏教学 24, 2009, pp.83-102.

Shoshun Hayasidera (2012) 'The Newly Found Text of Puxian pusa xing yuan zan 普賢菩薩行願讚 (Bhadracaryāpranidhāna) in the Kongo-ji Manuscript Collection' 国際仏教学大学院紀要 第16号.

享保二十年乙卯十一月於京華以五智山藏本書寫之

元文三年十月朱校 沙門寂巖 三十四

㊦『普賢行願贊梵本』天明三年成 敬光 一卷

①『普賢行願讚梵本』文政元年八月十六日拜寫 宗淵 一卷

安永九年庚子秋八月令敬天寫之九月十八日校合竟予往
歲自寫此贊梵本一部秘之庫中最爲善本而今復見其本被加
韻公私考者多焉雖所不可取多存亦以可爲異本也韻公字鳳
韻現在京北槇尾山衆中也

秋九月廿一日記 釋敬光自題

于時文政元年秋八月十六日法華山元慶寺藏校合

法印權大僧都妙胤宗淵

㊧『普賢行願贊梵唐對證』道叡 一卷

文化九年之夏以仁周苾芻所持之本寫之 速成就院住持比丘道叡七十一歲

㊨『普賢行願贊梵本』日光 天海藏

①『普賢行願讚諸譯互證 上下』（智燈は梵字を泉芳璟氏が漢字に直している）

文化乙丑仲夏令豊後智専子繕寫之 智燈拜 文化丙寅二月九日謹寫 金洲

①『梵本普賢行願讚』折本

智積院藏版 天保三年壬辰 仲秋 小比丘乙雲

㊥『普賢行願贊梵本』の敬光は、天台宗に属しているが、慈雲の弟子でもあった。敬光の略歴を下記に述べておく。

敬光 （1740－1795）

天台宗の僧侶で、近江園城寺法明院に住した。元文5（1740）に生まれた。俗姓は伊佐氏で宇多天皇の後裔であるという。寛延3年（1759）に園城寺の敬雅僧正に師事した。慈雲について悉曇を学び、兼て密灌を伝う。寛政7（1795）に病により寂す。寿五十六。円密禅戒の四宗をよく研鑽し、山家大師の原点に戻るよう、終始その復古運動に努力した。著書は多く、戒律、顕教、密教、梵学と方面にわたる。『円戒膚談七卷』『大乘比丘行要鈔六卷』『大乘十善戒儀一卷』『山家宗門尊祖儀一卷』『大日経心目講翼一卷』『遮那経講翼一卷』『法華梵积講翼一卷』『悉曇藏序講翼一卷』等がある。

第3節 慈雲と梵文『普賢行願讚』について

慈雲にとって梵文『普賢行願讚』は、梵語研究へ進んだ動機となったものである。高野山の真源阿闍梨との出会いが、関与している。真源より梵文『普賢行願讚』を与えられたのが、梵学の道を歩むこととなった重大な出来事であった。詳しくは、弟子の諦濡が書いた『血書行願賛梵本』の跋に書かれている。跋と奥書は以下のとおり。⁹⁴

跋文曰

沙彌帝須從予發普賢大心者也斯行願品 moghasamudratha (空海) 受 cinavikṣayaṃ (支那國) 惠果阿闍梨已來信 ādityamuroma 勝緣中古湮沒人不知受誦不肖子 kāśyapa (飲光) 倣五失三不之嘆發西邁微志時年十八又見法滅相起普賢大心時年十九居三十年斯梵本得之高野山上綱真源手三四披讀遺憾艱解置之而不可置忘而時憶循先師貞紀大和上悉且讀法捧卷至四五十回遂句義現於葉上七九例聲溢于字間於茲乎知宿緣有在教授之二三子嗚呼現緣亦不可思議 受誦有入帝須其一數云題之血書後

bhikṣukāśyapavandaṃ 血書奥書曰

明和庚寅三月十九日於京師寶珠山地福寺刺指血寫 小沙彌 tejñe 稽首拜誌

弟子の帝須（諦濡の略）の書いた『血書行願賛梵本』は、その奥書より明和庚寅（明和7年1770）となり、慈雲53才となる。跋文からは、まず『普賢行願讚』が空海によって、日本にもたらされた経緯が書かれている。梵学研究の道に入る動機には、真源がかかわっていることが記されている。高野山上綱真源より『普賢行願讚』が贈られたこととその理解に難渋したと書かれている。真源より『普賢行願讚』を受け取った次期は「年十九居三十年」となっている。合計年数の慈雲の年令は49才となり、この次期では、真源は遷化している。（慈雲41才の時に、真源が遷化している。）39才の時に真源より『普賢行願讚』を受け取ったと考えられる。真源が亡くなる少し前に真源から慈雲に義浄の『南海寄帰伝』の解説書作成を勧められた。慈雲は、宝暦8年（1758）の5月半ばより始めて、7月27日に『南海寄帰伝解纜鈔』7巻を完成させた。しかしながら、真源は6月19日に遷化していた。真源は、慈雲の研究に大いに影響を与えたといえる。真源について、以下に紹介しておく。

94 「慈雲尊者遺芳」日貿出版1980, 項目番号116番（ページが記載されていない）

真源 (1690—1758)⁹⁵

高野山の学僧で、本然とも号した。摂州丹生山田（神戸市北区）で元禄3年に生れた。14歳の時に出家し、高野山の一乗院で入壇し灌頂を受けた。宝蓮院恵潤阿闍梨や日光院英仙阿闍梨、覚心、河州地藏寺蓮体、西禅院采融阿闍梨等を師として、研鑽をおこなった。享保16年（1731）に若王山福寺（神戸市北区山田町 現在の無動寺）を再興して、福寺に住持した。寛延元年（1748）に高野山の遍照光院快雄和尚の遷化した。その命を受けて成蓮院に住持し、左学頭に進んだ。密教法式や經典の刊行に努力した。宝暦8年6月19日69才にて寂する。門弟には智等覚本房、通伝、見心がいる。

第4節 高貴寺所蔵の梵文『普賢行願讚』について

高貴寺の所蔵の梵文『普賢行願讚』を調べたところ、18種類あることが判明した。それらを列挙して、次に各写本の概略を述べてみたい。文中の『日貝』は『普賢』の略（普の下の日と賢の下の貝の略）である。⑩⑫⑬⑭⑯は『慈雲尊者全集』に載っているもの。

- ① (0005) 『日貝行願讚』異本ノ一
- ② (0006) 『日貝行願讚』無量院本
- ③ (0007) 『普賢行願讚』異本ノ三
- ④ (0008) 『普賢行願讚』異本ノ四
- ⑤ (0036) 『梵篋三本 梵漢 普賢行願讚 阿弥陀経 般若心経』
- ⑥ (0037) 『梵篋三本』
- ⑦ (0038) 『梵篋三本』
- ⑧ (0045) 『普賢行願讚』異本ノ三
- ⑨ (0062) 『普賢行願讚梵本』
- ⑩ (0106) 『行願賛梵本』
- ⑪ (0107) 『日貝貝的示』
- ⑫ (0108) 『普賢行願讚的示』
- ⑬ (0109) 『行願讚諸譯互證考』
- ⑭ (0127) 『普賢行願讚梵本聞書之一』から (0136) 『普賢行願讚梵本聞書之十』
- ⑯ (0137) 『普賢行願讚梵本聞書 一』

95 『続真言宗全書』第四二 解説 高野山大学出版部 2008. pp.273—274.

- (0138) 『普賢行願讚梵本聞書 二』
 (0139) 『普賢行願讚梵本聞書 三』
 ⑩ (0140) 『普賢行願讚梵本釈』
 ⑪ (0449) 『普賢行願讚梵本』
 ⑫ (0152) 表題なし 『普賢行願讚・大佛頂大陀羅尼・大隋求大陀羅尼』

第5節 各写本について

① (0005) 『日貝行願讚』異本ノ一

表紙には表題が『日貝行願讚』異本之一と書かれおり。内題は次のようになっている。

梵學津梁 第七 本詮第一之六 a 普賢行願贊 異本之一

第七の数字七の横に小さく六と書かれている。写本の形は折本型である。1頁に梵字が3行ずつ書いている。梵字の右側に、漢字で意味を朱書きされている。奥書は次のようになっている。(2番目の一校了は朱書き)

貞永元年十月廿九日於成多喜房奉書写了 一校了 釋門花押

同年十一月一日朔日相當先師御遠忌開題了 一校了

安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文 受法主 大咏上位命而敬拜寫焉

最初に「貞永元年十月廿九日於成多喜房奉書写了 一校了 釋門花押」から貞永元年(1232)に釋門(花押があるが、不明)により、書写されたと書かれている。「安永二年癸巳六月於京西山善妙寺沙弥尼義文」から、その後の安永二年(1773)に慈雲の弟子である尼僧の義文が、京都の善妙寺で写したとしている。写本番号は(0005)となっているがImage番号は(0006)となっているので注意が必要である。

② (0006) 『日貝行願讚』無量院本

表紙には表題として『日貝行願讚』無量院本と書かれている。写本の形は折本型である。1頁に梵字が4行ずつ規則正しく書いている。内題は次のようになっている。

梵學津梁 第七 本詮第一之六 a 普賢行願贊 異本之二

奥書は次のようになっている。

高埜大師御本云云 件本西西法眼房在之云云以般若寺僧正本 一校了

寛元々年六月十六日於西山法華寺以松橋本書之了 介仏子頼一

まず「高埜大師御本」と書かれている。「高埜」は「高野」の異体字であり、高野山を意味するので、弘法大師空海の将来本であると述べている。次の「件本西西法眼房在之」である

が「酉酉」は「醍醐」の略字である。真言宗醍醐の法眼房（場所か僧かは不明）にあったようである。その後般若寺僧正の所持本により校訂されたと考えられる。般若寺僧正は、観賢（854－925年）のことである。観賢は、仁和寺の近くの鳴滝に般若寺を創建した人物であり、そのため「般若寺僧正」とも呼ばれている。東寺の長者や金剛峯寺の検校なども歴任した高僧であった。寛元々年（1243）に西山法華寺で、写されたとする。「松橋本」というのは、醍醐寺にいた源雅俊の子であり、醍醐十六世座主の元海（1094－1157）が、無量寿院を建立した。一説には無量寿院の松が橋の付近にあったので、無量寿院が「松橋」と呼ばれたといわれる。元海も松橋大僧正と呼ばれた。「無量寿院本」と「松橋本」は同一のものと当初筆者は考えていた。しかしながら「高埜山无量壽院古本也」という文章が、別の梵写本から出てくるので、高野山の無量寿院を示している。以上を頼一（一は、了のくずし字か、頼の次の文字を略した棒線かは不明）という人が紹介したと考えられる。写本番号は(0006)となっているがImage番号は(0007)となっているので、注意が必要である。

③ (0007) 『普賢行願讚』異本ノ三

表紙に表題として『日貝行願讚』異本之三と書かれている。写本の形は折本型である。1頁に梵字が3行ずつ書いている。内題は次のようになっている。

梵學津梁 卷第八 本詮第一之六 am 普賢行願贊 異本之三

奥書は次のようになっている。

永和五年正月廿二日 沙門永遍

將洛陽東寺校正本而書寫於總持寺金剛臺了 篠尾山總持寺藏

元文第五庚申歲冬十二月四日以泉南 覺洲師之本寫是之了 僧海輪

永和五年（1379）に永遍という僧侶が、東寺にあった校正本（写本）を総持寺金剛臺で書写したとしている。写本は篠尾山の総持寺に保管されたと思われる。その後泉南の覺洲師が写本として持っていたものを元文第五（1740）に海輪という僧侶が、書写したとしている。

この奥書と類似する奥書が、第2節第1項で小島通正氏が紹介した『普賢行願讚』の2種奥書が関連している。

© 『梵漢對翻普賢行願贊』 一卷

于時永和五年正月廿二日於總持寺金剛臺 以東寺交合本書寫了右筆 永遍 生十八歲

享保十四年己酉七月以重校合了用紫墨是也 道空 行年六十四

元文二年十月以右本書寫校了洛西比丘旅宿沙門 徹覺

④『普賢行願讚梵本』 一卷

享保十三年歲次戊甲四月下旬於但馬國湯嶋書寫之洛西五智山沙門曇寂重校本云
于時永和五年正月廿二日於總持寺金剛臺以東寺本交合書寫右筆 永遍 生年十八書之
表紙文重校了 篠尾山大總持寺

享保十四年己酉七月以大總持寺本重校合了用紫墨者是也

彼本梵字右附漢字今名隨當 沙門 曇寂 五十六

享保二十年乙卯十一月於京華以五智山藏本書寫之

元文三年十月朱校 沙門寂巖 三十四

③ (0007) 『普賢行願讚』異本ノ三◎『梵漢對翻普賢行願贊』と④『普賢行願讚梵本』の共通部分を見てみる。

③ (0007) 『普賢行願讚』異本ノ三

永和五年正月廿二日 沙門永遍

將洛陽東寺校正本而書寫於總持寺金剛臺了 篠尾山總持寺藏

◎『梵漢對翻普賢行願贊』

于時永和五年正月廿二日於總持寺金剛臺 以東寺交合本書寫了右筆 永遍 生十八歲

④『普賢行願讚梵本』

于時永和五年正月廿二日於總持寺金剛臺以東寺本交合書寫右筆 永遍生年 十八書之
表紙文重校了 篠尾山大總持寺

これらの奥書を総合すると永和5年の1月22日に永遍という18歳の僧侶によって、東寺にあった校訂本を写したことが判る。写した場所は篠尾山（大）總持寺の金剛臺であった。そして、總持寺に保管されたとしている。3種類の写本の元の梵本は同じと考えられる。

◎『梵漢對翻普賢行願贊』は、享保14年に紫の墨を使っての校訂を道空という人が、行ったとしている。その後、元文2年（1737）に徹覺により、写されたとしている。

④『普賢行願讚梵本』は、篠尾山大總持寺にあった写本の複本が、但馬國湯嶋（兵庫県豊岡市城崎町）にあったようである。それを（1674－1742）が享保13年（1728）に写したと考えられる。翌年享保14年に紫の墨を使っての校訂をおこなったとしている。さきの◎『梵漢對翻普賢行願贊』の紫の墨での校訂した日にちと同一時期なので、こちらの

元本も但馬國湯嶋であったもので、曇寂56歳の時（1730）に校訂をおこなった。その後の元文3年（1737）に寂巖が、朱色で校訂するに至った。このように、元々は同じ所から出たものが、各地に伝搬した様子を現している貴重な写本である。次に覚洲について述べてみる。海輪については、次の項目で述べる。

覚洲（？-1756）⁹⁶

覚洲は和泉堺の生まれである。俗名を中村宗玄といった。華嚴の大家である鳳潭に師事し、自身を鳩と号した。法相に通じ、成唯識論の書き入れをした。世に之を鳩の書入といわれる。寶暦6年（1756）に示寂した。著書には鳳潭の伝記をまとめた『華嚴春秋』一卷を初めとして『唯識東海傳十卷』『白虎八轉聲二卷』『釋佛像圖記一卷』等がある。

写本番号は(0007)となっており、Image番号は(0008)となっているので注意が必要である。

④ (0008) 『普賢行願讚』異本ノ四

表紙には表題として2種類あり『普賢行願讚』と書かれており、張り紙をして『普賢行願讚』異本之四と書かれている。写本の形は折本型である。1頁に梵字が3行ずつ書いている。梵字の下に漢字で単語の訳を書いている。内題は次のようになっている。

梵學津梁 第九 本註第一之六 ah 普賢行願讚 異本之四

奥書は次のようになっている。

寛保癸亥冬寫撰洲小曾根村一向宗僧海輪所持本也 小比丘maitramegha敬記

この奥書より、慈雲が寛保癸亥（寛保3年 1743）に海輪師の所持本を写したと書いている。「撰洲小曾根村」は地域として大阪府豊中市小曾根にあたる。現在でも浄土真宗本願寺派の寺院が3寺院（西福寺、養照寺、常光寺）並んでいる。

96 『堺市史 第7巻 別編』堺市役所 清文堂出版 1966, p.259. 参考

【日本佛家人名辞書 p.139】参考

海輪 (?-1773)⁹⁷

海輪は、摂州小曾根村（大阪府豊中市）の養照寺の第11世釈浄観のことである。師は月筈（1671-1729）で、兄弟弟子に常光寺の桂巖（教遵）（1703-1778）や桂巖の弟の泰巖（憲栄）（1711-1763）がいる。宗祖の500回忌を目指して、時の西本願寺第17世の門主法如（1707-1789）の命により『真宗法要』の編纂がおこなわれた。校訂に従事した泰巖が、宝暦13年（1763）に遷化した。門主法如により、明和2年（1765）に重ねて桂巖と海輪に校訂の業務を命じた。海輪は、安永貳癸巳（1773）に遷化した。また、宝暦8年（1758）の『村明細帳』⁹⁸によると、住職名はでていないが、養照寺は11代目の住職とされているので、宝暦8年では、海輪が住職となっている。寛保癸亥（寛保3年 1743）の時点では、住職でなかったので「一向宗僧海輪」としていたと考えられる。

海輪と『普賢行願讃』の接点

真宗の僧である海輪が、なぜ『普賢行願讃』を写したのに疑問を持った。『普賢行願讃』と関連する華嚴学の権威である、鳳潭（1659-1729）が関わっているようである。

a) 月筈の弟子について

月筈の弟子が、桂巖、泰巖、海輪（浄観）である。海輪の兄弟子が、桂巖である。桂巖の住職をしている常光寺は、養照寺から、数十メートルの距離である。

b) 鳳潭の弟子について

鳳潭の弟子が覚洲と桂巖である。真

宗の桂巖も鳳潭に華嚴の教えを受けた。桂巖と覚洲は兄弟弟子となる。

97 海輪については、ほとんど資料が見出せなかった。井上師の著書のみ確認できた。

『真宗本派学僧逸伝』井上哲雄 永田文昌堂 1979, p.42.

「海輪（1763）摂津小曾根村養照寺 西吟-知空-月筈-海輪 月筈門下 泰巖の没後、山命により桂巖と共に真宗法要校刻の業を継ぐ」

と書かれていた。井上哲雄氏は、海輪の没年を1763年としているが、門主法如により、明和2年（1765）に『真宗法要』の編纂を命じられた。これより、過去帳に記載された没年である安永2年（1773）を採用した。養照寺の丸川住職から、鳳潭が養照寺に滞在したことや『真宗法要』の編纂に海輪師が従事したこと教えていただいた。また、過去帳の拝見に協力していただき、深く感謝をい。

98 豊中市史資料集『村明細帳 下』豊中市史編纂委員会 1996, p.88.

c) 養照寺と鳳潭について

養照寺第10世住職は浄山（1691－1760）といい、第11世住職は浄観（海輪）となる。海輪の前住職である浄山は、鳳潭と交流があった。享保11年（1726）黄鐘月（11月）に養照寺に滞在し、経堂の書物を研究したといわれる。この時に、鳳潭は『養照浄寺大蔵経龕記』を残したとしている。また鳳潭の出身地が、一説には小曾根村のあった豊中市と隣接する池田市（旧池田村）といわれている。

さきの③『普賢行願讃』異本ノ三（0007）の奥書に以下の文があった。

元文第五庚申歳冬十二月四日以泉南 覚洲師之本寫是之了 僧海輪

海輪が元文5年（1740）に覚洲の所持本を泉南（堺）で写したとしており、覚洲の亡くなる16年前となる。

以上の理由から、海輪は華厳学の薫陶を受けた環境にあったと考えた。鳳潭や覚洲とも面識があり、交流がなされた可能性がある。

慈雲が、海輪の所持本を写したのは寛保癸亥（寛保3年 1743）であり、海輪が亡くなる30年前となる。「海輪所持本也」の文章より、実際に海輪が所持していたものを借用または、面談により書写したとも、時代的には可能である。

写本番号は(0008)となっておりImage番号は(0009)となっているので、注意が必要である。

⑤ (0036) 『梵篋三本 梵漢 普賢行願讃 阿弥陀経 般若心経』

表紙には『梵漢 普賢行願讃 阿弥陀経 般若心経 刊本 天明三年 慈雲』と記されている。写本の形は折本型である。その中に1冊ずつ『普賢行願讃』『阿弥陀経』『般若心経』と3冊に分かれている。梵字が1頁に梵字が3行ずつ横書きされており、各梵字の行の下に漢字で意味を書いている。刊行時期は天明3年（1783）となっている。刊行方法は木版印刷と思われる。各梵写本の最後に奥書が書かれている。普賢行願讃の奥書は、次のようになっている。

虚空何無涯謂此法爾乎哉佛海世界海衆生海無
涯謂之如虚空乎哉斯普賢願王入佛海入衆生界
衆生業煩惱之中而撰取不倦修證不盡江海為墨
知其不足須彌為筆知其不足斯六十二頌攝雜華
而大小施設焉頌有四句句葛有十一字字字攝該與
虚空無盡與衆生無盡與佛海無盡書寫目共之避

邇梵本四般其所承也一則無量寿院所藏一則金
剛三昧院所藏一則得之左海後此云総持寺金剛
臺三本並堅書一則得之撰洲小曾根海輪者寄之
於予其文横書今之所依寫準横書而參伍餘本云
天明三癸卯夏 小比丘慈雲敬拜識

天明三癸卯（1783）に慈雲が、この写本を書いたことが判る。慈雲は、写本が4種類あったことを述べている。

㊦ 無量寿院所藏（異本之二）

㊧ 金剛三昧院所藏

㊨ 総持寺金剛臺の本で、後に左海より得た本（異本之三）

㊩ 撰洲小曾根の海輪の本（異本之四）

㊦㊧㊨は縦書きで㊩は横書きであると書いている。㊨『左海より得た本』の「左海」は大坂の堺を示しており、さきの㊢『普賢行願讃』異本ノ三の「泉南覺洲師之本」に相当すると思われる。「其文横書今之所依寫準横書」から㊩『撰洲小曾根の海輪の本』が横書きなのである、これを標準にして横書きにしたと思われる。「而參伍餘本云」（而して云に伍して餘本を参す）と読んでみると4種類の写本を使って、総合的に校訂をおこなった。「金剛三昧院所藏」が異本の一に相当するかは、この時点では判らない。

⑥（0037）『梵篋三本』

これも折本形式になっており、表紙には『梵篋三本』とのみ書かれている。②（0036）『梵篋三本梵漢 普賢行願讃 阿弥陀経 般若心経』が3冊本であったが、それらを合本して1冊本にしている。奥書も同じ文章である。

⑦（0038）『梵篋三本』

和本形式になっており、表紙に『梵篋三本』と書かれている。その下に梵字でjñadīpam^{ママ}と書かれている。各経典の奥書は②（0036）『梵篋三本』と同じ奥書を写したものである。梵文『阿弥陀経』のところで、述べた通りであるので、奥書などは省略する。

⑧（0045）『普賢行願讃』 異本ノ三

写本番号は（0045）となっているが2種類の写本があり、和本型となっている。1頁に梵字が3行ずつ書いている。1冊目は表紙に次のように書かれている。

梵學津梁 第八 本詮第一之六 am 普賢行願讃 異本之三

奥書は次のようになっている。

永和五年正月廿二日沙門永遍將洛陽東寺

校正本而書寫於総持寺金剛臺了

篠尾山総持寺藏本

元文第五庚申歳冬十二月四日以泉南覚洲師之本謹寫是之了 僧海輪

天明四春三月六日 東河内高井田邑法正庵 小沙彌 寿道 拝写寫

奥書よりさきの③『普賢行願讚』異本ノ三を天明四（天明4年 1784）に寿道によって書写されたことが判る。場所の「東河内高井田邑」は、現代の大阪府東大阪市高井田になる。この高井田には、慈雲の活動拠点の「長栄寺」がある。

2冊目も和本型となっており、1頁に梵字が3行ずつ横書きで書いている。表題は次のようになっている。

梵學津梁 第九 本詮第一之六 ah 普賢行願讚 異本之四

奥書は次のようになっている。

寛保癸亥冬寫撰洲小曾根村一向宗僧海輪所持本也 小比丘maitramegha敬記

天明四春東河内雙龍庵 小沙彌 周道敬拝書寫

奥書よりさきの④『普賢行願贊』異本ノ四を天明四（天明4年 1784）に周道によって書写されたことが判る。「東河内雙龍庵」は雙龍庵跡として大阪府東大阪市山下町にある。

⑨ (0062) 『普賢行願讚梵本』

写本の形は和本型である。1頁に梵字が6行ずつ規則正しく書いている。偈頌ごと漢数字を頭に朱書きで、また文中にも句読点を朱書きで入れている。朱書きとして「金一丁」の書き込みが見られる。これは、鉦を打つ箇所を示している。『普賢行願讚』が読経に用いられたと考えられる。奥書は次のようになっている。

明治四十年仲夏於高野山大學林書寫畢 小苾芻法龍拝識

比較的新しく明治四十年（1907）に法龍により、現在の高野山大学で書き写されたとしている。

⑩ (0106) 『行願贊梵本』

表紙には表題として『行願贊梵本』附校異と書かれている。和本型で1頁に梵字が4行ずつ書いている。単語の意味を漢字で朱書きでされている。後半には校異として『貞本』『永本』（永味本）『无量寿本』の文字の違う箇所を書いている。奥書は次のようにな

っている。

謹校讐三本文含異且録之末葉以便後之考訂而已其一則題卷末云

貞永元年十月廿九日於成多喜房奉書写了 釋門花押

同年十一月一日朔日相當先師御遠忌開題了

其一則云 永味五年正月廿二日沙門永遍將洛陽東寺 正本而書寫於総持寺金剛臺了
篠尾山総持寺蔵本

其一則高埜山无量壽院古本也 明味四年丁亥七月廿二日飲光敬誌 臘二十九俗五十

慧日謹書

明味四年（明和4年1767 味は和の異体字）に慈雲が、3種類の写本を合わせて校訂したとしている。まず「貞永元年十月廿九日於成多喜房奉書写了 釋門花押」は異本之一にあたり、慈雲は『貞本』と略している。「永和五年正月廿二日沙門永遍將洛陽東寺 正本而書寫於総持寺金剛臺了」は異本之三にあたり『永本』（永味本とも）の略である。「高埜山无量壽院古本」は異本之二にあたり『无量寿本』と略している。校異として『貞本』『永本』『无量寿本』の3写本である。この標準となる写本は、異本之四（撰洲小曾根の海輪の本）に相当するかは、今後の調査となる。最後に「慧日謹書」と朱書きされている。慧日は慈雲の弟子の尼僧である。寛延3年に入門し文化3年（1750—1806）に没した。慧日が写本を書いたとしたら、その下限は文化3年となる。

⑪ (0107) 『日貝貝的示』

表紙には表題として『日貝貝的示 全』と書かれている。和本型となっており、左頁に梵字が4行ずつ書いている。右頁に註を書いている。内題は

梵学津梁 末詮第二之 日貝讚的示

⑫ (0108) 『普賢行願讚的示』

さきの⑪『日貝貝的示』を清書したと思われる。和本型で、梵字を4行ずつ書いてその後解説を書いている。奥書は次のようになっている。

享和甲子孟春中旬子阿弥陀寺拝写 法樹 vadam

慈雲の弟子智幢法樹和尚によって享和甲子（1804）に京都の阿弥陀寺で書かれたものである。

⑬ (0109) 『行願讚諸譯互證考』

表紙には表題として『行願讚諸譯互證考』書かれている。和本型となっており、梵文

の横に不空訳と般若訳が書れている。

⑭ (0127) 『普賢行願讚梵本聞書之一』等

和本型となっており、合計10冊となっている。表紙には表題として『普賢行願讚梵本聞書之一』から『普賢行願讚梵本聞書之十』と書かれている。縦書きで梵字の解釈はもとより『普賢行願讚』の総合的な解説書である。文頭に「明和四年正月廿二日ヨリ御教授」と書かれている。10冊をまとめている、カバーが付いている。その表紙は次のように書かれている。

奉納 葛城山 高貴寺 普賢行願讚梵本聞書全十卷

裏には次のよう書かれている。

願主 式又摩那 暁堂 慧日尼 文政十一 戊子二月

和州忍海郡馬場邨笛吹宮 別當上之坊現住慈照拝納

加州石川郡葛城山高貴寺 什物 山外不出

奥書は次のようになっている。

普賢行願讚梵本聞書之十終 明和四年丁亥春拝記

寛政三年辛亥六月廿日一清書了 小子尼慧日

まず文政十一（1828）に慧日尼により、高貴寺に奉納されたと思われる。文頭に「明和四年正月廿二日ヨリ御教授」と書かれており、明和4年（1767）に「普賢行願讚」の講義がおこなわれた。寛政三年（1791）にこの本を書き上げている。本文の中で写本の解説をしている箇所があるので、ここに書き出す。特に⑤『梵篋三本 梵漢 普賢行願讚阿弥陀經 般若心經』の『金剛三昧院所蔵』が明らかになってくる。

今家四本アリ、

一ハ高埜山無量寿院ノ古本其文堅書一句一行ニ書之奥書ニ云高埜大師御本云云

件本醍醐法限房在之云云以般若寺僧正御本一校了

寛元元年六月十六日於西山法花寺以松橋本書之了金剛佛子頼之

一ハ同寺金剛三昧院ノ本其文堅書一行大抵廿字許書之奥書云

貞永元年 十月廿九日於成多喜房奉書寫了釋門口一校了

同年十一月一日相當 先師御遠忌開題了

一ハ左海々雲堂覺洲處得之其文堅書奥書云總持寺金剛臺云云

一ハ攝州小曾根村海輪云者持來其文横書奥書ニ云康保三年十一月三日奉書寫了 明之

「金剛三昧院ノ本」は「貞永元年」と同じものなので、異本之一に相当することになる。また「左海々雲堂覺洲」より覺洲師は堺の「海雲堂」にいたと思われる。海輪師の所持していた写本の奥書には「康保三年」（966）と古い年代の記録があった。

⑮ (0137) - (0139) 『普賢行願讚梵本聞書 一』等

表紙には表題として『普賢行願讚梵本聞書 一』から『普賢行願讚梵本聞書 三』と書かれており3冊の和本型となっている。梵字の文法の解説をしている。文頭には「普賢行願賛貝文聞記 明和四年正月廿二日ヨリ御教授コレアリ」となっている。文頭よりさきの⑭『普賢行願讚梵本聞書之一』と講義日が一緒であるので、簡略本して書かれたと思われる。奥書は次のようになっている。

天明壬子正月余在京師適与二三子同遊者講普賢梵賛其於积義也一從此記也

此記也往日余等于親教師所親聞也而已京一紀今而顧之記者不無疎漏律

也日親教師之再訂以為定本而已今且私注一二先俗後俗之義趣及多言衆多

之色相以便講解倉卒之間而復深考錯謬何免雅不指南請後見者焉講呈

講延首二日竟十二日云 明和四年丁亥春小比丘護法記于西京

戊子夏四月二十四日 拝写了 śakṣamaṇa prajñasunya

後天明二壬子正月二日至十二日購読一周記

以右之本書写之了願以功德普及於 法界与衆證無上覺已

文政十二年己丑十月 末資 龍銳拝誌

「明和四年丁亥春小比丘護法記」より明和4年（1767）に慈雲の高弟法護律師により記された。「戊子夏四月二十四日 拝写了」より戊子（明和5年1768）に完成したことになる。「後天明二壬子正月二日至十二日購読一周記」はその後の天明二壬子（天明2年 1782）に再び講義をしたと思われる。文政十二年（1829）に龍銳という人により、写されたとしている。

⑯ (0140) 『普賢行願讚梵本釈』

表紙には『普賢行願讚梵本』となっており『⁹⁹釈』は書かれていないで。慈雲・・・授と書かれている。(一部破損あり)梵字で mahākaruṇikasamudra と書かれている。折本型で、梵字が縦書きに書かれている。朱書きで漢字で意味や解説を書いている。裏面にも続いており、細かな文字で解説をおこなっている。文頭に次のように書かれている。

享和二年壬戌三月廿一日 慈雲ācarya賜之予生二予二憶持護持云尔 慧友僧護謹記
文中にも慧友の校訂記録が書かれている。

歳次甲午天保五年六月二日於于高山寺十無盡院一校了

以十無盡院相承之本再交了 prajñamitrakṣa 慧友護

奥書として次のように書かれている。

是此行願贊梵本一卷者慈雲光大和上手書也吉祥雲院密護十無盡院證成両ācarya

法公贈余願海忽遇大王膳扑歌蹈舞歡喜々歡々

家珍第一者也維時安政丁巳秋八月五日清瀧峯石云庵掛錫中

天台山大行滿 prañidhanāṃsamudra 記之

「享和二年壬戌三月廿一日 慈雲ācarya賜之予」より享和二年(1802)に慈雲が慧友師にこの写本を与えたと書いている。「天保五年六月二日於于高山寺十無盡院一校了以十無盡院相承之本再交」は天保五年(1834)に高山寺の十無盡院で校訂をおこなったとしている。次に奥書では「吉祥雲院密護十無盡院證成両ācarya 法公贈余願海」と書かれている。吉祥雲院の阿闍梨密護と十無盡院の阿闍梨證成が天台宗の願海師に写本を贈ったとしている。その時期は安政丁巳(安政4年 1857)である。この写本は木箱に入っており、箱書きがされている。箱書きは次のようになっている。

箱書き

購入施主

聖譽妙寛禅定尼 昭和十年五月廿八日亡 願主 大阪市南区大寶寺町 菅原七郎

此普賢行願贊梵本一巻慈雲尊者最初草稿也以此本賜梅尾

99【慈雲尊者全集 9巻 上 p.556】で 長谷宝秀氏が、本来『普賢行願讚梵本』の題を綿密な解釈を付けた内容となっているので、自分が『釈』を付け加えたとしている。

高山寺慧友律師云云終生此髻中栞律師遷化後安政四年叡山大
行滿願海上人梅尾山石雲庵留錫之時吉祥雲院密護十無盡院證成
二師相議以此本贈上人云云亦終生護持為家珍第一上人遷化後傳在
俗家云云不能護持傳販洛東清水淨土宗西光寺土川善激師之手
師遷化後門徒不能護持將賣却之時大阪市菅原七郎居士聞之
憂此法寶傳於他處徒糶尾礫昭和十二年八月為資亡妻聖譽妙寬
禪定尼菩提以其遺財購入之奉納高貴寺永為寺寶者也今新
造箱依伎人慈城和尚囑畧記來由如斯
昭和十六年六月吉辰 長谷寶秀誌

写本の購入施主として大阪市の菅原七郎氏が挙げられている。妻の供養のために、写本高貴寺に寄贈したとしている。写本の奥書のように写本が、慧友律師から比叡山の願海上人に渡った経緯を書いている。願海上人の遷化後は、一般の者が所有したとしている。その後一般の者が所有が難しくなった。それで浄土宗西光寺の住職で、佛教大学の前身の佛教専門学校校長も務めた土川善激師（1864－1930）の許に移ったとしている。土川善激師の遷化後、再び所有が難しくなった。それで菅原七郎の斡旋により、妻の供養として昭和12年に高貴寺に納められたようである。

⑰ (0449) 『普賢行願讚梵本』

表紙には『普賢行願讚梵本』となっており、折本型で梵字が1頁に3行ずつ横書きに書かれている。奥書は書かれていない。

⑱ (0152) 表題なし 『普賢行願讚・大佛頂大陀羅尼・大隋求大陀羅尼』

和本型で、表題は書かれていない。『普賢行願讚』意外に『大佛頂大陀羅尼』『大隋求大陀羅尼』の3種類の経典が書かれている。『普賢行願讚』は縦に書かれており、一部に朱書きで、漢字で意味を書いている。所々に『鑿一丁』^{かね}（鉦一打の略で鉦を1回叩く）と記載されており、読経中などに鉦を打つ箇所を示したと思われる。

第6節 ローマナイズしたことから判ること

梵文『普賢行願讚』の慈雲校訂文と異本1から4の第4偈までを対照してみる。

①yāvata keci daśaddiśi loke sarvatriyedhvacata nārasimhāḥ

①yavadata keci daśaddiśi loka sarvatriyedhvacatu narasimhāḥ

②yāvadata keci daśaddiśi loke sarvatriyedhvacatu narasimhāḥ

③yāvadata keci daśaddiśi loke sarvatriyedhvgatu narasiṃhāḥ

④yavata keci daśaddiśi loke sarvatriyedhvgatu narasiṃhāḥ

①tān āhu vandami sarvi aśeṣāṃ kāyatu vāca manena prasantaḥ||1||

①bhan ahu vandami sarva aśeṣāṃ kāyatu vāca manena prasantaḥ||1||

②bhan ahu vandami sarvi aśeṣā kāyatu vāca manena prasantaḥ||1||

③bhan ahu vandami sarva aśeṣāṃ kayatu vāca mana prasantaḥ||1||

④tān ahu vandami sarvi aśeṣāṃ kāyatu vāca manena prasantaḥ||1||

①kṣetrarajopamakāyapramāṇaiḥ sarvajināna karomi praṇāmaṃ

①kṣaturajepamakāyapramāṇai sarvajināna karomi praṇāmaṃ

②kṣetrarajopamakāyapramāṇeḥ sarvajināna karomi praṇāmaṃ

③kṣetrarajopamakayapramāṇaiḥ sarvajināna karomi praṇāmaṃ

④kṣetrarajopamakāyapramāṇaiḥ sarvajināna karomi praṇāmaṃ

①sarvajinābhimukhena manena bhadracaripraṇidhānabalena||2||

①sarvajenabhimukhena manena bhadracaripraṇidhānabalena||2||

②sarvajinābhimukhena manena bhadracaripraṇidhānabalena||2||

③sarvajinābhimukhena manena bhadracaripraṇidhānabalena||2||

④sarvajinābhimukhena manena bhadracaripraṇidhānabalena||2||

①ekarajagri rajopamabuddhāṃ buddhasutāna niṣaṇṇaṃku madhye

①ekarajāgri rajopamabuddhāṃ buddhasutāna niṣaṇṇaku madhye

②ekarajāgri rajopamabuddhāṃ buddhasutā niṣaṇṇaku madhye

③ekarajagri rajopamabuddhāṃ buddhasutāna niṣaṇṇaku madhye

④ekarajāgri rajopamabuddhāṃ buddhasutāna niṣaṇṇaku madhye

①evam aśeṣata dharmatadhātuṃ sarvādhimudyami purṇṇa jinebhiḥ||3||

①evam aśeṣata dharmatadhātuṃ sarvādhimudyami prarṇṇa jinabheḥ||3||

②evam aśeṣata dharmatadhātuṃ sarvādhimudyami pūrṇṇa jinebhiḥ||3||

③evam aśeṣatu dharmmatadhatuṃ sarvādhimudyami pūrṇa jinebhiḥ||3||

④evam aśeṣata dharmmatadhatuṃ sarvādhimudyami purṇa jinebhiḥ||3||

①teṣu ca akṣayavarṇṇasamudrāṃ sarvasvarāṃgasamudrarutebhiḥ

①teṣu ca akṣayavarṇṇasamudrāṃ sarvasvarāṃgasamudrarutebhiḥ

②teṣu ca akṣayavarṇṇasamudrāṃ sarvasvarāṃgasamudrarutebhiḥ

③teṣu ca akṣayavarṇṇasamudrāṃ sarvasvārāṃgasamudrarutebhiḥ

④teṣu ca akṣayavarṇṇasamudrāṃ sarvasvārāṃgasamudrarutebhiḥ

①sarvajināna guṇām bhaṇāmaṇas tā sugatāṃ stavamī ahu sarvvā||4||

①sarvajināna guṇām bhaṇāmaṇās tā sugatāṃ stavamā ahu sarvvā||4||

②sarvajināna guṇām bhaṇāmaṇas tā sugatāṃ stavamī ahu sarvvām||4||

③sarvajināna guṇam bhaṇamaṇas tā sugatāṃ stavamī ahu sarvvām||4||

④sarvajināna guṇām bhaṇāmaṇas tā sugatāṃ stavamī ahu sarvvām||4||

1. 単語の綴りについて

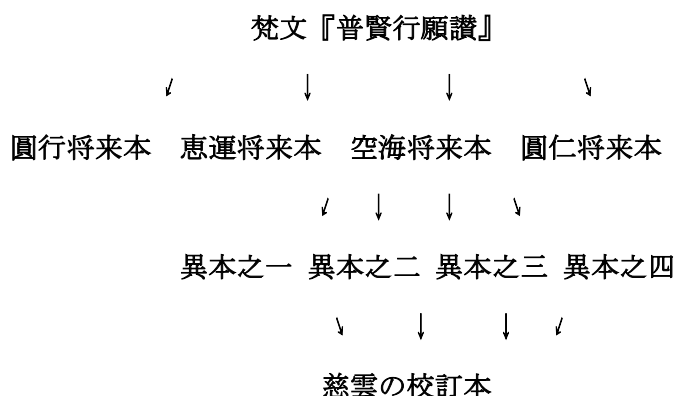
子音の重複がみられる。 dharma→dharmma kṣetra→kṣettra sarva→sarvva

しかしながら、全ての単語の綴りは統一されていない。たとえば文中では、sarvaとsarvvaの両方が使用されていることがある。

2. 慈雲の校訂について

大きな校訂はおこなわれていないようである。文脈は4種類ともほぼ同じであるので、文脈を変える校訂は、まったく見られない。たとえば、単語のkṣettraはkṣetraに正しく校訂されている。しかし単語のsarvaとsarvvaについては、異本がsarvvaであれば、校訂せずにそのままsarvvaを使用している。異本を優先しているようである。『異本』1から4は、ローマナイズを見ると、原本は同じと考えられる。ただ、その伝播した経路上で、写される時に誤字、脱字が生じたと思われる。

普賢行願讚の流れ



まとめ

最終的には梵文『普賢行願讚』は、空海の将来した梵本が、4系統に分かれて異本之一から四として伝搬した。真源より譲り受けた梵文『普賢行願讚』は、慈雲が梵学の研究に入るきっかけをつくった意義あるものであった。優秀な弟子達との梵文『普賢行願讚』の研鑽により、高貴寺における梵学は、大きく飛躍していった。異本之三のように、経路を別にして慈雲の手に、また岡山の寂巖の手に渡った写本もあることが判った。土川善激師が所持した写本が、高貴寺に戻ってきていたことも判明した。そして真宗の僧侶の海輪師が、なぜ『普賢行願讚』を写したということも明らかになった。慈雲の校訂は、原本に忠実におこなわれたと思われる。

第7章 『梵学津梁』の梵文『金剛般若経』について

はじめに

慈雲の亡き後の梵文『金剛般若経』の収集、編纂は『梵学津梁』の集大成といえるものである。慈雲の遷化したのち数十年にわたり、弟子達が続けてきた。梵文の校訂作業という水準の高いものまで含まれている。単語の意味、綴りに関してはあらゆる経典や梵漢辞典を参考に決定している。梵文『金剛般若経』の収集は、宗門の枠を超えて成し遂げられた。天台真盛宗や融通念仏宗の僧侶の協力も今回の調査で判明した。梵文『金剛般若経』は梵文『般若心経 普賢行願讃 阿弥陀経』のように刊行しなかったため、あまり知られていない。高貴寺に所蔵されている梵文『金剛般若経』について述べてみたい。

第1節 『金剛般若経』について

第1項 梵写本について

海外で発見された梵写本は、大きく分けて次の3が存在している。その他に梵写本の断片が何種類か発見されている。¹⁰⁰

- 1) Pargiter, F. E. 1916. "Vajracchedikā in the Original Sanskrit."

In A. F. Rudolf Hoernle, ed. Manuscript Remains of Buddhist

Literature Found in Eastern Turkestan. Oxford: Clarendon Press, pp.176-95.

この梵本は、東トルキスタンでSteinが発見した。その後にPargiterによりローマナイズされた。5世紀終わりから6世紀初頭のものといわれる。

- 2) Chakravarti, N. P. 1956. "The Gilgit Text of the Vajracchedikā ."In Giuseppe Tucci,ed.

Minor Buddhist Texts. Serie Orientale Roma IX.1.Rome: IsMEO, pp.175-92.

1931年にギルギットから発見された梵写本でChakravartiよりローマナイズされた。4世紀後半から5世紀初めのものと考えられる。ただ残念なことに経文の前半部分は、欠落している。Tucciの主筆するローマ・オリエント・シリーズにより公表された。

- 3) Paul Harrison and Shogo Watanabe, "Vajracchedikā Prajñāpramitā", manuscripts in the

Schoyen Collection IV Buddhist manuscripts volume III, ed by Jens Braarvig, Oslo; Hermes

100 渡辺章悟編『金剛般若経の梵語資料集成』山喜房佛書林 2009, pp.10-17.

Publishing,2006. pp.89-132.

ノルウェーの写本蒐集家であるスコイエン氏のコレクションの中に『金剛般若経』の梵本がある。アフガニスタンで発見された梵写本である。時代的には、ギルギット写本とほぼ同じと考えられる。経文の後半は欠落しているが、第16章までが存在している。

これ以外にMax Müllerが使用した中国伝来の梵写本がある。これら2冊については、別の項で述べる。

第2項 漢訳について

『金剛般若波羅蜜経』の漢訳と漢訳年代は以下のとおりである。¹⁰¹

- 1) 『金剛般若波羅蜜経』 羅什 訳 401年
- 2) 『金剛般若波羅蜜経』 菩提流支 訳 509年 (高麗、元、明本)
- 3) 『金剛般若波羅蜜経』 菩提留支 訳 509年 (宋本)
- 4) 『金剛般若波羅蜜経』 真諦 訳 562年
- 5) 『金剛能断般若波羅蜜経』 笈多 訳 590年
- 6) 『能断金剛般若波羅蜜経』 玄奘 訳 648年
- 7) 『第九会 能断金剛分』 玄奘 訳 660—663年
- 8) 『能断金剛般若波羅蜜経』 義浄 訳 703年

8本の漢訳があるが、実際は6本となる。菩提流支が訳した2本に関して述べておく。

- 2) 『金剛般若波羅蜜経』 菩提流支 訳 509年 (高麗、元、明本)
- 3) 『金剛般若波羅蜜経』 菩提留支 訳 509年 (宋本)

『大正藏経』によれば、菩提流支訳は早い時期に失われた。¹⁰²それで、2) 『金剛般若波羅蜜経』は菩提流支の注釈書である『金剛般若経論』より復元したものである。また、3) 『金剛般若波羅蜜経』(宋本)は、菩提流支訳が失われたので、真諦の訳を代用して用い

101 渡辺章悟編 『金剛般若経の研究』 山喜房佛書林 2009, pp.6-8

梶芳光運著 佛典講座6 『金剛般若経』 大蔵出版 1972, pp.11-23.

102 【大正第8巻 p.757上】「金剛般若前後六翻按開元録此第二譯思溪經本竟失其傳誤將陳朝真諦三藏者重出標作魏朝留支所譯大有逕庭今於留支三藏所翻論中録出經本刊版流通庶期披閱知有源矣時至元辛巳冬孟望日南山普寧經局謹記」

られたものである。次に玄奘の訳した2本については、以下のものがある。

- 6) 『能断金剛般若波羅蜜經』 玄奘 訳 648年
- 7) 『第九会 能断金剛分』 玄奘 訳 660—663年

玄奘は貞観22年（648年）に唐の太宗帝の命で、6) 『能断金剛般若波羅蜜經』を漢訳したといわれている。その後『大般若波羅蜜多經』を漢訳した時、600巻中の第577巻『第九会 能断金剛分』として再録したとする。これは同一訳と考えられる。であるから、都合6訳としてあつかわれる。この中で、5) 『金剛能断般若波羅蜜經』笈多訳は、特殊な漢訳である。「直本」と呼ばれ、梵文に対しての漢語を順々に直訳して書いている。言い換えれば、梵文の文脈が推測できる漢訳である。

第3項 梵文『金剛般若經』の日本への伝来について

手がかりとして安然の『諸阿闍梨眞言密教部類總録』¹⁰³から『梵唐對譯金剛般若經二卷仁私云六本出中契注經』がみられる。「仁」は円仁のことである。慈覺大師円仁の『慈覺大師在唐送進録』¹⁰⁴には「別物 封皮箱一合件箱」に『梵字金剛經』が納められていると書かれている。これから、円仁が梵文『金剛般若經』を日本に持ち帰ったことが判った。円仁遷化前に円仁の希望により、最澄と円仁の持ち帰った顕教の經典は、根本經堂に収められた。併せて円仁の持ち帰った密教經典などは、法華總持院に収められた。後に總持院の經藏は、眞言藏と称された。しかしながら、度重なる災害のため眞言藏の經典は「前唐院」に移されていった。前唐院は、仁和4年（888年）に円仁の業績を知らしめるため建立されたものである。円仁将来の『梵字金剛經』は、前唐院に保管されたと考えられる。

第4項 高貴寺以外での梵文『金剛般若經』について

筆者は、東京の三康図書館（椎尾文庫）の所蔵本に梵字で書かれた梵文『金剛般若經』があることを知った。3冊になっており、以下に概略を書いておく。

- i) 『梵本金剛般若經諸譯互證』 天 眞洞藏
- ii) 『梵本金剛般若經諸譯互證』 地 眞洞藏
- iii) 『梵本金剛般若經諸譯互證』 人 眞洞藏

表題、奥書等は以下に示す

103 【大正第55巻 p.1120上】

104 【大正第55巻 p.1078中】

梵學津梁 第 末詮 第 梵本金剛般若經諸譯互證 河陽高貴寺 沙門 法樹 纂校

明治十七年三月以西鴨智満和上本謹写了之 真洞

となっている。形式は、縦書きで単語訳、梵字、羅什訳、笈多訳となっており、次に説明する高貴寺所蔵の以下の梵写本と同じとみなされる。

⑤ (0159) 梵文金剛般若經諸譯互證 初稿 上

(0160) 梵文金剛般若經諸譯互證 初稿 下

奥書等より、説明を加えておく。

以西鴨智満和上本謹写了之 真洞

これより、元の写本は和田智満師の持ち物と思われる。真洞なる人物は和田智満師の悉曇の弟子の黒田真洞師と考えられる。まず和田智満師について述べておく。続いて黒田真洞師について述べておく。

和田智満 (1835–1910)¹⁰⁵

大阪の北浜で和田呉山の3男として生まれる。7歳で河内高井田（大阪府東大阪市）の長栄寺で、慈雲の弟子である智幢法樹師に就いて得度した。顕密の教相や雲伝神道や外典にも通じていた。四分律や悉曇に造詣が深くかった。1854年に京都西鴨の神光院に移り、廃寺となっていた同院の復興に努力した。1892年に真言宗京都随心院門跡となった。明治43年（1910）寂、75歳。

黒田真洞 (1855–1916)¹⁰⁶

江戸の日本橋（東京都中央区）で安政2年（1855）に生まれる。4歳で増上寺で剃髪した。24歳で京都に遊学し、智積院の弘現や泉湧寺の旭雅に性相学（俱舍論や唯識）や三井寺の敬徳に戒律を学んだ。1883年（明治16年）に和田智満の元で梵字、悉曇を学んだ。翌年に増上寺に戻って芝岳学頭となった。1887年には浄土宗学本校の創設とともにその初代校長に任ぜられた。浄土宗内の全国の教区を八大教区に分けるなどの改革をおこなった。1893年には、シカゴの万国宗教会議に出席し『大乘仏教大意』（英文）を頒布した。1907年か

105 【密教大辞典 p.1598】 参照

【人名辞典 法蔵館 pp.851–852】 参照

106 斎藤昭俊 成瀬良徳編著 日本仏教人名辞典 新人物往来社 1993, pp.128–129.

黒田真洞師を中心とした近代仏教を研究中の善光寺大本願の鷹司誓榮副住職様より、多くの資料をいただきました。紙面を借りましてお礼を申し上げます。

らは宗教大学（現・大正大学）学長を務めた。大正5年（1916）寂、62歳。著書に『大乘
仏教大意』『法相伊呂波目録』『浄土宗綱要』などがある。

黒田真洞師が和田智満師に師事したのが、明治16年である。この梵写本の写された時は
「明治十七年三月」となっており、年代的には合致する。また、梵写本の寄贈者が増上寺
法主や大正大学学長の職にあった椎尾弁匡師（1876-1971）によると考えられる。よって、
真洞という人物は黒田真洞師と考えられる。

第2節 高貴寺所蔵の梵文『金剛般若経』について

第1項 高貴寺所蔵の梵文『金剛般若経』について

まず高貴寺所蔵の金剛般若経は次のようになる。梵字は訂正せずローマ字化している。
CDの仕分けでは①-④は本詮部にあり⑤-⑧は末詮部にあった。

- ① (0070) 金剛般若経 梵文 上
(0071) 金剛般若経 梵文 下
- ② (0072) vajracchedakā prajñapāramitā sūtram
- ③ (0073) vajracchedakā prajñapāramitā sūtram 乾
(0074) vajracchedakā prajñapāramitā sūtram 坤
- ④ (0075) vajracchedakā sūtram 甲
(0076) vajracchedakā sūtram 乙
- ⑤ (0159) 梵文金剛般若経諸譯互證 初稿 上
(0160) 梵文金剛般若経諸譯互證 初稿 下
- ⑥ (0162) vajracchedaka prajñapāramitā sūtram 上 下（合本している）
- ⑦ (0165) 梵文金剛般若経諸譯互證 一
(0166) 梵文金剛般若経諸譯互證 二
(0167) 梵文金剛般若経諸譯互證 三
- ⑧ (0168) 梵文金剛般若経諸譯互證 四

第2項 各写本について

- ① (0070) 金剛般若経 梵文 上
(0071) 金剛般若経 梵文 下

折本形式で、表紙には『金剛般若経 梵文 上』『金剛般若経 梵文 下』
と書かれている。各頁に7行に梵字のみが規則正しく縦書されている。

② (0072) vajracchedakā prajñāpāramitā sūtram について

さきの『金剛般若経 梵文 上』『金剛般若経 梵文 下』と同じ形式で、1冊にしている。
題目は梵字で vajracchedakā prajñāpāramitā sūtram となっている。

③ (0073) vajracchedakā prajñāpāramitā sūtram 乾

(0074) vajracchedakā prajñāpāramitā sūtram 坤

梵文『金剛般若経』を乾と坤の2冊に分けて書いている。薄紙の折本形式である。2冊とも表紙には vajracchedakā prajñāpāramitā sūtram と帯状の紙に書いて、表紙に貼り付けている。梵字は横書きである。梵字、各梵字の音写漢字、単語の意味（漢字）を1行ずつ、都合3行を一組として書かれている。音写漢字は、2文字以上はその行間に縦に書いている。単語の意味も2文字以上はその行間に縦に朱書きされている。奥書は以下のとおりである。
以下は全て朱書きである。

書本奥書 永久四年八月十二日 前唐院之唐本申書

於西塔院黒谷報恩蔵

書校 梵字 借名 漢字 勘校 證字

保安元年中冬初三日申時書 藥賢筆也

同十二月六日一校 藥忍

となっている。奥書は別の2種類の梵写本と関係しており、あとで併せておこなう。

④ (0075) vajracchedakā sūtram 甲

(0076) vajracchedakā sūtram 乙

梵文『金剛般若経』を甲と乙の2冊に分けて書いている。薄紙の折本形式である。2冊とも表紙には vajracchedakā sūtram と書かれている。梵字、音写漢字、単語の意味などは、さきの乾、坤の2冊に分割された梵写本と同じ形式である。その複写本と考えられる。奥書は、さきの朱書き分より2項目増えている。増えた奥書は黒字である。奥書は以下のとおりである。

天台法華宗請益圓仁法師且求所送法門曼荼羅并外書等目錄

大乘経律論梵漢字真言云云⁴ 別物封皮箱一合

件箱請益法師圓仁書稱般若理趣譯經一卷 梵字金剛経梵本般若心経梵字云云儀軌等

特盛一箱全封不可開出有思故不是惜法門者 右得請益傳燈法師位圓仁書備且所求得

譯撰集法門并兩部曼荼羅等送延曆寺 凡真言儀軌等唐國和上等尤有深誠之不安

散但其目錄先附第二舶粟田録事者仍且 記録如件

承和七季正月十九日都維那傳燈住位僧仁全 寺主傳灯住位僧治哲

上座傳灯住位僧道叡⁵

右慈覚大師将来梵唐金剛經傍行二卷折本永久年中山門

僧藥賢書写藥忍一校久蒞在西塔天保何年魚山末葉僧都真

阿弥陀佛索得同八年夏比丘詮海謹臨写呈高貴寺老和上

今九年五月併写唐土送状再呈之

書本奥書 永久四年八月十二日 前唐院之唐本申書

於西塔院黒谷報恩藏

書校 梵字 借名 漢字 勘校 證字

保安元年中冬初三日申時書 藥賢筆也

同十二月六日一校 藥忍

となっている。奥書は、別の2種類の梵写本と関係していくので、あとで併せておこなう。

⑤ (0159) 梵文金剛般若經諸譯互證 初稿 上

(0160) 梵文金剛般若經諸譯互證 初稿 下

折本形式で、上、下の2冊組となっている。各々の表紙に帯状の紙に縦書きで、表題を『梵文金剛般若經諸譯互證 初稿 上』『梵文金剛般若經諸譯互證 初稿 下』と書いたものが貼られている。また、表紙の隅に朱書きで「法樹蔵」と書かれている。梵字は縦書きされている。1頁を3等分しており。各ブロック内に単語の意味（漢字）、梵字、漢訳の羅什訳、漢訳の笈多訳が書かれている。題目は次のように記されている。

梵学津梁卷第 末詮第

梵文金剛般若經諸譯互證 河陽高貴寺沙門法樹算校

卷数の数字などが記載されていない。音写漢字の表示がされていないことである。それと細かい文字や朱書きで覚書や訂正をしている。主に単語の校訂確認が多く、使用した資料として『梵語雑名』や『千文』（『梵語千字文』）『金剛界浄地真言』等の書き込みが見られた。第4項の三康図書館の梵写本の題目が以下のとおりである。

梵學津梁 第 末詮第 梵本金剛般若經諸譯互證 河陽高貴寺 沙門 法樹 纂校

題目の表示や形式は、縦書きで単語訳、梵字、羅什訳、笈多訳となっている。和田智満師が、この梵写本を写し、黒田真洞師が受け継いだと考えられる。

⑥ (0162) vajracchedaka prajñapāramitā sūtram 上 下 (合本している)

折本形式で、上、下の2冊を合本している。表紙に帯状の紙に縦書きで、表題は、梵字で vajracchedaka prajñapāramitā sūtram と書いて貼っている。表紙の隅に朱書きで「法樹蔵」と「唯如bhikṣu拝寫」と書かれている。さきの梵写本の

③ (0073) vajracchedakā prajñapāramitā sūtram 乾

(0074) vajracchedakā prajñapāramitā sūtram 坤

④ (0075) vajracchedakā sūtram 甲

(0076) vajracchedakā sūtram 乙

と同じ形式で、唯如師が複製本として作成したようである。唯如師については、詳しくは判らない。『慈雲尊者全集』¹⁰⁷では、次のように紹介されている。

「唯如とは諦観唯如律師にして、文政十一年明堂和上に従て受具し。長栄寺に住して知事を勤ること約十箇年。弘化二年十二月二十九日入寂せる人なり。」

奥書は、縦書きで以下のとおりである。

書本奥書 永久四年八月十二日 前唐院之唐本申書

於西塔院黒谷報恩蔵

書校 梵字 借名 漢字 勘校 證字

保安元年中冬初三日申時書 藥賢筆也

同十二月六日一校 藥忍

天台法華宗請益圓仁法師且求所送法門曼荼羅并外書等目錄

大乘經律論梵漢字真言云云 別物封皮箱一合

件箱請益法師圓仁書稱般若理趣譯經一卷 梵字金剛經梵本般若心經梵字云云儀軌等

特盛一箱全封不可開出有思故不是惜法門者 右得請益傳燈法師位圓仁書併且所求得

譯撰集法門并兩部曼荼羅等送延曆寺 真言儀軌等唐國和上等尤有深誠之不安

107 【慈雲尊者全集 第9卷 下 p.477】

散但其目錄先附第二舶粟田録事者仍且 記録如件

承和七季正月十九日都維那傳燈住位僧仁全 寺主傳灯住位僧治哲

上座傳灯住位僧道叡

右慈覚大師将来梵唐金剛經傍行二卷折本永久年中山門

僧藥賢書写藥忍一校久蒞在西塔天保何年魚山末葉僧都真

阿弥陀佛索得同八年夏比丘詮海謹臨写呈高貴寺老和上

今九年五月併写唐土送状再呈之

⑦ (0165) 梵文金剛般若經諸譯互證 一

(0166) 梵文金剛般若經諸譯互證 二

(0167) 梵文金剛般若經諸譯互證 三

折本形式で3冊に分かれている。表紙には直に『梵文金剛般若經諸譯互證 一』の様に書かれている。1頁を2分割して、2組の枠組みを作成している。枠組みの中に (1) 漢字での梵語に対する単語の訳 (2) カタカナで、発音のふりがな付きの梵字 (3) 音写漢字 (4) 漢訳 羅什訳 (5) 漢訳 笈多訳を並べている。漢訳で羅什訳 (402年) を採用している。日本では『金剛經』といえは羅什訳を示すように広く使用されたためと思われる。また笈多訳 (590年) は直本と呼ばれる梵文からの逐字訳といわれている。この知識があったので、あえてこの漢訳も採用したのではと思われる。その他の記載としては、梁の昭明太子の三十二分節を使用して、その箇所を記載している。記載方法は梵字の相当箇所にかぎ括弧を付けて、紙面上の余白部には「法界因由分第一」のように書いている。

題目は次のように記されている。

梵学津梁三百二十卷 末詮第二之十二

梵文金剛般若經諸譯互證 河州高貴寺沙門法樹算校

この題目より『梵文金剛般若經諸譯互證』が、第320巻の末詮第二之十二に収められたことが判る。最終頁に詮海による跋が書かれている。ただし、この跋は最後に糸で綴じ付けられたようである。長文であるが、以下に示す。

跋 智幢律師梵文金剛般若經諸譯互證成矣蓋效法兄疊峰阿闍梨梵弥陀經諸譯互證然彼有義釋此則無何也曰此梵本出於先師慈雲尊者没後故夫尊者用力梵學絶倫先編梵学津梁一千卷凡關係梵學者莫不悉備而惟斯梵本漏尊者搜羅尊者在

世若得斯梵本其權幾多大繙妙義洞開秘蘊必矣其功績何啻義釋比乎以何知爾斯典乃尊者特奉為自己心要故嗚呼斯典之後于時而出也法門之不幸且衆生之薄福豈可不慨哉雖然尚賴有梵學津梁在高明有志宜為就之溯梵本辭源若其未能奢宜生難遭之相受讀此經而有此梵本何喜如之況律師此舉總繼祖業揮門風賚後學不鮮鮮若其不堪者宜但信固守珍而寶之何也今經文云若是經典所在之處即為有佛即是塔應恭敬供養其所然其所指經典者吐哺譚出之漢本可歟金口親宜之梵筐可也人々須細籌量簡取耳若又求心佛持內經之漢者固不待余言

弘化四年丁未仲秋 南都東福寺小比丘詮海謹誌 伏乞慈訂 小子詮海稽首拜

この跋には下線を引いた部分に朱での訂正や文字の薄墨で上から消した跡がある。「梵本」の「本」は、薄墨で消して「文」から書き換えている。同じく下線部の「梵筐」については「筐」は「本」より「又」は「其」より書き換えられている。後書きには、梵写本の入手に関して述べていない。「弘化四年丁未仲秋 南都東福寺小比丘詮海謹誌」の記載があり、弘化4年（1847）の作成となる『梵文金剛般若經諸譯互證』の完成時期が弘化4年丁未（1848）の陰暦8月となる。慈雲の遷化が、文化元年（1805）であり、実に44年のちに完成されたことになる。

⑧ (0168) 梵文金剛般若經諸譯互證 四

この写本は『梵文金剛般若經諸譯互證 四』で第四巻となっているが、⑦『梵文金剛般若經諸譯互證』が三巻での完結となっている。⑧『梵文金剛般若經諸譯互證 四』は折本形式で表紙には「坤 二稿 梵文金剛般若經諸譯互證 四」と書いている。⑦『梵文金剛般若經諸譯互證』に準じた方法で（1）漢字での梵語に対する単語の訳（2）カタカナで発音のふりがな付きの梵字（3）音写漢字（4）漢訳 羅什訳（5）漢訳 笈多訳を並べている。第14章（羅什訳では「離相寂滅分」）の途中から始まっている。「坤 二稿」となっているが、

③ (0074) vajracchedakā prajñāpāramitā sūtram 坤とは始まる箇所が少し違っている。ただ、2冊組の下巻をあらわす意味と思われる。「坤 二稿」から推測するに別に「乾 一稿」「坤 一稿」「乾 二稿」「坤 二稿」の合計4冊があったと思われる。そのため最後の「坤 二稿」に「四」と書かれた可能性がある。『高貴律寺所蔵 慈雲尊者遺芳 総目録 地』の編集者は、⑦『梵文金剛般若經諸譯互證』と続き番号のために「同本 四冊」と記録したと思われる。今回の調査で「梵文金剛般若經諸譯互證 四」のDVD画像の中から、別の原稿1枚が出てきた。これは、⑦『梵文金剛般若經諸譯互證』の原稿用紙と類似している。太い黒枠と題目

などを縦書きできる細長い枠がある。この形式の原稿用紙を高貴寺で印刷して、使用していたと考えられる。

第3節 梵文『金剛般若経』の原本について

第1項 奥書の調査

写本に奥書が書かれているものがある。書かれている順序や箇所が違っている。便宜上内容にそって (i) (ii) (iii) を付す。

(i)

書本奥書 永久四年八月十二日 前唐院之唐本申書

於西塔院黒谷報恩蔵

書校 梵字 借名 漢字 勘校 證字

保安元年中冬初三日申時書 藥賢筆也

同十二月六日一校 藥忍

(ii)

天台法華宗請益圓仁法師且求所送法門曼

荼羅并外書等目錄

大乘経律論梵漢字真言云云

別物封皮箱一合

件箱請益法師圓仁書稱般若理趣譯經一卷 梵字金剛経梵本般若心経梵字云云儀軌等

特盛一箱全封不可開出有思故不是惜法門者 右得請益傳燈法師位圓仁書併且所求得

譯撰集法門并兩部曼荼羅等送延曆寺 凡真言儀軌等唐國和上等尤有深誠之不安

散但其目錄先附第二舶粟田録事者仍且 記録如件

承和七季正月十九日都維那傳燈住位僧仁全 寺主傳灯住位僧治哲

上座傳灯住位僧道叡⁵

(iii)

右慈覚大師将来梵唐金剛経傍行二卷折本永久年中山門

僧藥賢書写藥忍一校久蒞在西塔天保何年魚山末葉僧都

真阿弥陀佛索得同八年夏比丘詮海謹臨写呈高貴寺老和上

今九年五月併写唐土送状再呈之

各梵写本の奥書の順序や欠落箇所は、以下のようになる。

- ③ (0074) vajracchedakā prajñapāramitā sūtram 坤では
(i) のみ朱書きで記載。(ii) (iii) は記載なし。
- ④ (0076) vajracchedakā sūtram 乙では、
(ii) (iii) (i) の順序で記載。(i) は朱書き。
- ⑥ (0162) vajracchedaka prajñapāramitā sūtram 上 下では、
(i) (ii) (iii) の順序で記載。(i) は朱書き。

第2項 各奥書について

ア) (i) 部分の奥書について

書本奥書 永久四年八月十二日 前唐院之唐本申書

於西塔院黒谷報恩蔵

書校 梵字 借名 漢字 勘校 證字

保安元年中冬初三日申時書 葉賢筆也

同十二月六日一校 葉忍

(i) 部分の記載から、この原本が前唐院にあったことが判る。永久4年(1116)の8月12日に前唐院より借用したと思われる。西塔院黒谷の報恩蔵で、保安元年(1120)に葉賢が写し、葉忍が校正をおこなったとしている。

前唐院に保管してあった經典の目録が残っている。建暦2年(1212年)に写された『前唐院法文新目録』では『金剛般若経梵本二卷 上下』となっている。また、それより100年ほど古く、嘉保2年(1095)に一条房仁覚が調査し作成した『勘定前唐院見在書目録』では『金剛般若経梵本二卷』の名称ではなく『能断金剛般若経梵本二卷 上下』と記されて存

108
在している。これらの目録より、永久4年（1116）には前唐院に原本があったと思われる。
そして葉賢、葉忍により保安元年（1120）に書写されたことが判る。

イ）（ii）の部分の奥書について

109
次に（ii）の部分では慈覚大師の『慈覚大師在唐送進録』の記載分よりの引用である。
『慈覚大師在唐送進録』は、慈覚大師が在唐中に遣唐大使に託して比叡山に送付した、経典を仁全、治哲、道叡らが点検して作成したものである。この目録は比叡山に確実に到着した経典の実録といえる。

ウ）（iii）の部分の奥書について

右慈覚大師将来梵唐金剛経傍行二卷折本永久年中山門
僧葉賢書写葉忍一校久蒞在西塔天保何年魚山末葉僧都
真阿弥陀佛索得同八年夏比丘詮海謹臨写呈高貴寺老和上
今九年五月併写唐土送状再呈之

そして（iii）からは、この梵文写本が高貴寺にいかにして渡ったかを述べている。前半は、奥書の（i）部分を簡潔に述べている。後半は天保何年（天保8年以前となる）かに、真阿弥陀佛という僧都（魚山末葉となっている）が探しだした。それを融通念仏宗の詮海が写し、天保8年夏（1837）に第1回目として、高貴寺の法樹（高貴寺老和尚）に送ったとされている。第2回目として天保9年5月に『慈覚大師在唐送進録』（iiの部分）を付け加えて、再び高貴寺に送ったとされる。

108 佐藤哲英「前唐院見在目録について」—慈覚大師将来佛典は如何に傳持されたか—

『慈覚大師研究』福井康順 天台学会編 1964, p98.

佐藤哲英「初期叡山の経蔵について」—新出の『御経蔵目録』『御経蔵櫃目録を中心として—
『仏教学研究』8/9, 1953, p70.

『前唐院書目』という目録集が比叡山の南溪蔵にあり、5目録が収められている。そのうちの2本が『勘定前唐院見在書目録』と『前唐院法文新目録』である。参考までに構成を書いておく。

1. 『勘定前唐院見在書目録』 2. 『前唐院法文新目録』 3. 『入唐新求聖教目録』
4. 『御経蔵寶物聖教目録』（12部の目録が含まれる） 5. 『承和七年慈覚大師送延曆寺聖教目録』
の5本の目録となる。

109 【大正第55巻 pp.1076中—1078中】

以上のことより、この梵文写本は、慈覚大師御将来であり、西塔に長く保管されていたとされる。法樹が梵写本を最初に入手した時期は、天保8年夏頃となる。翌年の天保9年にも、同一の梵写本が送られてきている。

第3項 真阿弥陀佛について

真阿弥陀佛について述べてみたい。手がかりとして「魚山末葉」「僧都」「真阿弥陀佛」の三語がでていいる。融通念仏宗の詮海の交流から見て、天台真盛宗の真阿上人宗淵ではないかと考えてみた。宗淵について述べてみる。

宗淵¹¹⁰ (1786—1859)

天台真盛宗僧侶で、俗姓久松氏。北野神社の僧（半俗半僧）で光乗坊能社の子として、天明6年（1786）に生まれる。13歳で出家して名を能瑞とした。北野の僧は半俗半僧であるため、15歳で昌宗について得度し宗淵となった。山城大原の実光院の良宗の弟子となり、大原流声明も学んだ。その後、洛北大原普賢院の住職となった。比叡山の正學院の豪恕からも教えを受けた。33歳で近江の坂本にあった走井大師堂に隠棲した。41歳で伊勢の津にある西来寺の第二十一世住職になる。安政6年に74歳で入寂した。著書は多くあり『魚山叢書』『阿又羅帖』『梵漢字法華陀羅尼』などが挙げられる。

真阿弥陀仏が真阿上人宗淵と考えられる理由を示してみる。第一に梵字の知識があるということ。宗淵は、梵文文献の調査をおこない天保8年に『阿又羅帖』を刊行した。注目すべきは、来迎寺の「多羅葉梵文（近江國台麓来迎寺蔵 傳云阿難尊書）」や法隆寺の貝葉¹¹¹の調査をしていることである。さきに述べた『前唐院法文新目録』¹¹²『勘定前唐院見在書目録』を宗淵が、文政2年（1819）春に鴨神社の関係者に書写させていた。これにより前唐院に『金剛般若経』の梵本があったことを把握していたと思われる。それから、文化9年¹¹³

110 獅子王 円信「台密における宗淵闍梨の業績」『天台学報』19,1977,pp.11—16. 参照

111 乾仁志「聖衆来迎寺所蔵の貝葉について」『密教学会報』21,1982, pp.1—10.

112 清田寂雲著「阿又羅帖を中心とする宗淵の業績」『天台学僧宗淵の研究』1958, p.120.

113 佐藤哲英「初期叡山の経蔵について」—新出の『御経蔵目録』『御経蔵櫃目録』を中心として—
『仏教学研究』8/9, 1953, p68.

「文政二年春 以南溪蔵本令鴨社司鴨脚某書寫畢 竹圓房清浄宗淵」

(1813)の宗淵の僧階は「権大僧都」であった。¹¹⁴次に「魚山末葉」という言葉より、声明に明るいことである。声明に関しては大原流声明の後継者である。また『魚山叢書』などの編集をおこなっている。また「真阿弥陀佛」という名前は、実際に宗淵が使用していたことが判明した。¹¹⁵三重県の西来寺には、自ら「真阿弥陀佛」と号して、法語を墨書きしている。遺言書に相当するものにも「真阿弥陀佛 記 花押」とあった。¹¹⁶詮海和尚との交流は、文政10年に伊勢の国で会見したり、天保8年春「戒珠院詮海より正倉院古文書抄本写経所古文書一卷を贈与」¹¹⁷がある。このように情報の交換もおこなわれたと思われる。

以上の『金剛般若経』の梵本は宗淵が探しだし、詮海に届けたという結論に達した。

第4項 阿満得壽師の『金剛般若経』の梵本について

阿満得壽師について断片的であるが述べてみたい。¹¹⁸

阿満得壽 (1879—1940)

京都市伏見区の真宗本願寺派西養寺の第13世である。学僧である阿満得聞師の子として明治12年に生れた。高楠順次郎の門下生となり、梵学の研鑽に努めた。明治33年ごろから、東京帝国大学に阿満得聞師の実弟である高貴寺の住職のくれとかいしん 伎人戒心師 (1839—1920) の好意により『梵学津梁』の一部が貸出された。これらを阿満得壽師は、丹念に写す作業をおこなった。26歳のごろに東京帝国大学の言語学科の書記職に就いた。伝統的悉曇学とサンスクリットの両方の学識を持った人物であった。昭和15年に入寂した。著書は多くあり『悉曇阿弥陀経』『梵語文法綱要』『梵文和訳 金光明最勝王経』『ナラ王物語』などがある。比叡山の歴史を語る中で必ず問題となるのが、元龜2年 (1571) の織田信長の焼き討ちである。そのような状況で西塔に天保年間まで保管可能であったのかは疑問である。得壽師

114 佐藤哲英著「宗淵上人蒐集資料について」『天台学僧宗淵の研究』1958, p.10.

115 色井秀讓著「西来寺と真阿上人」『天台学僧宗淵の研究』1958, p.225.

116 色井秀讓著「西来寺と真阿上人」『天台学僧宗淵の研究』1958, P.227.

117 「真阿宗淵上人年譜」『天台学僧宗淵の研究』1958, p.295.

上田忠男『詮海和上とその弟子たち』編集工房ノア1991, P.217.

118 阿満得壽師についての資料は少ないため、西養寺の阿満住職より直接に伺った。紙面を借りてお礼を申し上げます。

は、坂本の来迎寺より写本を得たとしている。得壽師が月刊誌の『大乘』に載せた記事は
119
以下のように書いている。

梵文金剛經は慈雲尊者の編纂にかかる梵学津梁の中に漏れていた、そは尊者御在世中梵文金剛經の日本に伝わっているということは、お聞きになったようであるが、尊者の搜羅にもれた。御遷化後お弟子の智幢比丘が比叡山坂本の来迎寺よりそれを得て、諸譯互證を作って後に、梵学津梁第320巻として加えた。

と書かれている。阿満師によれば、原本は来迎寺にあったとされる。阿満得壽師の父である阿満得聞師の悉曇の師匠は法樹および真宗学僧の法雲（1791—1847）である。また得聞師の実弟が、高貴寺の住職の戒心師であり、得壽師は戒心師の甥となる。また戒心師の次の高貴寺住職の伎人慈城師は、得聞師、戒心師の甥になり、得壽師の従兄弟という間柄であった。であるから得壽師は父親を介して、父の師匠である法樹師の業績を聞くことができたり、高貴寺の『梵学津梁』の情報などを非常に得やすい立場であった。坂本の来迎寺より写本を得たとした意見は、直ちに否定されるものではない。坂本の来迎寺とは、聖衆来迎寺という天台宗の寺院である。ここは「比叡山の正倉院」と呼ばれ、寺宝の多い寺である。宗淵の『阿又羅帖』には『金剛般若経』の梵本に関しては言及していない。しかし聖衆来迎寺も原本のあった可能性の場所と考えられる。

第5項 『附願海和尚書志』の『金剛般若経』の梵本について

本論文の「第2章 『梵学津梁』の目録について」で『梵学津梁總目』『附願海和尚書志』について目録部分を中心について述べた。重複するかもしれないが『附願海和尚書志』の内容と願海和尚の略歴を再び述べて『金剛般若経』の梵本に関して述べていきたい。

『附願海和尚書志』の概略について¹²⁰

天台宗の願海阿闍梨が、当時の本や蔵書蒐集家などを記録したものである。原本は京都大学附属図書館の吉澤義則博士所有の旧蔵書にある。前半には、高貴寺の梵学津梁の目録

119 阿満得壽「梵文能斷金剛般若波羅蜜經と西藏譯漢譯の対照」（一）『大乘』8巻12, 1929, p.37.

120 伊藤祐昭「幕末における一書誌学者 願海 — 梵学津梁目録より —

『図書館界』7巻4号 1955, pp.140—141.

大槻信「願海書誌」『訓点語と訓点資料』第127輯 2011, pp.44—64.

を弟子の亮海が写した部分が約35枚ある。残り約45枚程度は、願海自らが綴った記事である。

『金剛般若経』の梵本についての記載部分（53丁ウラー55丁オモテ）

別詮目録ノ中ニ金剛経未得ストアリコレハ慈覚大師御将来金剛般若経梵漢對譯本
ノコトヽミユ八家秘録ニヨリテ其名目ヲ標出四セシモノト覺ユ此ノ経ハハヤクウ
セテ流傳ヲキカズ台家ノ人モ又タハ他門ノ人モソノ名目スラ知ルモノ稀ナリ慈雲
和上モ廣ロク搜索申サシモ遂ニ得之玉ハズルルニ願海昨夏上洛ノ後事故アリテ榎
尾峯石之菴ニ寓ス病少シクシリソク時ハアレコレニ訪問シテ古寫本ヲ搜索シナド
シテ養生ガテラブラブラト致シ居諸ヲ消スルノヲリカラ風圖此ノ金剛般若梵本ヲ
収蔵スルノ處ヲ聞キ出シ縁ヲタヨリテ寫得ヲ頼入レシニ事故アリテ容易ニ寫得ヲ
ユルサレズアマリ事面倒ナルユイニ思ヘ止マルベキカトモ思ヘシガ又タ思フヨウ
願海コノ處ニシテ寫得ゼズバ又タ何レノ日出現世将来可悲又タ謹テ思フニ往時曩
祖慈覚大師會昌天子毀佛ノ時ニアタリ入唐求法マシマシ首尾八ヶ年ニシテ歸朝復
命スソノ間ノ千辛萬苦云何ソヤト思惟コヽニ至リテ如服甘露然リコヽニオイテカ
千方萬計多々ノ苦境ニ觸著ジテ重々ノ難関ヲ透過シヨクヤクシテ一本ヲ写得ス他
日ヲマチ校合精詳シ上セ木ニ世ニ公ニセント謹テ有力護法ノ人々ニスミ願クハ為
法為人吾ヲ輔ケ其ノ微願ヲ成辨セジメ玉ヘ古人云ル事アリ道獨リ不弘必スコレヲ
行ノ人ヲマチテ弘ムト蕞尔タルコトイヘバ誠ニシカルカナ伏願此心此願佛天哀愍
シ玉ヘ

願海が『金剛般若経』の梵本を探がす動機や時期について述べたい。

ア) 梵写本を探す動機について

動機に関しての部分を下に示す。

別詮目録ノ中ニ金剛経未得ストアリコレハ慈覚大師御将来金剛般若経梵漢對譯本
ノコトヽミユ八家秘録ニヨリテ其名目ヲ標出四セシモノト覺ユ此ノ経ハハヤクウ
セテ流傳ヲキカズ台家ノ人モ又タハ他門ノ人モソノ名目スラ知ルモノ稀ナリ慈雲
和上モ廣ロク搜索申サシモ遂ニ得之玉ハズ

願海の入手した『梵学津梁』の目録に、金剛経が未得であったと書かれていたのが、大きな動機である。「別詮目録ノ中ニ金剛経未得ストアリ」となっているが、この別詮目録については『梵学津梁』の目録の「別詮」（梵語辞典関係の部門である）と同一ではない『願

海書志』に収められた2種類のうちの別の片方という意味である。安然の『諸阿闍梨眞言密教部類總録』より、慈覚大師が将来したことは把握していた。しかし『金剛般若経』の梵本は早い時期に消息が不明となり、天台宗はもちろん、他の宗派の人々にも忘れられていた。慈雲も探し得なかったとしている。以上が動機といえる。

イ) 時期について

時期関しての部分を下に示す。

願海昨夏上洛ノ後事故アリテ梅尾峯石之莽ニ寓ス病少シクシリソク時ハアレコレニ

訪問シテ古寫本ヲ搜索シナドシテ

願海が、昨年の夏に上洛してたとしている。ここでの「昨夏」は、安政3年（1856）となる。時期は翌年の安政4年となる。甲寅年（安政元年1854）に師匠の命により江戸の東叡山（東京上野の寛永寺）に足かけ3年滞在し、安政3年の夏に高山寺（京都市右京区梅ヶ畑梅尾町）に戻ったことになる。「事故アリテ梅尾峯石之莽ニ寓ス」とあるが、京大蔵書本では「事故アリテ」は「病魔ノタメニ」を消して書いている。石雲庵に居り、病気が少し良くなる時に古写本を探していると述べている。

ウ) その他

『金剛般若経』の梵本の所蔵場所を見つけたが、相手方との交渉などが相当難しかったと述べている。難問を突破して、ようやく写本を完成したとしている。ただ、残念なことに『金剛般若経』の梵本の所蔵場所が明記されていない。

以上のことから、願海は『梵学津梁』に梵文『金剛般若経』が、収められていないことを残念に思い『金剛般若経』の梵本の搜索を開始した。安政4年（1856）に場所は不明であるが『金剛般若経』の梵本を見つけて、その写本を完成させたことになる。しかし19年前の天保8年（1837）の夏に高貴寺の法樹智幢が既に入手している。そして、9年前の弘化4年（1847）には『梵本金剛般若経諸譯互證』が完成されている。この間の高貴寺における『梵学津梁』の情報が入っていなかったと思われる。ただし、願海は寛永3年（1850）に真阿弥陀仏の号を持つ宗淵より、圓頂大戒を授けられている。宗淵は安政6年に遷化している。願海が『金剛般若経』の梵本を探している時には存命中である。『金剛般若経』の梵本の所在場所は、宗淵より情報を得た可能性もある。

第4節 Max Müller本との関係

第1項 Max Müller本に使用した梵本

Max Müllerが編纂した"Buddhist texts from Japan" に梵文『金剛般若経』が、収められている。¹²¹これには、4種類の梵本が使用された。中国とチベットと日本から伝来した梵写本であり、以下に示す。日本からの梵写本については、あとで詳しく述べる。

ア) 中国伝来の梵写本

イギリスのWylieが中国の北京で入手した「サンスクリット経典集」である。木版のこの経典集には『金剛般若経』『観音経』『般若心経』『大乘無量壽（宗要）経』の経典と多くの陀羅尼かかかれている。丁付けには漢字で「金一、金二」などのように記されていることから、中国で作成されたものと思われる。

イ) チベット伝来の梵写本

清の乾隆帝の時代に国師となったチャンキヤ2世（1717－1786）の弟子ペンツン・ハチ・タンパが、北京の大法輪寺にて入手した版本である。貝葉型で、6列に文字が書かれている。3列が一組で、上からサンスクリットをランツア文字で表している。その下にチベット文字での音訳を書き、その下にチベット語訳を書いたものである。

ウ) 日本からの梵写本（『梵学津梁』に関するもの）

『梵学津梁』の第320巻を複製したもの。南条文雄の朋友で、真宗の学僧金松空賢師が書写した。

エ) 日本からの梵写本（梵字のみ）

英国の外交官Ernest Satowにより日本で入手したもの。梵字のみで12行ずつの横書きである。高貴寺の住職の戒心師が書いたものである。

イギリスに日本から送られた梵写本と高貴寺並びに『梵学津梁』との関わりを詳しく述べてみたい。Paul Harrison氏によれば、2種類の梵写本はオックスフォード大学のボドリアン図書館に所蔵されているようである。Paul Harrison氏はイギリスにある2種類の梵写本の報告もおこなっている。¹²³

a) 日本からの梵写本（『梵学津梁』に関するもの）

121 Max Müller (1881) pp.14－50. (Fig.4pages)

122 橋本光寶 清水亮昇譯編『蒙藏梵漢和合璧金剛般若波羅蜜經』蒙藏典籍刊行 1941, p.2.

Max Müller (1881) pp.16－17, pp.47－50.

123 Paul Harrison (2008/2010) pp.205－215.

金松空賢師について述べてみる。

金松空賢 (1853－1918)¹²⁴

真宗本願寺派の光明山西方寺（京都市伏見区風呂屋町）の第21代住職空覚を父として生まれる。幼年より漢文、詩文に通じており、年少より本山に奉仕した。本山では、文書科長内事局尚書の職に就いた。明治4年に父の空覚が、非業の死（暗殺）を遂げた。31歳の時に西方寺の第23代住職に就任した。何事にも大らかな人であった。南条文雄の朋友で、南条文雄がイギリスより帰国した時は、真っ先に神戸港に迎えに行った。大正7年に66歳で入寂。

真宗の学僧の金松空賢師の写したものは『梵学津梁』の第320巻としている。図版¹²⁵よりみると縦書きで（1）漢字での梵語に対する単語の訳（2）音写漢字（3）漢訳 羅什訳（4）漢訳 笈多訳の形式をとっている。金松空賢師がいつ頃に高貴寺で、これを写したかについて述べてみる。手がかりは「明教新誌」という仏教関係の新聞記事が2種ある。以下に示す。

1) 明教新誌 雑報¹²⁶（明治13年9月28日）

此頃東派本願寺教育課より金松空賢太田祐慶二氏と河内平石村の高貴寺へ遣はし慈雲尊者の遺稿に就て梵學津梁其他の梵本を謄寫せしもめらるゝ由なるが右二氏ともに至て温和且つ勉強の人にて日夜みだりに戸外に出です孜ゝとして謄寫に勤勞せらるゝは誠に感服の至なり云々と該寺住職伎人律師の書翰中に見たり

2) 在英國南條文雄君に酬ふ 伎人戒心和南¹²⁷ 寄書（明治13年11月30日）

去ぬる四月下旬東派本願寺教育課の栗原金松太田三氏來山あり志に余事故ありて東京に趣き不在なり志を以て空く歸山せられたり志が七月下旬余歸坊の後一書を渥美教正に呈志て其由を報告せ志かば同教正及び細川教育課長兩氏の書面を具志て金松太田二氏及び筆生某等八月廿四日を以て再び山房の苔扉を扣き所藏梵書の謄寫を乞はる爾來三氏黽勉孜々と志て晝夜を分たず僅か三周間に志て大畧必用の

124 金松空賢師については、資料が少ないので西方寺の金松耕一師にお伺いした。紙面を借りてお礼を申し上げます。

125 Max Müller (1881) pp.47.

126 「明教新誌」第1046號 明治13年9月28日発行 p5.

127 「明教新誌」第1077號 明治13年11月30日発行 pp.6－7.

分五十餘部を謄寫せられたり加之ならず枳橘易土集酬全部三十卷の如きも期日を約志て之を賃附志西京本山に持ち歸ることを許せり然り而して二氏の言に曰く本詮の如きは是れ則ら在英南條君に贈るなりと

以上のことより、金松空賢師は東本願寺の教育課より派遣という形で、高貴寺に滞在した。明治13年（1880）4月より滞在し調査の意志があったが、事情により8月24日から写本を始めたとしている。金松空賢師太田祐慶二師が中心となり、3週間ほどの滞在で50種以上の写本を完了したとしている。金松空賢師と太田祐慶師は、温和で向学心が強くよく努力していると高貴寺住職の伎人戒心師が語っている。金松空賢師と太田祐慶二師によれば『梵学津梁』の「本詮」部（日本に伝わった梵写本で、梵文『阿弥陀経』や梵文『普賢行願讃』などがある。）は、イギリスの南条文雄師に送るとしている。金松空賢師が梵文『金剛般若経』を写したのは、明治13年（1880）8月24日から9月の中旬になる。イギリスの梵文『金剛般若経』は、金松空賢師が日時を記入しているようである。¹²⁸

「（明治13年）1880年9月の中旬10日の間」である。これより、ほぼ写本した期日が確定できた。

b) 日本からの梵写本（梵字のみ）

英国の外交官Eenest Satowにより日本で入手したもので、梵字のみで6行ずつの横書きである。高貴寺住職の伎人戒心師が書いたものである。Eenest Satowと伎人戒心師について述べてみたい。

Sir Ernest Satow (1843–1929)¹²⁹

幕末から明治にかけての駐日イギリス公使である。ロンドン大を卒業して、通訳生の募

128 Paul HARRISON (2008/2010) p.208,

'Copied at Kōkiji in the middle ten-day period of September, Meiji 13, Head of Survey, India School, Kanematsu Kūken.'

129 新潮社辞典編集部『新潮日本人名辞典』新潮社 1991,p.812–813. 参照

『日本歴史大事典』第2巻 小学館2000, p.267.参照

Ernest Mason Satow "Collected papers" vol.3. (1880–1894)

Ganesha Publishing Edition Synapse, 2001,pp.28–31.

Ernest Satowが『阿叉羅帖』より複写した法隆寺の梵文『般若心経』の貝葉をイギリスに送った時期は、1881年となる。

集に合格した。文久2年（1862）にイギリス領事館員（通訳見習生）として来日した。オールコックやパークス公使に仕えた。薩英戦争や下関戦争にも参加した。下関戦争終結時には、高杉晋作との講和交渉の通訳を務めた。ジャパントイムスに対日外交問題について『英国策論』を発表し、幕末の政策に大きな影響を与え、明治新政府設立の際にも貢献した。日本をよく理解した、数少ない外国人であった。日本語や日本の民俗学的なものの研究もおこなっていた。法隆寺の梵文『般若心経』の書かれた貝葉を宗淵の『阿又羅帖』より複写して、イギリスにも送った。明治28年（1895）駐日公使となる。

130
伎人戒心師（1839-1920）

天保10年（1839）に摂津六甲（神戸市灘区徳井町）円通寺の存^{たもつ}芳山師の3男として浄土真宗の寺に生まれる。1854年山城伏見の西養寺の実兄である阿満得聞に俱舎・唯識や浄土教を学ぶ。1858年真言宗に宗旨替えをして、大阪万善寺の寂然に師事した。長谷寺の海如や渡辺雲照に従って密教と律を修める。1874年に河内高貴寺9世住職となって、46年間その職にあった。学僧でもあり、真言宗聯合京都大学（種智院大学）や高野山大学で悉曇を講義した。一大事業としては「慈雲尊者全集」の編纂を企画した。大正9年（1920）に81歳で遷化する。著書には『破邪顯正 偶像説駁論』『聖徳太子と夢殿本尊』『戒心大和上略伝』などがある。

この梵写本は、1頁に6行ずつ梵字のみ横書きされたものである。Max Müllerによれば、この梵写本は、さきの梵写本より後に到着したとしている。

131
『密教大辞典』によると

（明治）十三年十月梵学津梁の本詮全部を寫して、英國公使館詰大書記官アーネストサトウ氏に贈る。（明治は、著者が補足した。）

となっている。明治13年（1880）10月にこの梵写本が、Ernest Satowに送られた可能性がある。

第2項 イギリスに梵写本が届いた時期について

Max Müllerが、梵写本を受け取ったのが、いつ頃かを調べてみたい。金松空賢師が梵文『金剛般若経』を写したのは、明治13年（1880）8月24日から9月の中旬になることは、明

130 【人名辞典 法蔵館 p.200】

131 【密教大辞典 p.204】

らかになった。Max Müllerは、1881年2月15日に金松空賢師の写した梵文『金剛般若経』を受け取ったとしている。¹³² 伎人戒心師の梵写本は第2信となり、1881年2月15日以降となる。ただし、南條文雄は『懷舊録』では

「明治十三年一月以後、マ博士は私達の為に無量寿経の梵本と、前年十月日本から到着した阿弥陀経と金剛般若経の梵文とを購読せられたのである。」¹³³

と書かれている。梵文『金剛般若経』を手に入れたのは、明治12年10月（1879）になってしまう。これは日時の誤りであろう。以上を簡単にまとめてみる。

明治13年（1880）8月24日より金松空賢師、太田祐慶の二師が梵写本を写すために、高貴寺に滞在を開始した。

明治13年9月の中旬の10日間ほどで、梵文『金剛般若経』を写し終えた。

明治13年9月の中旬に滞在期間の約3週間をもって、50種類以上の本を写し終えた。

明治13年10月『梵学津梁』本詮全部を写し伎人戒心師から、Ernest Satowへ贈呈する。

明治14年2月15日Max Müllerが、金松空賢師の写した梵文『金剛般若経』を受け取る。

日時不明 第2信としてErnest Satowから、伎人戒心師の梵文『金剛般若経』を受け取る。

第5節 梵文『金剛般若経』ローマナイズ対照と分析

第1項 単語の変化について

1. サンスクリット単語で子音が重複されている例

①子音t音が、重複される例

pātra → pāttra pravarteta → pravartteta

②子音v音が、重複される例

sarve → sarvve pūrvāhṇa → purvvāhṇa nirvāṇa → nirvvāṇa

punar vādo → punar vvādo

③子音m音が重複される例

dharmeṣu → dharmmeṣu

④子音n音が、重複される例

132 Max Müller (1881) p.16.

133 南條文雄『懷舊録』大雄閣 1927, p.153.

hitor na → hitor nna

以上は例であるが同系統の単語に関して（動詞、名詞の変化、複合語になった時など）たとえば pravarteta → pravartteta であるように pravartīṣyate → pravarttīṣyate となり dharmeṣu → dharmmeṣu であるように dharmaparyāyam → dharmmaparāyam と子音が重複している。hitor na → hitor nna や punar vādo → punar vvādo 場合は、どちらかといえば単語ではなく、連声の特殊な例とも考えられる。

2. サンスクリット単語で子音が落ちている例

子音が落ちている例 としては、今のところ子音t音の欠落のみがある。

bodhisattvā → bodhisatvā mahāsattvāḥ → mahāsatvāḥ mayārhattvaṃ → mayārhatvaṃ

3. 連声について

写本の連声	正しい連声
samgrhītaḥ aṇḍaja → samgrhītā aṇḍajā	
vāupapāduja → vaupapādukā (vā aupapādukā)	
vā arūpiṇo → vārūpiṇo	
vā asaṃjñino → vāsaṃjñino	
sarvve anupathiseṣe → sarve 'nupathiseṣe	
subhūte aprameyaṃ → subhūte 'prameyam	

これら不規則な連声は、全てこのように表示されているとは限らず、正しい連声の表記もされている。梵字の表示では、avagrahaの記載がない。このようにaが省略されずに連声がおこなわれていないことがある。

4. visargaについて

visargaが本来のvisargaの働きと句読点（double-dotted daṇḍa）としての働きが、混乱して書かれている。

第2項 梵文の校訂について

梵文『金剛般若経』の最初の部分をローマナイズして、校訂について考えてみたい。いくつかのブロックに分けて、調査してみたい。

A ブロック

(0073) namaḥ sarvva jñaya ||

(0075) namaḥ sarvva jñaya ||

(0070) namaḥ sarvva jñaya ||

(0159) namaḥ sarvva jñaya ||

(0165) namaḥ sarvva jñāya ||

Aブロックでは、まずsarvvaとvが重複しているのがみられる。音写文字で「薩喇嚩」と書かれている。寛政甲寅（寛政6年1794）七月の刊行の梵文『阿彌陀經 義釋』（梵学0165梁卷第三百四十二）ではsarvaという形で、音写文字で「薩嚩」となっている。「喇」の文字があることからvが重複したsarvvaになったと思う。次にjñaとjñāの違いがある。最終的には、長音に訂正されている。梵字のjñaとjñāは混乱されて書かれていることが、多くみられる。阿満得壽師が「法隆寺貝葉を初めとし、古體にはjñaの如く、aの長點とも見らるべきものなし、中古より文にjñāの如く、aの引點を見るなり。」（梵字はローマ字に変換）と述べている。¹³⁴しかし時代としては、いつ頃から古体、中古の仕分けがされるかが書かれていない。

(0073) (0075) の写本の字体としては、古体に属する可能性が大である。ただし音写漢字では長音を表す「引」が書かれていないのでjñaと考えられる。

B ブロック

(0073) evaṃ mayā srutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ ccharavastyāṃ viharati sma :

(0075) evaṃ mayā srutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ ccharavastyāṃ viharati sma :

(0070) evaṃ mayā śrutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ śrāvastyāṃ viharati sma :

(0159) evaṃ mayā śrutam ekasmiṃ samaye bhagavāṃ śrāvastyāṃ viharati sma :

(0165) evaṃ mayā śrutam ekasmiṃ samaye bhagavaṃ śrāvastyāṃ viharati sma :

Bブロックでは śrāvastyāṃ が (0073) (0075) では ccharavastyāṃ となっているが、正しく訂正されている。『梵文阿彌陀經義釋』では śrāvastyāṃ viharati sma を「在室羅筏住處也」と解説している。このことをふまえて校訂していると思う。

C ブロック

(0073) jetavane anāśayiṇḍādasyārāme mahatā bhiṣusaṃghghana sārddham ardhattrayodasabhir

(0075) jetavane anāśayiṇḍādasyārāme mahatā bhirṣusaṃghghana sārddhamardhattrayodaśabhir

(0070) jetavane anāthapiṇḍadasyārāme mahatā bhikṣusaṃghghena sāvam mavattrayodaśabhir

(0159) jetavane anāthapiṇḍadasyārāme mahatā bhikṣusaṃghghena sāvam mavattrayodaśabhir

134 阿満得壽『悉曇阿彌陀經』丙午出版社 附言（二）甲 1908. p5-6.

(0165) jetavane anāthapiṇḍadasyārāme mahatā bhikṣusamṅghena sāvam mavattrayodaśabhir
 C ブロックではjetavane anāthapiṇḍadasyārāme に正しい連声がおこなわれていない。また sārddham ardhattrayodasabhir がsāvam mavattrayodaśabhir に校訂されている。ほぼ正しい綴りが、反対に間違って校訂されている。(0079) 『梵文阿彌陀經諸譯互證 全』(梵学梁第三百十九卷) sāvam mavattrayodaśabhirでもほぼ同じ綴りででてくる。『阿彌陀經 義釋』によればsāvam mavaを一単語として考え「與俱也」としている。「唐梵文云sava 諸也今云sāvamは者第二轉呼也」と書かれている。間違っただ校訂であるが、この箇所も今までの資料を参考にして校訂している。

D ブロック

- (0073) bhiṣṃsataiḥ sabahulaiś va bovisatvairm mahāsatvaiḥ aśa śalu bhagavām
 (0075) bhirṣusataiḥ sabahulais va bovisatvairm mahāsatvaiḥ aśa śalu bhagavām
 (0070) bhikṣuśataiḥ sabahulaiś ca bodhisatvairm mahāsatvaiḥ atha khalu bhagavām
 (0159) bhikṣuśataiḥ sambahulaiś ca bodhisatvairm mahāsatvaiḥ atha khalu bhagavām
 (0165) bhikṣuśataiḥ sambahulaiś ca bodhisatvairm mahāsatvaiḥ atha khalu bhagavām

D ブロックではaśaやśaluの綴りをathaやkhalu に正しく訂正している。

E ブロック

- (0073) purvvāhṅakāla samaye nivāsyah pātracīvaram ādāyah śrāśasthīm mahānagarīm piṇḍāya
 (0075) purvvāhṅakāla samaye nivāsyah pātracīvaram ādāyah śrāśasthīm mahānagarīm piṇḍāya
 (0070) purvvāhṅakāla samaye nivāsyah pātracīvaramādāyah śravasthīm mahānagarīm piṇḍāya
 (0159) purvvāhṅakāla samaye nivāsyah pātracīvaram ādāyah śravastīm mahānagarīm piṇḍāya
 (0165) purvvāhṅakāla samaye nivāsyah pātracīvaram ādāyah śrāvastīm mahānagarīm piṇḍāya

F ブロック

- (0073) prāviśat aśa śalu bhagavām śrāvasthīm mahānagarīm piṇḍāya caritvā
 (0075) prāviśat aśa ghalu bhagavām śrāvasthīm mahānagarīm piṇḍāya caritvā
 (0070) prāviśat atha khalu bhagavām śrāvasthīm mahānagarīm piṇḍāya caritvā
 (0159) prāviśat atha khalu bhagavām śrāvastīm mahānagarīm piṇḍāya caritvā
 (0165) prāviśat atha khalu bhagavām śrāvastīm mahānagarīm piṇḍāya caritvā

G ブロック

- (0073) kytabhaktakyatya paścādbhaktapiṇḍapātapatikrāntaḥ pātracīvaram pratisāmya
 (0075) kytabhaktakyatya paścādbhaktapiṇḍapātapatikrāntaḥ pātracīvaram pratisāmya

(0070) kṛtabhaktakṛtya paścādbhaktapiṇḍapātapratikrāntaḥ pātracivaram pratiśāmya

(0159) kṛtabhaktakṛtya paścādbhaktapiṇḍapātapratikrāntaḥ pātracivaram pratiśāmya

(0165) kṛtabhaktakṛtya paścādbhaktapiṇḍapātapratikrāntaḥ pātracivaram pratiśāmya

Eブロックや Fブロックでは、大きな変化はない。Gブロックでは、ここでは kṛtabhaktakṛtyaの単語での yとṛ の混乱がみられるが、それを正しく校訂している。

H ブロック

(0073) pādā prakṣalya nyaśīdaḥ prajñapta evāsane paryamkam ābhujya ryajum kayam

(0075) pādo prakṣalya nyaśīdaḥ prajñapta evāsane paryamkam ābhujya ryajum kayam

(0070) pādo prakṣalya nyaśīdaḥ prajñapta evāsane paryamkam ābhujyā ryajum kayam prayam

(0159) pādo prakṣalya nyaśīdaḥ prajñapta evāsane paryamkam ābhujyā ryajum kayam

(0165) pādo prakṣalya nyaśīdat prajñapta evāsane paryamkam ābhujyā ryajum kayam

Hブロックでは(0070)ではprayamという単語が書かれている。この箇所は朱色で、消されている。書いた後、間違いに気がついたようである。nyaśīdaḥの半舌音のṭが最終的に正しくnyaśīdatと校訂されている。音写漢字は「你也使去捺娜半音」と書いてある。音写文字に頼らずに、独自の研究により校訂した可能性がある。

I ブロック

(0073) praṇivāya abhimuknau smṛti upasphāpya : aśa khalu saṃpahulā bhikṣavo yena

(0075) praṇivāya abhimuvom smṛti upasphāpya : aśa khalu saṃbahulā bhikṣavo yena

(0070) praṇidhāya abhimuvom smṛti upasphāmyaḥ atha khalu saṃpahulā bhikṣavo yena

(0159) praṇidhāya abhimukhaṃ smṛti upasphāpyaḥ atha khalu saṃpahulā bhikṣavo yena

(0165) praṇidhāya abhimukhaṃ smṛti upstphāpyaḥ atha khalu saṃbahulā bhikṣavo yena

Iブロックではabhimuknauを最終的にはabhimukhaṃに校訂している。音写漢字「阿上鼻上母騫去」となっている。音写漢字を参照して、校訂したと考えられる。ただしMax Müllerはpratimukhīmと校訂している。

梵文『金剛般若経』の流れ

円仁将来の『梵字金剛経』



(0073) (0074) vajracchedakā prajñāpāramitā sūtram (詮海送付分1回目)



(0075) (0076) vajracchedakā sūtram (詮海送付分2回目)



(0159) (0160) 『梵文金剛般若経諸譯互證初稿』



(0165) (0166) (0167) 『梵学津梁』第320卷『梵文金剛般若経諸譯互證』



金松空賢の写本



伎人戒心師の梵字のみの写本 → Max Müller校訂本

まとめ

高貴寺には『金剛般若経』の梵文写本が複数本所蔵されていた。梵写本を搜索した真阿弥陀仏が、真阿上人宗淵であることが判った。梵写本は真阿上人が探しだし、詮海和尚に渡った。そして詮海和尚が写したものが、天保8年夏頃に高貴寺に送られた。『梵学津梁』第320卷『梵文金剛般若経諸譯互證』の元になったと思われる。ただ単に詮海和尚よりの写本をそのまま写したものではなかった。初版本を作成して梵文と漢訳二本を並べて対照している。また梵文の音写を漢字で表記したり、梵文の単語の意味を調べて書いている。相当な努力と時間を費やしたものである。現在から見てもその梵語学知識は相当高いと考えている。『梵学津梁総目録』の「本詮」に追加で記されて、正式に『梵学津梁』に収められたことになる。また、願海は『梵学津梁』の目録に収められていないことに、憂いを感じて独自に収集に努力した。明治時代に入ってから、Ernest Satowや金松空賢や南条文雄の真宗僧侶の活躍によりMax Müller校訂本が完成された。慈雲遷化後に得られた梵文『金剛般若経』の存在意義は大きいものである。

『梵学津梁』についての総まとめ

本論文では『梵学津梁』についての調査と研究を試みた。慈雲は伝統的な梵学からの脱却をおこない、梵学の研究の改革を推進した。それまでの梵字の經典を写すことから、梵文法をもって經典に解釈をつけるいう、当時では最高水準の学力であった。その努力は想像に絶するものであった。情報や運送、印刷が現代よりもはるかに劣る時代に国内にある梵写本を収集した。集められた梵写本を利用して、異本対照や辞書の編纂に従事していた。その集大成は『梵学津梁』として編纂された。総まとめとして各章のまとめを述べておく。

第1章『梵学津梁』の導入部分では、慈雲の置かれた環境や優秀な弟子により『梵学津梁』作成に邁進することができたと思う。

第2章 目録より見た『梵学津梁』については、高貴寺以外に『梵学津梁』の目録がおおくの場所で転写されていた。『梵学津梁』の全体像がほぼ判る資料ではあった。高貴寺から伝搬された目録は、慈雲の草本として書いた目録の域をでていないものであった。慈雲遷化後にも目録も完成されていなかったと思われる。また『梵学津梁』編纂するに利用するための詳細な目録ではなかった。慈雲自筆で、現存する『梵学津梁』の經典の番号と一部が合致する目録が高貴寺にあることが判明した。これにより、慈雲の目指した『梵学津梁』編集についての概略が判った。『梵学津梁』には1000巻が収集されたかについても判明したといえる。願海の「附願海和尚書志」の記載と諦了師の(0000)『慈雲尊者遺芳総目録・地』の記載より、筆者は結論としては目録検証より『梵学津梁』は未完との結論に達した。第3章の作業に入るために目録を絞って、比較一覧表を作成した。

第3章『梵学津梁』の現状については、作成された比較一覧表から『梵学津梁』の現状について考察した。『梵学津梁』の現状は、非常に複雑であった。梵写本とその複写本が存在するものがあり、同じ經典名で複数の梵写本となったいた。また、貝葉は目録上では数種類が記載されているが、現状では、その写しが1点のみ収められている。貝葉本体は、長栄寺の火災で、奇跡的に焼け残ったことが確認できた。現在は奈良国立博物館医保管されている。梵学の文法書に該当する『七九鈔』関係は、重要さから多く編纂されていた。特に『七九略鈔』の刊本は、重版しされたことが判明した。これは、梵学の指針となる文法書として『七九略鈔』が重要視されたことになる。『梵学津梁』には梵文の比較対照方法として「諸譯互證」という方法がみられる。「諸譯互證」は、經典の梵文と漢訳、単語訳を一覧に対照にする画期的方法をとっていたことも明らかになった。梵学とは関係ない

ヨーロッパも含む海外事情誌の『泰西輿地圖説 7巻』により、慈雲は地球が球形であり、仏教の世界観とは違うことを認識していた。またラテン語やドイツ語などの諸言語の存在を把握していたと思われる。

第4章『梵学津梁』所蔵の『弘法大師請来 四十二部』については、本詮の第1巻から『弘法大師請来 四十二部』が配されている。『弘法大師請来 四十二部』の奥書から多くの場所から、多くの人に関係して、高貴寺に集まったこと判明した。原本は高野山の金剛三昧院所蔵本や東寺所蔵本などが確認できた。転写された長い期間にいろいろな寺院の梵写本で、多くの人によって校訂されたことが解明された。それらに関わった寺院の所地や転写に関連した人物の特定をおこなった。そして校訂に使用された梵写本が、現存することも判明した。それらの結果を一覧表として作成した。

第5章では『梵学津梁』所蔵の梵文『阿弥陀経』については、慈雲は3種類の梵文『阿弥陀経』写本をもって校訂をおこなった。慈雲が、文脈を大事にしながらも独自で校訂した箇所もあった。慈雲が校訂に使用した法宣という人物の写本があり、今まで不明であった法宣という僧侶の背景も明らかになった。また慈雲の弟子の法護、諦濡が『梵文阿彌陀経義釋』を刊行したが、その校正に宗派を超えて浄土宗の典壽が参加しているのも判った。

第6章では『梵学津梁』所蔵の梵文『普賢行願讃』については、梵文『普賢行願讃』は、空海の将来した梵本だけが現存しているとした。空海の将来した梵本は4系統に分かれて、転写されたと考えていた。その4系統に分かれた写本を入手して、校訂をおこない校訂本を編纂した。『梵学津梁』所蔵の梵文『普賢行願讃』の4種類の写本を対照して、文脈にはほとんど差異がなかったことが判明した。慈雲の校訂は、単語の崩れはそのまま、原本に忠実に校訂したことが判った。写本のひとつが、真宗僧侶の海輪の所持本であった。海輪という僧侶を調査した結果、華嚴宗の鳳潭との関係が明らかになった。

第7章では『梵学津梁』所蔵の梵文『金剛般若経』については、梵文『金剛般若経』に関しては慈雲の遷化後に見つけ出されて、校訂された写本であることが判った。奥書から梵写本を捜索した真阿弥陀仏が、天台真盛宗の真阿上人宗淵であることが判明した。宗淵が採しだし、融通念仏宗の詮海に委託された。そして詮海が写したものが高貴寺に2回に送られた。高貴寺では校訂本を作成して、梵文と漢訳二本を並べて対照するに至った。明治時代に入ってから、イギリス外交官のErnest Satowや真宗僧侶の金松空賢が写本をイギリスに送った。それにより南条文雄とMax Müllerにより校訂本が完成された。慈雲の遷化後に得られた梵文『金剛般若経』の存在意義は、大きいものである。

このように『梵学津梁』は、多くの場所、多くの人を経て編纂されたものである。宗派も真言宗を超えて、天台宗、天台真盛宗、融通念仏宗、浄土宗、真宗の僧侶が関与としていた。また慈雲やその弟子たちは、写本を収集するだけではなく、辞書の編纂、文法書の編纂、写本の校訂、漢訳との対照などをおこなった。その梵学知識の水準は、非常に高度といえる。また海外にも目を向け、梵語を一言語として位置づけていた。明治時代に入ってもサンスクリット学を志す人に大きな影響を与えた。本論文により膨大な『梵学津梁』の内容を少しは明らかにできたと思う。あわせて、今までほとんど発表されていなかった梵文『金剛般若経』の検証成果も得られたと考えている。

参考文献

参考文献1（辞書、資料集に関するもの）

赤松徹真編 『真宗人名辞典』 法藏館 1999

井ノ口泰淳編 『高楠順次郎旧蔵日本梵語学資料集成』 名著普及会 1988

大野達之助編 『日本仏教史辞典』 東京堂出版 1979

小野玄妙編纂『佛書解説大辞典』改訂版 大東出版社 1964-1988

現代佛教家人名辞典刊行會編 『現代佛教家人名辞典』 現代佛教家人名辞典刊行會 1917

高野山大学統真言宗全書刊行会『統真言宗全書』第四二 解説 高野山大学出版部 2008

斎藤昭俊 成瀬良徳編著 『日本仏教人名辞典』 新人物往来社 1993

佐和隆研 編『密教辞典』法藏館 1999

大正新脩大蔵経刊行会『大正新脩大蔵経』

高柳光寿編『角川日本史辞典』角川書店 1966

筑波大学図書館 平成22年度筑波大学図書館特別展図録『慈雲尊者と悉曇学』

永原慶二監修『岩波日本史辞典』岩波書店 1999

中村元監修『新仏教辞典』誠進書房 1987

日本仏教人名辞典編纂委員会編 『日本仏教人名辞典』 法藏館 1992

日本歴史地名大系 第29巻Ⅱ 兵庫県の地名 平凡社 1999

長谷寶秀 種智院大学密教資料研究所編『長谷寶秀全集』第4巻 法藏館 1997

長谷寶秀編『慈雲尊者全集』再版 首巻—第17巻 思文閣出版 1974-1977

梵字貴重資料刊行会『梵字貴重資料集成 解説編』東京美術 1975

密教辞典編纂会編『密教大辞典』法藏館 1983

鷲尾順敬編纂 『日本佛家人名辞書 増訂』 東京美術 1973

Lokesh Chandra "Sanskrit Manuscripts from Japan" Cata-piTaka Series Vol.94.1972

参考文献2（研究書など）

上田忠男『詮海和上とその弟子たち』編集工房ノア 1991

大谷女子大学文化財学科編集『神下山高貴寺 文化財調査報告書』大谷女子大学2005

岡村圭真『慈雲尊者の生涯』 「慈雲尊者の生涯」大法輪閣 2004

木南卓一著『人となる道』三密堂書店 1980

東京大学大学院 竹内信夫編集『宝島寺の寂巖悉曇学資料に関する総合研究』2000

- 中村元 早島鏡正 紀野一義訳註 岩波文庫『浄土三部経 下』岩波書店 1973
- 中村元 紀野一義訳註 岩波文庫『般若心経』『金剛般若経』岩波書店 1993
- 中村元著 現代語訳大乘仏典 1『般若経典』東京書籍 2003
- 中村元著 現代語訳大乘仏典 5『華嚴経』『楞伽経』東京書籍 2003
- 中村元著 現代語訳大乘仏典 4『浄土経典』東京書籍 2003
- 藤田宏達著『阿弥陀経講究』真宗大谷派宗務所出版部 2001
- 藤田宏達著『浄土三部経の研究』岩波書店 2007
- 馬渕和夫『日本韻学史の研究 III』日本学術振興会 1962
- 前登志夫, 永島行善著『観心寺』(古寺巡礼西国 2) 淡交社 1981
- 三浦康広『慈雲尊者の生涯』「慈雲尊者の師と弟子たち」大法輪閣 2004
- 三浦康広『慈雲尊者 人と芸術』二玄社 1980
- 山尾弘雄「再考慈雲尊者年譜と略伝」『国立弓削商船高等専門学校紀要』
- 創刊号 1979 pp.120-113
- 第2号 1980 pp.182-175
- 第3号 1981 pp.220-212
- 第4号 1982 pp.194-187
- 渡辺章悟編『金剛般若経の研究』山喜房佛書林 2009
- 渡辺章悟編『金剛般若経の梵語資料集成』山喜房佛書林 2009
- 渡辺章悟著『般若心経 テクスト 思想 文化』大法輪閣 2009
- Max Müller "Buddhist texts from Japan" Anecdota Oxoniensia, Aryan series vol.1, part.1, Oxford, Clarendon Press, 1881.
- Paul HARRISON "Experimental core samples of Chinese translations of two Buddhist Sūtra analysed in the light of recent Sanskrit manuscript discoveries " Journal of the International Association of Buddhist Studies vol.31, No.1-2, 2008/2010.

略号一覧

【大正第 卷】 と略し、巻数を表示する。

大正新脩大蔵経刊行会『大正新脩大蔵経』

【日本韻学史の研究 Ⅲ】

馬渕和夫『日本韻学史の研究 Ⅲ』日本学術振興会 1962

【人名辞典 法蔵館】

日本仏教人名辞典編纂委員会編『日本仏教人名辞典』法蔵館 1992

【兵庫の地名】

日本歴史地名大系 第29巻Ⅱ 兵庫県の地名 平凡社 1999

【長谷寶秀全集 4 巻】

長谷寶秀 種智院大学密教資料研究所編『長谷寶秀全集』第4巻 法蔵館 1997

【慈雲尊者全集 巻】と略し、巻数を表示する。

長谷寶秀編『慈雲尊者全集』再版 首巻 - 第17巻 思文閣出版 1974-1977

【梵字貴重資料集成】

梵字貴重資料刊行会『梵字貴重資料集成 解説編』東京美術 1975

【密教大辞典】

密教辞典編纂会編『密教大辞典』法蔵館 1983

【日本佛家人名辞書】

鷲尾順敬編纂『日本佛家人名辞書 増訂』東京美術 1973

【Lokesh Chandra】

Lokesh Chandra "Sanskrit Manuscripts from Japan" śata-piṭaka Series Vol.94.1972

【岡村 2004】

岡村圭真『慈雲尊者の生涯』「慈雲尊者の生涯」大法輪閣 2004

【木南 1980】

木南卓一著『人となる道』三密堂書店 1980

【藤田 阿弥陀経】

藤田宏達著『阿弥陀経講究』真宗大谷派宗務所出版部 2001

【藤田 浄土三部経】

藤田宏達著『浄土三部経の研究』岩波書店 2007

Max Müller (1881)

Max Müller "Buddhist texts from Japan" Anecdota Oxoniensia, Aryan series vol.1, part.1,
Oxford, Clarendon Press, 1881.

Paul HARRISON (2008/2010)

Paul HARRISON "Experimental core samples of Chinese translations of two Buddhist Sūtra
sanalysed in the light of recent Sanskrit manuscript discoveries " Journal of the Internationa
Association of Buddhist Studies vol.31, No.1-2, 2008/2010.

『梵学津梁』の調査と研究

資料編

佛教大学大学院 文学研究科 仏教学専攻

奥風栄弘

2018

資料編の概略	1
大阪府立中之島図書館蔵『梵学津梁總目』「附願海和尚書志」	3
本詮 比較表 1	4
本詮 比較表 2	5
本詮 比較表 3	6
本詮 比較表 4	7
末詮 比較表 1	8
末詮 比較表 2	9
末詮 比較表 3	10
通詮 比較表 1	11
通詮 比較表 2	12
別詮 比較表 1	13
略詮 比較表 1	14
廣詮 比較表 1	15
雜詮 比較表 1	16
雜録など 比較表 1	17
雜録など 比較表 2	18
大阪府立中之島図書館所蔵 『阿又羅帖』の法隆寺貝葉より	19
大阪府立中之島図書館所蔵 『阿又羅帖』の高貴寺貝葉より	19
大阪府立中之島図書館所蔵 『阿又羅帖』の清涼寺貝葉より	20
大阪府豊中市養照寺蔵 鳳潭の『大藏経龕記』	21
三康図書館所蔵本	22

資料編の概略

第2章 目録より見た『梵学津梁』について

第1節 高貴寺以外の『梵学津梁』目録について

①『梵学津梁總目』「附願海和尚書志」京都帝国大学図書館蔵分 1926年 複製刊行

- 1)『梵学津梁總目 草本』
- 2)『梵学津梁目録 本詮總目』

願海和尚書の所持していた目録の写真資料として載せておいた。注目すべきところは『梵学津梁目録 本詮總目』は本詮だけだが⑧(0458)『梵学津梁 総目 雑詮之一』と巻数と枝番、經典名が非常に近い目録である。この資料に使われたものは、大阪府立中之島図書館の蔵書である。旧京都帝国大学図書館蔵分の複製であり、長谷寶秀師が校訂したものである。龍谷大学図書館も所蔵があり、本文になる手記部分の「附願海和尚書志」は、願海が文字上に点を打って、横に訂正を書いている。京都大学図書館所蔵も大槻信氏の論文より、同じ方法で訂正されているようである。大阪府立中之島図書館所蔵分は、長谷寶秀師が訂正部分を反映して、修正した校訂本となる。

第2章 目録より見た『梵学津梁』について

第3章 『梵学津梁』の現状について

第2章と第3章に関連する資料として、以下の4種類目録の比較表を作成した。

- 1)①(0000)『慈雲尊者遺芳総目録・地』
- 2)②(0401)『梵学津梁總目 草本』
- 3)⑧(0458)『梵学津梁 総目 雑詮之一』
- 4)高貴寺 DVD

諦了師の目録、慈雲の目録、慈雲が『梵学津梁』編纂の指針としたと思われる詳しい目録と高貴寺 DVD と慈雲の目録を対照したものである。これによって『梵学津梁』の全体像が判り、現在に高貴寺に残っている梵写本なども把握できる。慈雲の目録の②(0401)『梵学津梁總目 草本』は、高貴寺以外に流通している目録と類似している。

第3章 『梵学津梁』の現状について

第1項 本詮について

この項では、本詮では貝葉が記載されている。大阪府立中之島図書館蔵の『阿叉羅帖』より、参考として法隆寺貝葉 高貴寺貝葉 洛西清涼寺貝葉 の3点を載せている。

第6章 『梵学津梁』の梵文『普賢行願讚』について

この章では、高貴寺に所蔵する2本の写本と海輪と鳳潭の関連を述べた。海輪に関する梵文『普賢行願讚』は、以下の2本となる。真宗僧侶の海輪が、梵文『普賢行願讚』を写したかと鳳潭の弟子覚州の写本をなぜ写したかが、疑問であった。海輪と鳳潭の関連をしらべてみたら、その接点があった。

③ (0007) 『普賢行願讚』異本ノ三 鳳潭の弟子覚州所持本で、海輪が写した。

④ (0008) 『普賢行願讚』異本ノ四 海輪の所持本

鳳潭が享保11年(1726)黄鐘月(11月)に海輪がのちに住職となる養照寺に滞在し、経堂の書物を研究し『養照浄寺大蔵経龕記』を残した。その題目と奥書部分の写真である。養照寺の丸川住職より、写真資料を提供していただいた。

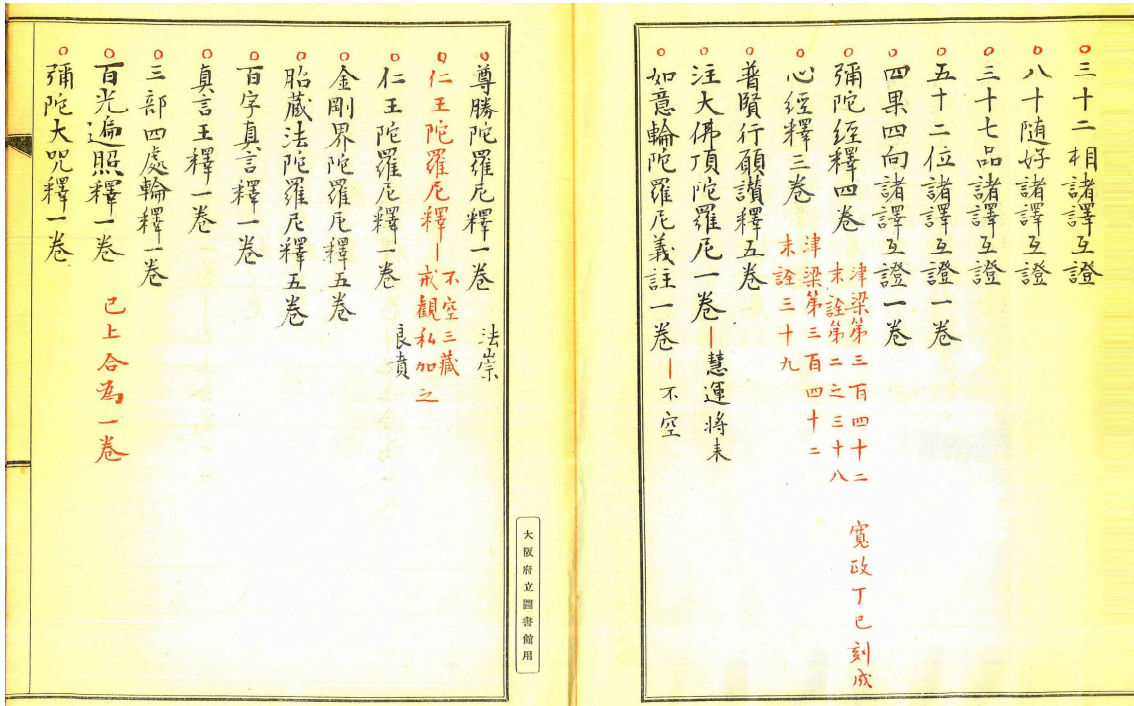
第7章 『梵学津梁』の梵文『金剛般若経』について

第4項 高貴寺以外での梵文『金剛般若経』について

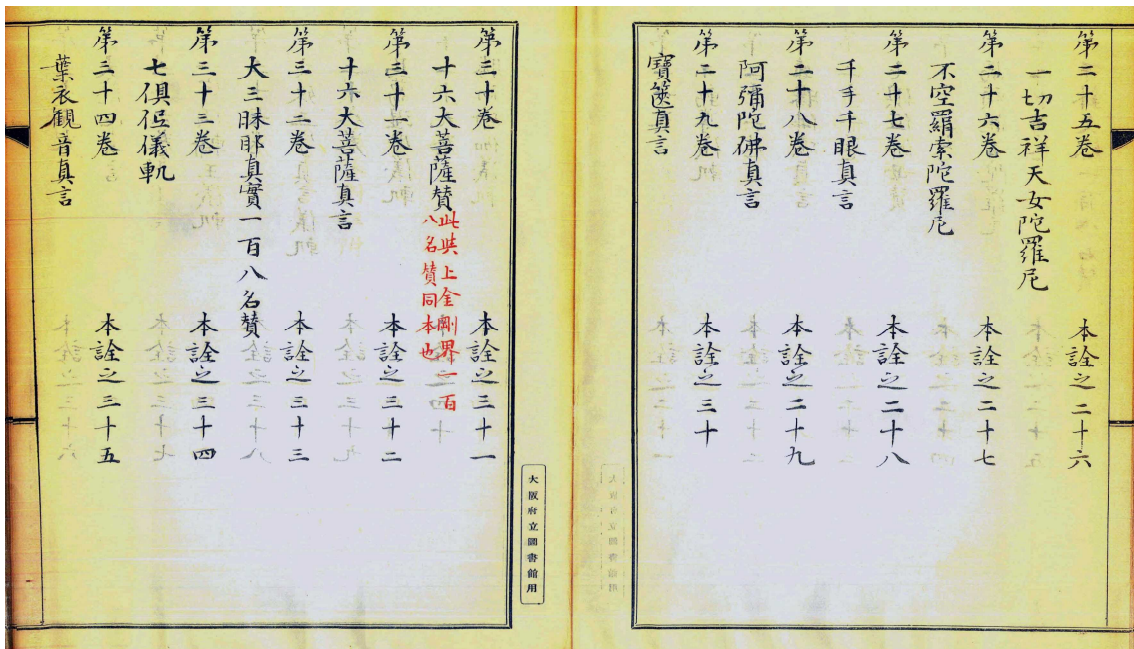
この項では、筆者が黒田真洞師が書いたと結論に至った『金剛般若経』梵写本である。この写本は、東京の三康図書館(椎尾文庫)の所蔵本である。形態から高貴寺所蔵の智幢が書いた(0159)梵文金剛般若経諸譯互證 初稿 上(0160)梵文金剛般若経諸譯互證 初稿 下が、原本になったと思われる。参考のため、上段は三康図書館所蔵本、下段は(0159)梵文金剛般若経諸譯互證 初稿 上を載せておいた。

大阪府立中之島図書館蔵『梵学津梁總目』「附願海和尚書志」

『梵学津梁總目 草本』



『梵学津梁目錄 本詮總目』



上の『梵学津梁總目 草本』は、慧友が慈雲より譲り受けたものである。

下の『梵学津梁目錄 本詮總目』の卷数 枝番 經典名が高貴寺所蔵のものによく合致する。

本誌 比較表 3

本誌比較表 3	『梵学通覧』 總目 雜論之一』 (0458)	『總覽著者書目録』 地』 (0000) 終了	高貴寺DVD 以下余白	『梵学通覧』 總目 雜本』 (0401)
第一卷	阿底如來真言七首	本58 第九、本誌一之六	高貴寺DVD	『梵学通覧』 總目 雜本』 (0401)
第一卷	阿底如來真言八首	本59 第九、本誌一之六	以下余白	
第一卷	智陀如來密地真言	本60 第九、本誌一之六		
第一卷	大集經密地真言	本61 第九、本誌一之六		
第一卷	大集經密地真言	本62 第九、本誌一之六		
第一卷	無量壽心陀羅尼	本63 第九、本誌一之六		
第一卷	無量壽心陀羅尼	本64 第九、本誌一之六		
第一卷	定光佛真言	本65 第九、本誌一之六		
第一卷	定光佛真言	本66 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本67 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本68 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本69 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本70 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本71 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本72 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本73 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本74 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本75 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本76 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本77 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本78 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本79 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本80 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本81 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本82 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本83 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本84 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本85 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本86 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本87 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本88 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本89 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本90 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本91 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本92 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本93 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本94 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本95 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本96 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本97 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本98 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本99 第九、本誌一之六		
第一卷	諸部名目	本100 第九、本誌一之六		

本詮 比較表 4

本詮比較表 4	『梵學建梁總目 雜語之一』(0458)	『慈雲尊者遺芳集目錄・地』(0000) 語了	常貴寺DVD	『梵學建梁總目 草本』(0401)
第一百二十一	本詮之百五十五 愛敬明王			
第一百二十二	本詮之百五十六 大勝金剛			
第一百二十三	本詮之百五十七 大輪金剛			
第一百二十四	本詮之百五十八 本詮之百五十九 本詮之百六十 本詮之百六十一 本詮之百六十二 本詮之百六十三 本詮之百六十四 本詮之百六十五 本詮之百六十六 本詮之百六十七 本詮之百六十八 本詮之百六十九			
第一百二十五	本詮之百七十 根本經一切有部奈有中呪			
第一百二十六	本詮之百七十一 大藏經中呪			
第一百二十七	本詮之百七十二 阿含部呪			
第一百二十八	本詮之百七十三 涅槃經中呪			
第一百二十九	本詮之百七十四 攝護童子經呪			
第一百三十至三十九	本詮之百七十五 陀羅尼集			

未證 比較表 3

未證比較表 3 『梵學滙編 總目 雜論之一』 (0458)	『慈雲尊者遺芳論目錄・地』 (0000) 終了	書畫音 D.V.D. ・七卷経 ・大日経 第三悉曇出現品 ・阿闍梨不淨並稱讃句義 全 ・四陀羅尼陀羅尼 ・金剛般若經講釈互證 序 ・梵文金剛般若經講釈互證 初篇上 ・梵文金剛般若經講釈互證 初篇下 ・金剛般若經講釈互證 序 ・梵文金剛般若經講釈互證 初篇上 ・梵文金剛般若經講釈互證 初篇下 ・梵文金剛般若經講釈互證 二 ・梵文金剛般若經講釈互證 三 ・梵文金剛般若經講釈互證 四	『梵學滙編總目 草木』 (0401)

通詮 比較表 2

通詮比較表 2	『藥學通詮 總目 雜詮之一』(0458)	『慈雲尊者遺芳總目錄・地』(0000) 諸了	寄費寺 DVD	『藥學通詮總目 草本』(0401)
佛五百四十八至五十七	雜詮之一 雜詮之一	諸了	(0227) 寄費寺 DVD	
通詮之三十三	佛五百四十八至五十七		(0228) 寄費寺 DVD	
五十字門一釋五卷	佛五百四十八至五十七		(0229) 寄費寺 DVD	
五十四門圖字釋五卷	佛五百四十八至五十七		(0230) 寄費寺 DVD	
頭銜書加	佛五百四十八至五十七		(0231) 寄費寺 DVD	
通詮之一	佛五百四十八至五十七		(0232) 寄費寺 DVD	
通詮之二	佛五百四十八至五十七		(0233) 寄費寺 DVD	
通詮之三	佛五百四十八至五十七		(0234) 寄費寺 DVD	
佛字悉曇書 一卷	佛五百四十八至五十七		(0235) 寄費寺 DVD	
南天竺悉曇書 一卷	佛五百四十八至五十七		(0236) 寄費寺 DVD	
佛字悉曇書 一卷	佛五百四十八至五十七		(0237) 寄費寺 DVD	
佛字悉曇書 一卷	佛五百四十八至五十七		(0238) 寄費寺 DVD	
佛字悉曇書 一卷	佛五百四十八至五十七		(0239) 寄費寺 DVD	
佛字悉曇書 一卷	佛五百四十八至五十七		(0240) 寄費寺 DVD	

別註 比較表 1

別註比較表 1	『梵學津梁』目録 雑註之一』(0458)	『梵學津梁』總目 雑註之二』(0459)	『梵學津梁』總目 雑註之三』(0460)
第五百四十九 別註之一 唐紀文字	『梵學津梁』總目 雑註之一』(0458)	『梵學津梁』總目 雑註之二』(0459)	『梵學津梁』總目 雑註之三』(0460)
第五百五十 別註之二 梵語雜名	『梵學津梁』總目 雑註之二』(0459)	『梵學津梁』總目 雑註之三』(0460)	『梵學津梁』總目 雑註之四』(0461)
第五百五十一 別註之三 梵語千字文	『梵學津梁』總目 雑註之三』(0460)	『梵學津梁』總目 雑註之四』(0461)	『梵學津梁』總目 雑註之五』(0462)
第五百五十二 別註之四 翻梵語集義淨 八卷	『梵學津梁』總目 雑註之四』(0461)	『梵學津梁』總目 雑註之五』(0462)	『梵學津梁』總目 雑註之六』(0463)
第五百 辨異義 十卷 丹書義 八卷 要決 字記釋林記	『梵學津梁』總目 雑註之五』(0462)	『梵學津梁』總目 雑註之六』(0463)	『梵學津梁』總目 雑註之七』(0464)
別の題所に別註として、走り書きで記載されたもの	『梵學津梁』總目 雑註之六』(0463)	『梵學津梁』總目 雑註之七』(0464)	『梵學津梁』總目 雑註之八』(0465)
唐梵文字一巻	『梵學津梁』總目 雑註之七』(0464)	『梵學津梁』總目 雑註之八』(0465)	『梵學津梁』總目 雑註之九』(0466)
千字文一	『梵學津梁』總目 雑註之八』(0465)	『梵學津梁』總目 雑註之九』(0466)	『梵學津梁』總目 雑註之十』(0467)
梵語雜名 十	『梵學津梁』總目 雑註之九』(0466)	『梵學津梁』總目 雑註之十』(0467)	『梵學津梁』總目 雑註之十一』(0468)
翻梵語 十	『梵學津梁』總目 雑註之十』(0467)	『梵學津梁』總目 雑註之十一』(0468)	『梵學津梁』總目 雑註之十二』(0469)
小尼迦茶書 七	『梵學津梁』總目 雑註之十一』(0468)	『梵學津梁』總目 雑註之十二』(0469)	『梵學津梁』總目 雑註之十三』(0470)
小陀路 二	『梵學津梁』總目 雑註之十二』(0469)	『梵學津梁』總目 雑註之十三』(0470)	『梵學津梁』總目 雑註之十四』(0471)
此字義 一	『梵學津梁』總目 雑註之十三』(0470)	『梵學津梁』總目 雑註之十四』(0471)	『梵學津梁』總目 雑註之十五』(0472)
疏摩摩子義 九	『梵學津梁』總目 雑註之十四』(0471)	『梵學津梁』總目 雑註之十五』(0472)	『梵學津梁』總目 雑註之十六』(0473)
千字陀羅尼守護神名釋 九	『梵學津梁』總目 雑註之十五』(0472)	『梵學津梁』總目 雑註之十六』(0473)	『梵學津梁』總目 雑註之十七』(0474)
雜書種子用所一	『梵學津梁』總目 雑註之十六』(0473)	『梵學津梁』總目 雑註之十七』(0474)	『梵學津梁』總目 雑註之十八』(0475)
相通用 三	『梵學津梁』總目 雑註之十七』(0474)	『梵學津梁』總目 雑註之十八』(0475)	『梵學津梁』總目 雑註之十九』(0476)
相通用 二	『梵學津梁』總目 雑註之十八』(0475)	『梵學津梁』總目 雑註之十九』(0476)	『梵學津梁』總目 雑註之二十』(0477)
辨異義 十	『梵學津梁』總目 雑註之十九』(0476)	『梵學津梁』總目 雑註之二十』(0477)	『梵學津梁』總目 雑註之二十一』(0478)
人	『梵學津梁』總目 雑註之二十』(0477)	『梵學津梁』總目 雑註之二十一』(0478)	『梵學津梁』總目 雑註之二十二』(0479)
自梵文書ハ通記ニ有ハシ	『梵學津梁』總目 雑註之二十一』(0478)	『梵學津梁』總目 雑註之二十二』(0479)	『梵學津梁』總目 雑註之二十三』(0480)
翻教正師長路例 十	『梵學津梁』總目 雑註之二十二』(0479)	『梵學津梁』總目 雑註之二十三』(0480)	『梵學津梁』總目 雑註之二十四』(0481)
相承系譜 二	『梵學津梁』總目 雑註之二十三』(0480)	『梵學津梁』總目 雑註之二十四』(0481)	『梵學津梁』總目 雑註之二十五』(0482)
攝合例 三	『梵學津梁』總目 雑註之二十四』(0481)	『梵學津梁』總目 雑註之二十五』(0482)	『梵學津梁』總目 雑註之二十六』(0483)
雜例 十二	『梵學津梁』總目 雑註之二十五』(0482)	『梵學津梁』總目 雑註之二十六』(0483)	『梵學津梁』總目 雑註之二十七』(0484)
又ハ厘屋敷例〇云	『梵學津梁』總目 雑註之二十六』(0483)	『梵學津梁』總目 雑註之二十七』(0484)	『梵學津梁』總目 雑註之二十八』(0485)
總八十五卷	『梵學津梁』總目 雑註之二十七』(0484)	『梵學津梁』總目 雑註之二十八』(0485)	『梵學津梁』總目 雑註之二十九』(0486)
五百九、七、十一、十二、八	『梵學津梁』總目 雑註之二十八』(0485)	『梵學津梁』總目 雑註之二十九』(0486)	『梵學津梁』總目 雑註之三十』(0487)
五百九、四、六、七、八	『梵學津梁』總目 雑註之二十九』(0486)	『梵學津梁』總目 雑註之三十』(0487)	『梵學津梁』總目 雑註之三十一』(0488)
五百九、三、三、七、八、九、五	『梵學津梁』總目 雑註之三十』(0487)	『梵學津梁』總目 雑註之三十一』(0488)	『梵學津梁』總目 雑註之三十二』(0489)
三百、一、二、三、四、五、六、七	『梵學津梁』總目 雑註之三十一』(0488)	『梵學津梁』總目 雑註之三十二』(0489)	『梵學津梁』總目 雑註之三十三』(0490)

廣註 比較表 1

廣註比較表 1	『聖学津梁 總目 雜註之一』 (0438)	『慈雲尊者遺著總目録・地』 (0000) 語了 瓜註-1 大元大藏部同治錄 瓜註-2 尊茶羅尊位現因鈔 胎 瓜註-3 瓜註第二十一 尊茶羅大鈔 胎 尊茶羅大鈔 胎 尊茶羅尊位現因鈔私 三冊 胎 尊茶羅尊位現因鈔私 六冊 瓜註-4 聖学津梁 卅六種說鬼名 瓜註-5 三十二種鬼名 瓜註-6 瓜註 法相編 瓜註第六 瓜註-7 聖学津梁 瓜註第六 瓜註-8 瓜註 英文大例	高貴寺DVD	高貴寺DVD (0336) 大元大藏部同治錄 (0337) 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔 (0338) 尊茶羅現因鈔 金剛界 尊茶羅尊位現因鈔 (0339) 金剛界 尊茶羅大鈔 一 (0340) 金剛界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷一 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷中 (二) (0341) 金剛界 尊茶羅大鈔 三 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三 (0342) 金剛界 (胎藏界) 尊茶羅大鈔 四 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷一 (0343) 金剛界 (胎藏界) 尊茶羅大鈔 五 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二 (0344) 金剛界 尊茶羅大鈔 六 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三 (0345) 金剛界 (胎藏界) 尊茶羅大鈔 七 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四 (0346) 金剛界 (胎藏界) 尊茶羅大鈔 八 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷五 (0347) 金剛界 (胎藏界) 尊茶羅大鈔 九 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷六 (0348) 聖学津梁 三十六種說鬼名 三十六種說鬼 (0349) 聖学津梁 瓜註 三十六種說鬼 (0350) 瓜註 法相編 瓜註第六 (0351) 瓜註 英文大例 英文大例第六 (0352) 聖学津梁 瓜註 天錄部 全 胎藏界 尊茶羅大鈔 四 胎藏界 尊茶羅大鈔 五 胎藏界 尊茶羅大鈔 六 胎藏界 尊茶羅大鈔 七 胎藏界 尊茶羅大鈔 八 胎藏界 尊茶羅大鈔 九	『聖学津梁總目 基本』 (0401) 1. 佛經序 2巻 2. 佛別序 3巻 3. 法藏雜目 50巻 4. 法相差別 30巻 5. 函原 5巻 6. 玉象 2巻 7. 不説 3巻 8. 人説 3巻 9. 阿修羅等八部 2巻 10. 諸帝生 2巻 11. 諸鬼神 1巻 12. 諸地獄 1巻 13. 人事 1巻 14. 香菓 1巻 15. 時令 2巻 16. 宝類 3巻 17. 草木 3巻 18. 道具 20巻 19. 大日經序 12巻 20. 金華經二本 14巻 21. 經類位 30巻 22. 胎藏曼荼羅註不全記 23. 金剛界 尊茶羅別記 10巻 24. 蓮像鈔 10巻 25. 治遺圖像 10巻 26. 蓮經十七巻 尊茶羅 27. 蓮經序 尊茶羅 28. 金剛界 尊茶羅鈔 10巻 29. 胎藏法要茶羅鈔 10巻			
			<p>(0342) 胎藏界 尊茶羅大鈔 四 (0343) 胎藏界 尊茶羅大鈔 五 (0344) 胎藏界 尊茶羅大鈔 六 (0345) 胎藏界 尊茶羅大鈔 七 (0346) 胎藏界 尊茶羅大鈔 八 (0347) 胎藏界 尊茶羅大鈔 九</p> <p>以下の修正をおこなう。 胎藏界 尊茶羅大鈔 四 胎藏界 尊茶羅大鈔 五 胎藏界 尊茶羅大鈔 六 胎藏界 尊茶羅大鈔 七 胎藏界 尊茶羅大鈔 八 胎藏界 尊茶羅大鈔 九</p>	<p>胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷一 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷中 (二) 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷五 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷六 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷七 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷八 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷九 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷十 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷十一 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷十二 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷十三 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷十四 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷十五 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷十六 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷十七 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷十八 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷十九 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二十 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二十一 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二十二 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二十三 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二十四 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二十五 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二十六 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二十七 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二十八 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷二十九 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三十 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三十一 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三十二 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三十三 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三十四 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三十五 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三十六 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三十七 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三十八 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷三十九 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四十 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四十一 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四十二 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四十三 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四十四 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四十五 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四十六 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四十七 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四十八 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷四十九 胎藏界 尊茶羅尊位現因鈔私 卷五十</p>				

雜論 比較表 1

雜論比較表 1	『梵學源流 總目 雜註之一』(0458)	『慈雲尊者遺著總目録・地』(0000) 諸了	高貴寺DVD	『梵學源流總目 草本』(0401)
第九百一十九 慈雲真記 一卷 禪林寺宗範記 第九百二十 翻釋名義集 七卷 宗徒慈覺身修寺普澤大師法藏編 第九百二十一 慈雲真記 一卷 同課 第九百二十二 慈雲真記 一卷 同課 第九百二十三 慈雲真記 一卷 同課 第九百二十四 慈雲真記 一卷 同課 第九百二十五 慈雲真記 一卷 同課 第九百二十六 慈雲真記 一卷 同課 第九百二十七 慈雲真記 一卷 同課 第九百二十八 慈雲真記 一卷 同課 第九百二十九 慈雲真記 一卷 同課 第九百三十 慈雲真記 一卷 同課 第九百三十一 慈雲真記 一卷 同課 第九百三十二 慈雲真記 一卷 同課 第九百三十三 慈雲真記 一卷 同課 第九百三十四 慈雲真記 一卷 同課 第九百三十五 慈雲真記 一卷 同課 第九百三十六 慈雲真記 一卷 同課 第九百三十七 慈雲真記 一卷 同課 第九百三十八 慈雲真記 一卷 同課 第九百三十九 慈雲真記 一卷 同課 第九百四十 慈雲真記 一卷 同課 第九百四十一 慈雲真記 一卷 同課 第九百四十二 慈雲真記 一卷 同課 第九百四十三 慈雲真記 一卷 同課 第九百四十四 慈雲真記 一卷 同課 第九百四十五 慈雲真記 一卷 同課 第九百四十六 慈雲真記 一卷 同課 第九百四十七 慈雲真記 一卷 同課 第九百四十八 慈雲真記 一卷 同課 第九百四十九 慈雲真記 一卷 同課 第九百五十 慈雲真記 一卷 同課 第九百五十一 慈雲真記 一卷 同課 第九百五十二 慈雲真記 一卷 同課 第九百五十三 慈雲真記 一卷 同課 第九百五十四 慈雲真記 一卷 同課 第九百五十五 慈雲真記 一卷 同課 第九百五十六 慈雲真記 一卷 同課 第九百五十七 慈雲真記 一卷 同課 第九百五十八 慈雲真記 一卷 同課 第九百五十九 慈雲真記 一卷 同課 第九百六十 慈雲真記 一卷 同課 第九百六十一 慈雲真記 一卷 同課 第九百六十二 慈雲真記 一卷 同課 第九百六十三 慈雲真記 一卷 同課 第九百六十四 慈雲真記 一卷 同課 第九百六十五 慈雲真記 一卷 同課 第九百六十六 慈雲真記 一卷 同課 第九百六十七 慈雲真記 一卷 同課 第九百六十八 慈雲真記 一卷 同課 第九百六十九 慈雲真記 一卷 同課 第九百七十 慈雲真記 一卷 同課 第九百七十一 慈雲真記 一卷 同課 第九百七十二 慈雲真記 一卷 同課 第九百七十三 慈雲真記 一卷 同課 第九百七十四 慈雲真記 一卷 同課 第九百七十五 慈雲真記 一卷 同課 第九百七十六 慈雲真記 一卷 同課 第九百七十七 慈雲真記 一卷 同課 第九百七十八 慈雲真記 一卷 同課 第九百七十九 慈雲真記 一卷 同課 第九百八十 慈雲真記 一卷 同課 第九百八十一 慈雲真記 一卷 同課 第九百八十二 慈雲真記 一卷 同課 第九百八十三 慈雲真記 一卷 同課 第九百八十四 慈雲真記 一卷 同課 第九百八十五 慈雲真記 一卷 同課 第九百八十六 慈雲真記 一卷 同課 第九百八十七 慈雲真記 一卷 同課 第九百八十八 慈雲真記 一卷 同課 第九百八十九 慈雲真記 一卷 同課 第九百九十 慈雲真記 一卷 同課 第九百九十一 慈雲真記 一卷 同課 第九百九十二 慈雲真記 一卷 同課 第九百九十三 慈雲真記 一卷 同課 第九百九十四 慈雲真記 一卷 同課 第九百九十五 慈雲真記 一卷 同課 第九百九十六 慈雲真記 一卷 同課 第九百九十七 慈雲真記 一卷 同課 第九百九十八 慈雲真記 一卷 同課 第九百九十九 慈雲真記 一卷 同課 第一千 慈雲真記 一卷 同課	『慈雲尊者遺著總目録・地』(0000) 諸了 雜註-1. 雜註第七之三 慈雲真記 卷第九百卅六 慈雲真記 卷第九百卅七 慈雲真記 卷第九百卅八 慈雲真記 卷第九百卅九 慈雲真記 卷第九百四十 慈雲真記 卷第九百四十一 慈雲真記 卷第九百四十二 慈雲真記 卷第九百四十三 慈雲真記 卷第九百四十四 慈雲真記 卷第九百四十五 慈雲真記 卷第九百四十六 慈雲真記 卷第九百四十七 慈雲真記 卷第九百四十八 慈雲真記 卷第九百四十九 慈雲真記 卷第九百五十 慈雲真記 卷第九百五十一 慈雲真記 卷第九百五十二 慈雲真記 卷第九百五十三 慈雲真記 卷第九百五十四 慈雲真記 卷第九百五十五 慈雲真記 卷第九百五十六 慈雲真記 卷第九百五十七 慈雲真記 卷第九百五十八 慈雲真記 卷第九百五十九 慈雲真記 卷第九百六十 慈雲真記 卷第九百六十一 慈雲真記 卷第九百六十二 慈雲真記 卷第九百六十三 慈雲真記 卷第九百六十四 慈雲真記 卷第九百六十五 慈雲真記 卷第九百六十六 慈雲真記 卷第九百六十七 慈雲真記 卷第九百六十八 慈雲真記 卷第九百六十九 慈雲真記 卷第九百七十 慈雲真記 卷第九百七十一 慈雲真記 卷第九百七十二 慈雲真記 卷第九百七十三 慈雲真記 卷第九百七十四 慈雲真記 卷第九百七十五 慈雲真記 卷第九百七十六 慈雲真記 卷第九百七十七 慈雲真記 卷第九百七十八 慈雲真記 卷第九百七十九 慈雲真記 卷第九百八十 慈雲真記 卷第九百八十一 慈雲真記 卷第九百八十二 慈雲真記 卷第九百八十三 慈雲真記 卷第九百八十四 慈雲真記 卷第九百八十五 慈雲真記 卷第九百八十六 慈雲真記 卷第九百八十七 慈雲真記 卷第九百八十八 慈雲真記 卷第九百八十九 慈雲真記 卷第九百九十 慈雲真記 卷第九百九十一 慈雲真記 卷第九百九十二 慈雲真記 卷第九百九十三 慈雲真記 卷第九百九十四 慈雲真記 卷第九百九十五 慈雲真記 卷第九百九十六 慈雲真記 卷第九百九十七 慈雲真記 卷第九百九十八 慈雲真記 卷第九百九十九 慈雲真記 第一千 慈雲真記	高貴寺DVD (0353) 一 慈雲真記 (0354) 二 慈雲真記 (0355) 三 慈雲真記 (0356) 四 慈雲真記 (0357) 五 慈雲真記 (0358) 六 慈雲真記 (0359) 七 慈雲真記 (0360) 八 慈雲真記 (0361) シツタン(梵) 三密鈔 上本 (0362) シツタン(梵) 三密鈔 上末 (0363) シツタン(梵) 三密鈔 中本 (0364) シツタン(梵) 三密鈔 中末 (0365) シツタン(梵) 三密鈔 下之上 (0366) シツタン(梵) 三密鈔 下之中 (0367) シツタン(梵) 三密鈔 下之下 (0368) 慈雲真記 十二列 (0369) 慈雲真記 十二列 (0370) 慈雲真記 十二列 (0371) 慈雲真記 十二列 (0372) 慈雲真記 十二列 (0373) 慈雲真記 十二列 (0374) 慈雲真記 十二列 (0375) 慈雲真記 十二列 (0376) 慈雲真記 十二列 (0377) 慈雲真記 十二列 (0378) 慈雲真記 十二列 (0379) 慈雲真記 十二列 (0380) 慈雲真記 十二列 (0381) 慈雲真記 十二列 (0382) 慈雲真記 十二列 (0383) 慈雲真記 十二列 (0384) 慈雲真記 十二列 (0385) 慈雲真記 十二列 (0386) 慈雲真記 十二列 (0387) 慈雲真記 十二列 (0388) 慈雲真記 十二列 (0389) 慈雲真記 十二列 (0390) 慈雲真記 十二列 (0391) 慈雲真記 十二列 (0392) 慈雲真記 十二列 (0393) 慈雲真記 十二列 (0394) 慈雲真記 十二列 (0395) 慈雲真記 十二列 (0396) 慈雲真記 十二列 (0397) 慈雲真記 十二列 (0398) 慈雲真記 十二列 (0399) 慈雲真記 十二列 (0400) 慈雲真記 十二列 (0401) 慈雲真記 十二列 (0402) 慈雲真記 十二列 (0403) 慈雲真記 十二列 (0404) 慈雲真記 十二列 (0405) 慈雲真記 十二列 (0406) 慈雲真記 十二列	『梵學源流總目 草本』(0401) 1. 慈雲真記 2. 慈雲真記 3. 慈雲真記 4. 慈雲真記 5. 慈雲真記 6. 慈雲真記 7. 慈雲真記 8. 慈雲真記 9. 慈雲真記 10. 慈雲真記 11. 慈雲真記 12. 慈雲真記 13. 慈雲真記 14. 慈雲真記 15. 慈雲真記 16. 慈雲真記 17. 慈雲真記 18. 慈雲真記 19. 慈雲真記 20. 慈雲真記 21. 慈雲真記 22. 慈雲真記	

雑録など 比較表 2

<p>雑録など 比較表 2 『梵学雑説 総目 雑録之一』(0458)</p>	<p>『慈雲尊者著 芳林目録・地』(0000) 縮了 雑録-56 家傳 雑記 雑録-57 同本寫(雑録-56) 雑録-58 燕血蒸化苦屬自然師 雑録-59 同本寫(雑録-58) 雑録-60 消息宛名致哀 雑録-61 同本寫(雑録-60) 雑録-62 斷疑</p>	<p>高書寺 DVD 東京国立博物館 貸出分 (0449) 曹賢行願讀本 (0450) 弥陀慈航上 (0451) 弥陀慈航中 (0452) 弥陀慈航下 (0453) 理趣經講義 - 大乗空觀不生真実三摩耶經 (0454) 悉曇十八宮建立切附 (0455) 十八章 雜錄 (0456) 梵学雑説 省要 略録要省 下 (0457) 三教示占 (0458) 梵学雑梁 總目 雜説之一 (0459) 十番の宗統 傳戒列名</p>	<p>『梵学雑説 總目 草木』(0401)</p>
--	---	--	---------------------------

大阪府立中之島図書館所蔵 『阿又羅帖』の法隆寺貝葉より

Handwritten text in Devanagari script, likely a Buddhist sutra or commentary, showing a single column of text.

多羅葉梵文

大和國法隆寺藏者筆也

Handwritten text in Devanagari script, showing a single column of text.

法隆寺貝葉『般若心経』と『尊勝陀羅尼』と言われている。この『阿又羅帖』より複写したものを Ernest Satow が 1881 年に英国へ送った。

大阪府立中之島図書館所蔵 『阿又羅帖』の高貴寺貝葉より

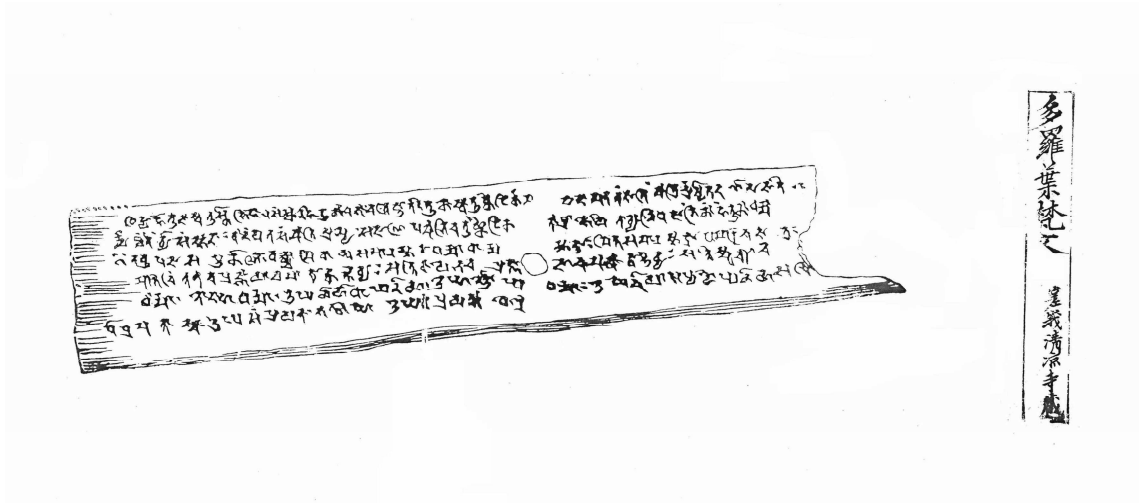
Handwritten text in Devanagari script, showing a single column of text.

多羅葉梵文書内國高貴寺藏

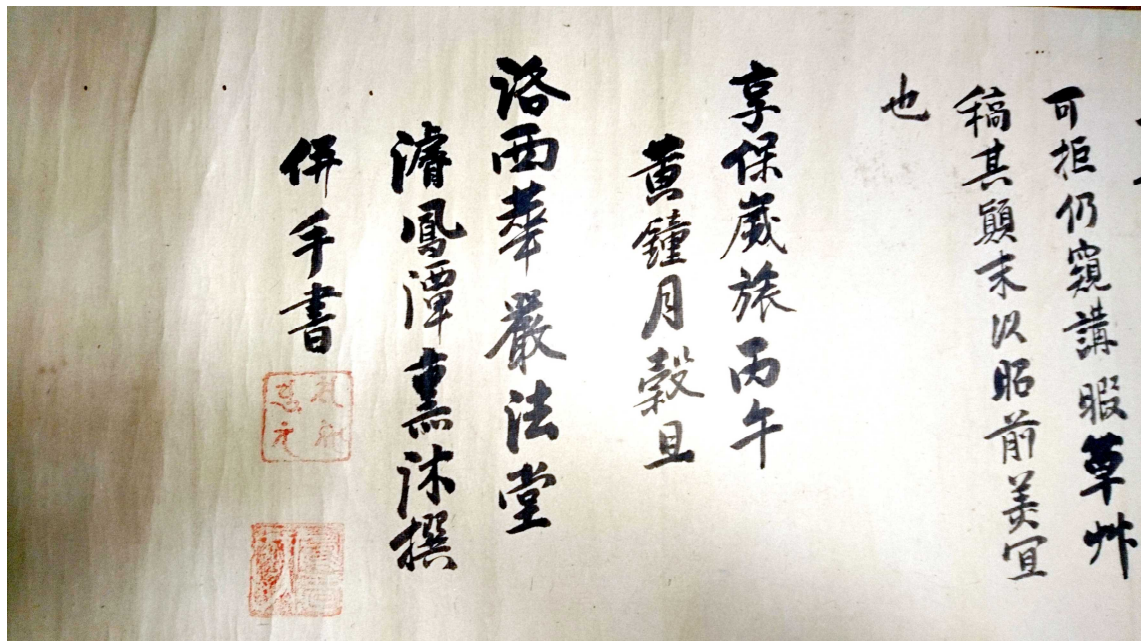
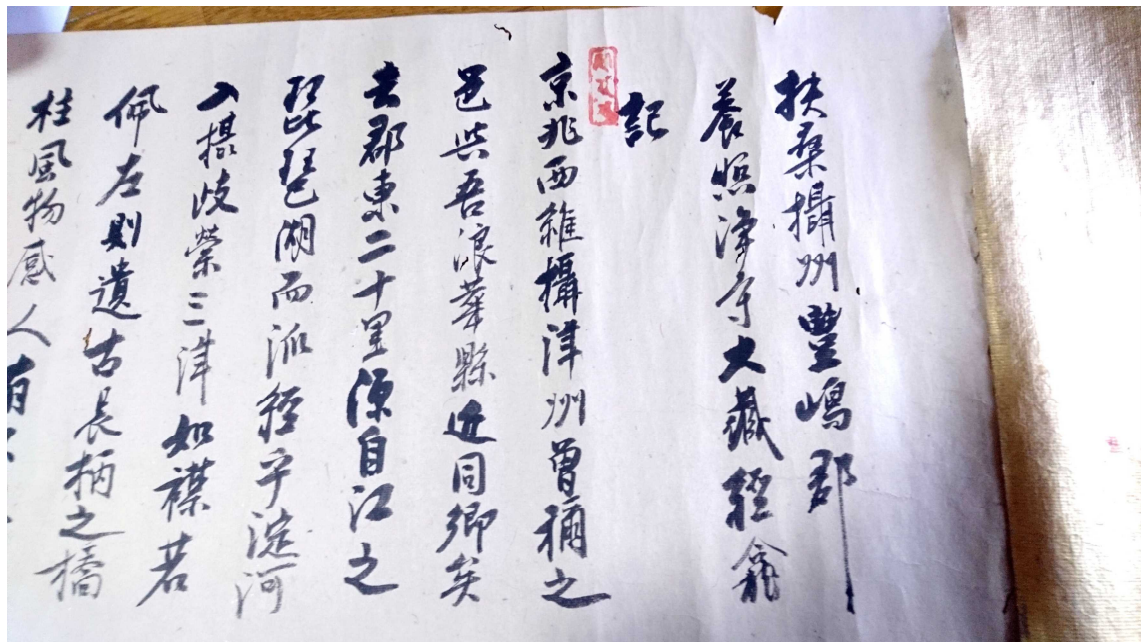
Handwritten text in Devanagari script, showing a single column of text.

高貴寺貝葉 佛教大学の松田和信教授によれば、『有部六足論』のひとつのである『施設論』の一部でチベット訳のみ現存する『世間施設論』と確認されている。貝葉は現在、奈良国立博物館に保管されている。

大阪府立中之島図書館所蔵 『阿又羅帖』の清涼寺貝葉より



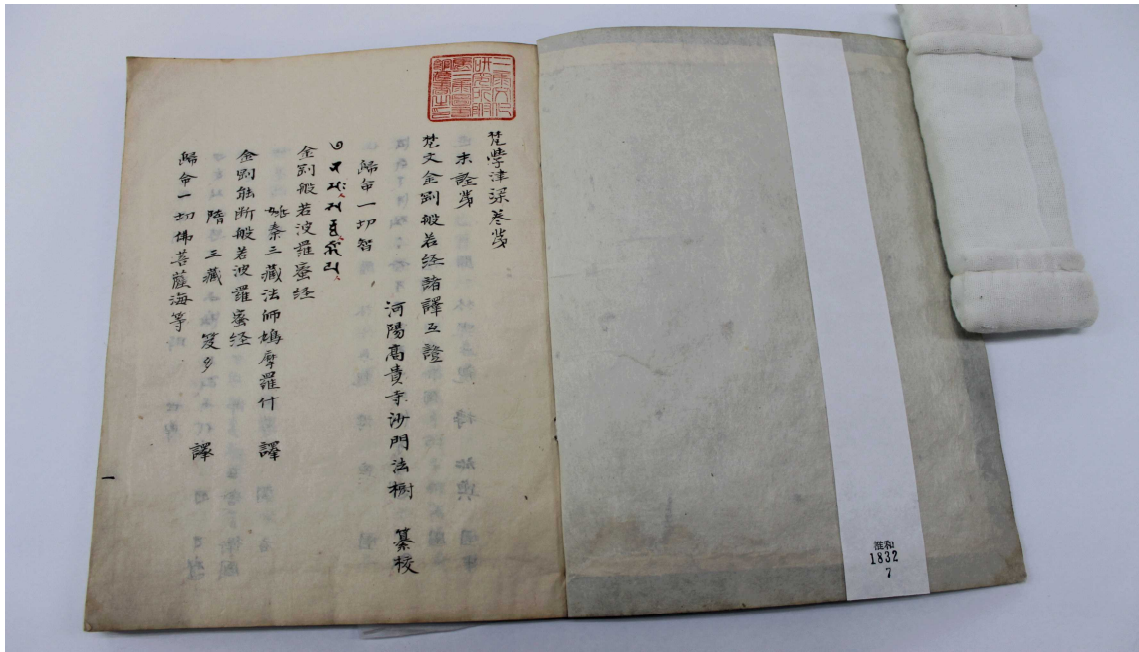
嵯峨清涼寺貝葉（京都市右京区 通称嵯峨釈迦堂）岡教邃氏によれば、『俱舍論』の「随眠品」「智品」に関連するものとしているが、今後の研究結果に委ねる



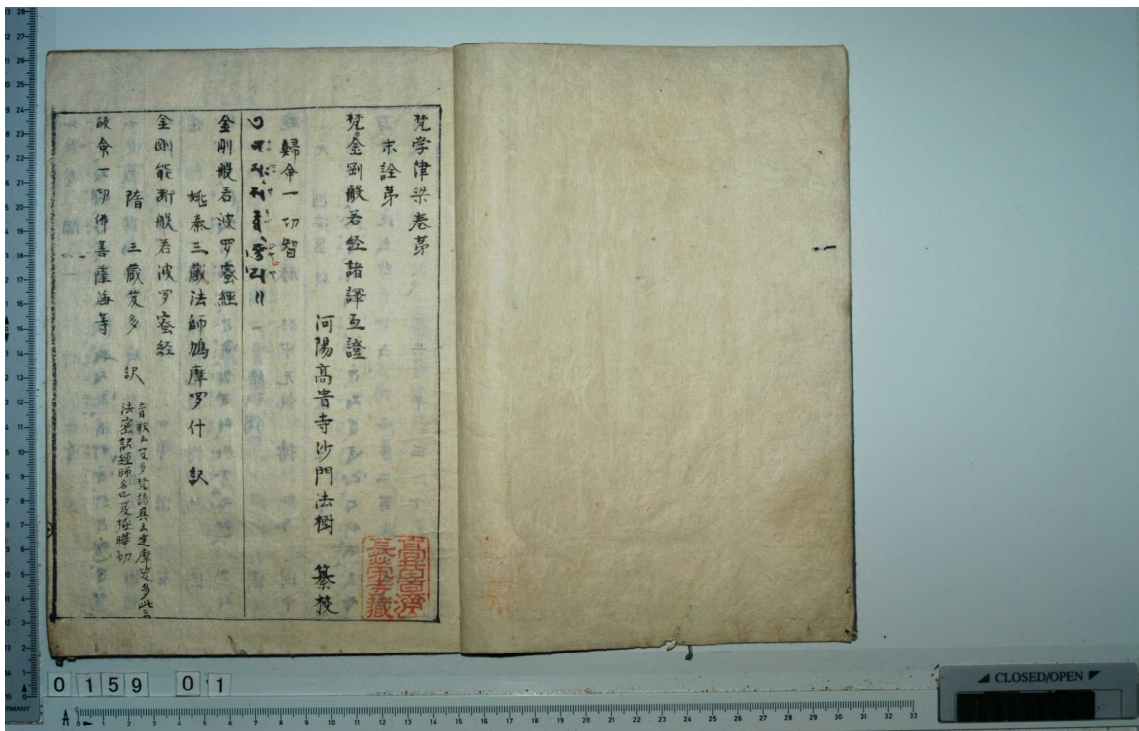
海輪が住職をしていた養照寺に遺っている鳳潭の記録。『大蔵經龕記』となっており、海輪の先代住職の浄山（1691 - 1760）と親交のあった鳳潭が、享保丙午（11年 1726）黄鐘月（11月）に養照寺に滞在し、経堂の書物を研究したといわれる。

三康図書館所蔵本

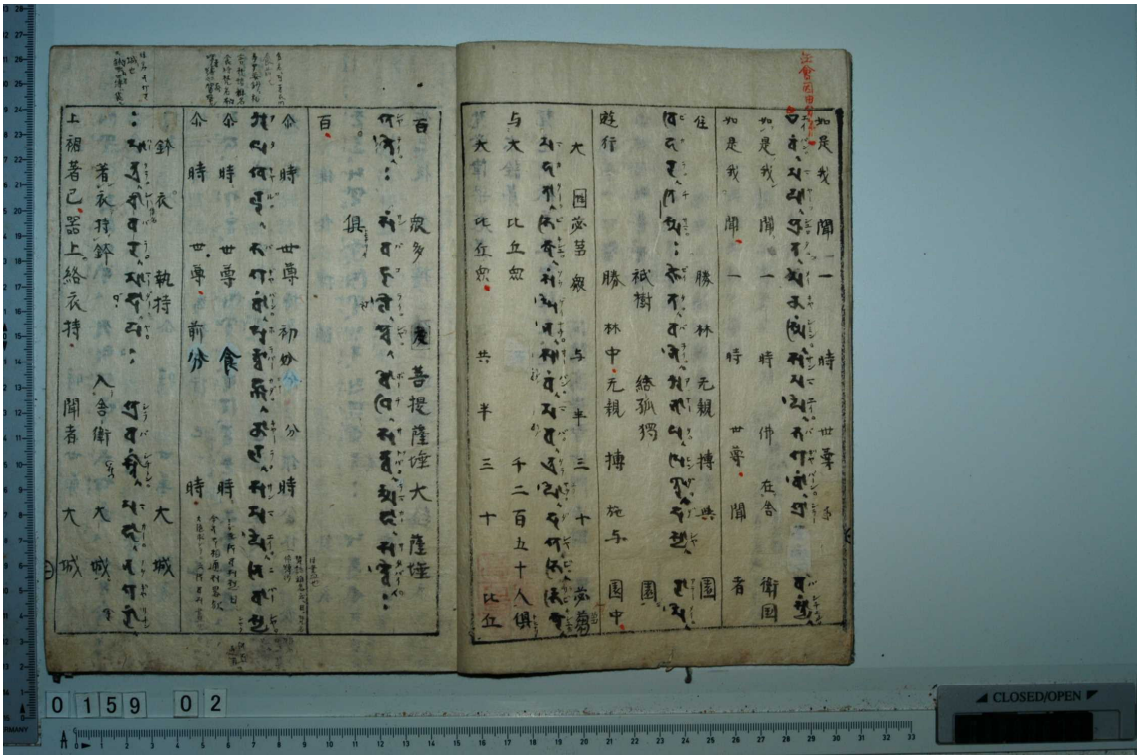
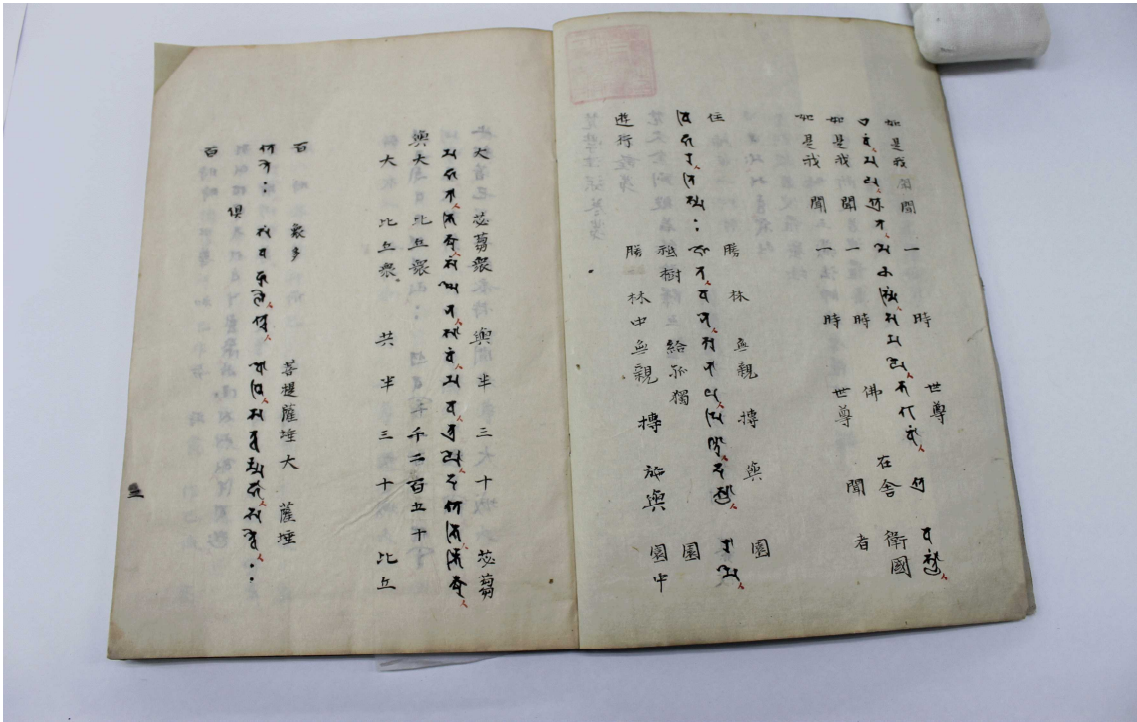
黒田真洞師の写本



(0159) 梵文金剛般若經諸譯互證 初稿 上



黒田真洞師の写本と比べると本註の巻数が同じく未記入となっている。一般に「河州高貴寺」がと書くべきが、同じく「河陽高貴寺」となっている。



右から、単語の訳、梵字、漢訳二訳の形式となっている。文の区切りもほぼ同じである。